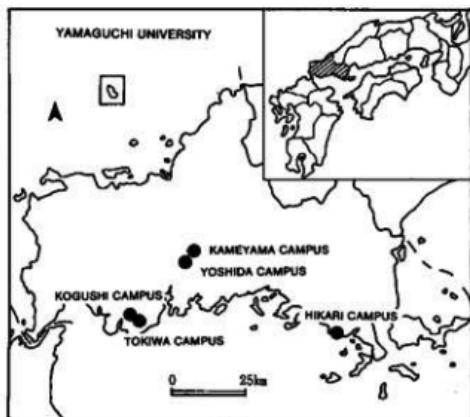


山口大学構内遺跡調査研究年報 XIII

1995

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報 XIII



1995

山口大学埋蔵文化財資料館

序 文

山口大学埋蔵文化財資料館の平成7年度の事業内容は、前年度の補正予算にかかる発掘調査がそのほとんどである。周知のとおり、この補正予算は不況脱出を図る政策予算であり、山口大学においても諸種の事業案が採択、認可され、そのなかに文化財保護法の適応を受ける案件がまとまって生ずる事態となった。

残業が恒常化している資料館には、新規の事業に着手できる余力はとてもなかつたので、ここに至り専任調査員として助手1名の増員をうけ、かろうじて発掘調査の現場に対処したのである。補正予算に係る調査は、野外から屋内に場所をかえて残業から解放されるにはまだ数年かかるであろう。

埋蔵文化財の取り扱いは、合法性と正当性とがかならずしも一致するものではないけれども、学内・学外を問わず、おおくの関係者から発掘調査のご支援を賜ることができた。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げるとともに、なにとぞ今後ともご理解とご鞭撻を賜りますよう、重ねてお願ひ申し上げる次第である。

山口大学埋蔵文化財資料館

館長 中村友博

例　　言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が、埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、平成5年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。また、付篇Ⅰとして「吉田遺跡第I地区D区の調査」を、付篇Ⅱとして「山口県弥生土器集成Ⅰ—山口市小路遺跡出土の前期弥生土器—」を掲載する。
2. 現地における調査・研究は、人文学部考古学研究室 今芳也の協力を得て、資料館員 豆谷和之・田崎美佐が担当した。また、出土遺物の整理は、同館員 佐野正子・田崎が行った。吉田遺跡第I地区D区の遺物整理は、豆谷・佐野が行った。
3. 調査・研究における事務一般は、平成5年度まで事務局庶務課学事係が、平成6年度からは事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。
4. 現地における遺構などの実測は、豆谷・田崎・今が行った。
5. 第2章の遺物実測は、人文学部考古学研究室 中村幸弘の協力を得て、田崎が行った。
付篇Ⅰの遺物実測は豆谷が行った。製図は、佐野が行った。
6. 本文の執筆は、第2章の一部と第3章第2節を田崎が行い、その他は豆谷がおこなった。
7. 現地及び遺物の写真撮影は、田崎の補佐を得て豆谷が行った。
8. 石器の石材鑑定は山口大学理学部助教授 永尾隆志氏、中世輸入陶磁器及び近世陶磁器については財團法人北九州市教育文化事業団 梅崎恵司・佐藤浩司両氏に助言を仰ぎ、懇切な御教示を得た。記して感謝の意を表したい。
9. 本書の編集は、豆谷が行った。
10. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせて埋蔵文化財資料館が保管している。
11. 調査担当は下記のとおりである。(平成5・6年度)

調査主体 埋蔵文化財資料館 館長 中村 友博
館員 豆谷 和之
同 村田 裕一〔平成6年7月1日～〕
同 佐野 正子
同 田崎 美佐

事務局	事務局長	萱沼 一 木村 盛〔平成6年4月1日～〕
本部庶務部	部 長	村上 昭生 本田 康司〔平成6年4月1日～〕
	課 長	岩本 義男
	課長補佐	松本 正史
学事係	係 長	原田 盛 宮崎 邦雄〔～平成6年3月31日〕
庶務係	係 長	森田 義富 笠井 政雄 片山 信一 横尾 薫 深尾ヒロ子

12. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な協力と援助を受けた（官職は平成5年度）

事務局庶務部	人事課長 平田徳康、同課長補佐 有吉 明、同係長 岡村秀幸、 同係 米山哲朗、森山 瞳、清廣哲之
経理部	部長 新藤 勇、主計課長 鈴木賢男、同課長補佐 石崎啓介、経理 課長 山口 博、同課長補佐 田中善人、総務係長 上谷克弘、予算 係長 牧原和仁、監査係長 長谷知之、管財係長 末次敏男、用度係 長 有近博成、同係 常國武志、田中 隆
施設部	部長 柳田耕治、企画課長 長岡節也、建築課長 平峰英一、同課長 補佐 上田孝雄、設備課長 池尻安宏、総務係長 上田隼一、同係 田坂武男、企画係長 三浦幸一、建築第一係長 小川賀津夫、同係 中谷幸一、武市佳人、建築第二係長 河田徹也、同係 澤谷弘美、電 気係長 吉永嵩生、同係 松田清司、岡野友資、前田康孝、機械係長 鈴木輝美、同係 鹿嶋正則、板垣健一
学生部	部長 降矢順治、次長 山口徹雄、学生課長 高井秀雄、同課長補佐 岩佐豈典、総務係長 萬代英夫、同係 庄野栄二、平岡朋子、学生係 長 山田直行、同係 新徳法正
人文・理学部	事務長 兵頭欣二、事務長補佐 藤川年章、同 柳 洋二、会計係長

平川和孝、同係 有吉義和

- 教育学部 事務長 西野雅博、事務長補佐 中村文徳、会計係長 荒石光明、附屬光中学校校長 末廣正巳、同副校長 神足 進、光附属学校係係長 浜田千春、同係 桑野博之、吉田常子、川上けい子
- 農学部 事務長 河野繁之、会計係長 中光博輝、同係 俵 雅宏、山根 博、池田浩弥子、寺西 智、小林広江、附属農場事務長 林 宏行、同係長 端野輝昭
- 医学部 事務部長 東府義之、同次長 喜西繁夫、総務課長 松添光弘、同課長補佐 原 和男、管理課長 今井 勝、同課長補佐 石川恒夫、亦野高志、庶務係長 楠元敏胤、総務係長 伊藤篤紀、経理係長 高崎明折、施設管理係長 三原秀脇、同係 村上民子、濱井富吉、田村勇治、建築係長 川西智信、設備係長 山本安雄、同係 吉野高己、吉井貞雄、前田祐史、橋本一範、弘中智則、田中武敏、田村悦夫
- 工学部 事務長 宮原 駿、事務長補佐 中島岩弘、庶務係長 宮部信之、経理係長 伊藤敏穂、管理係長 田中耕司

人文学部考古学研究室

作業員

<吉田構内第2屋内運動場新設に伴う試掘調査>

杉山久枝、原千寿恵、津野田志津子、高野和江、金子幸江

<吉田構内本部裏給水管路設に伴う発掘調査>

茨木重美、金海美代子、金子万代、金子幸江、末廣安子、杉山久枝、津野田志津子、原千寿恵、原百合子、深野生恵、亦野芳江、宮内和子

凡　　例

- 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、國土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA～24区南西隅を起点（構内座標 $x = 0$, $y = 0$ ）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（X, Y）と構内座標値（x, y）とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

- 各遺構は下記の記号で表記することがある。

土壤………SK, 溝状遺構………SD, 柱穴………Pit, 性格不明遺構………SX

- 本書に使用した方位は、吉田構内では國土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

- 標高数値は海拔標高を示す。なお、附篇Ⅰ「吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査」の遺構面に関しては、原図にレベルの読み値が記入されているが、機械高が不明の為に標高を求める事ができなかった。土層断面図には、読み値をそのまま記載した。

- 本文中の遺物番号は、挿図・図版・出土遺物観察表の番号と一致させた。

- 土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

- 土器の実測図は、下記のように器種分類した。

断面黒ぬり………須恵器, 断面白ぬり………縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器, 断面網目………陶磁器

本文目次

第1章 平成5年度山口大学構内遺跡調査の概要	（豆谷）	1
第2章 吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査	（豆谷・田崎）	5
1 調査の経過		5
2 第Ⅰ調査区上段部分		6
3 第Ⅰ調査区下段部分		14
4 第Ⅱ調査区		26
5 小結		28
第3章 平成5年度山口大学構内の試掘調査	（豆谷・田崎）	33
第1節 吉田構内の試掘調査		
1 人文学部・理学部講義棟新営に伴う試掘調査		33
2 第2屋内運動場施設新営に伴う試掘調査		35
3 農学部給水管埋設工事に伴う試掘調査		41
第2節 常盤構内の試掘調査		
1 工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査		43
2 工学部地域共同研究開発センター新営工事に伴う試掘調査		44
第4章 平成5年度山口大学構内の立会調査	（豆谷）	45
第1節 吉田構内の立会調査		
1 基幹整備（屋外他給水管改修）工事に伴う立会調査		45
2 農学部連合獣医学科棟新営電気設備工事に伴う立会調査		46
3 大学会館前庭バリカー設置工事に伴う立会調査		47
4 大学会館前庭部記念植樹に伴う立会調査		48
5 九田川河川局改良工事に伴う立会調査		49
6 農学部電柱立替え工事に伴う立会調査		50
7 農学部ガラス室設置工事に伴う立会調査		51
8 教育学部給水管埋設工事に伴う立会調査		52

9	環境整備（大学会館前庭）に伴う立会調査	53
10	環境整備（遺跡保存地区）に伴う立会調査	57
11	環境整備（正門周辺）に伴う立会調査	61
第2節 小串構内の立会調査		
1	医学部臨床実験施設新営その他工事に伴う立会調査	62
2	医学部附属病院基幹整備（焼却棟新営その他工事） に伴う立会調査	63
第3節 光構内の立会調査		
附属光中学校武道館新営その他工事に伴う立会調査		64

付 篇

付篇 I

吉田遺跡第I地区D区の調査	(豆谷) ...	65
1 調査の概要		65
2 第1地点		68
3 第2地点		72
4 第3地点		74
5 第4地点		78
6 第5地点		86
7 第6地点		88
8 第7地点		94
9 出土地点不明遺物		96
10 小結		97

付篇 II

山口県弥生土器集成 I

—山口市小路遺跡出土の前期弥生土器—	(豆谷) ...	103
--------------------	----------	-----

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則	117
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則	118
山口大学構内の主な調査	120
Summary	129

図版目次

<吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査>

P L. 1 吉田構内全景（北西から）

P L. 2 (1) 第Ⅰ調査区調査前全景（南から）

(2) 第Ⅰ調査区調査前全景（東から）

(3) 第Ⅰ調査区遺構完掘状況（東から）

P L. 3 (1) 第Ⅰ調査区遺構検出状況（西から）

(2) 第Ⅰ調査区遺構完掘状況（西から）

(3) 第Ⅱ調査区完掘状況（東から）

P L. 4 (1) 第Ⅰ調査区東端南壁土層断面

(2) 第Ⅰ調査区 SX-01付近南壁土層断面

(3) 第Ⅰ調査区近世大溝付近南壁土層断面

(4) 第Ⅱ調査区南壁土層断面

P L. 5 (1) 第Ⅰ調査区上段部分 Pit-01・02完掘状況（北から）

(2) 第Ⅰ調査区上段部分 Pit-03・04検出状況（南から）

(3) 第Ⅰ調査区上段部分 Pit-04足鍋出土状況（東から）

(4) 第Ⅰ調査区上段部分 Pit-03・04・05完掘状況（南から）

P L. 6 (1) 第Ⅰ調査区下段部分溝群検出状況（南から）

(2) 第Ⅰ調査区下段部分溝群完掘状況（南から）

(3) 第Ⅰ調査区下段部分柱穴群検出状況（西から）

(4) 第Ⅰ調査区下段部分柱穴群完掘状況（西から）

P L. 7 (1) SX-01出土遺物

- (2) Pit-04出土遺物(1)
 - (3) Pit-04出土遺物(2)
- P L. 8 (1) 第I調査区上段部分遺物包含層出土遺物
- (2) 第I調査区上段部分遺物包含層出土遺物
- P L. 9 (1) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ出土遺物
- (2) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ"・Ⅱ'出土遺物
- P L. 10 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ出土遺物
- P L. 11 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅰ出土遺物
- P L. 12 (1) 近世大溝出土陶器
- (2) 第2号溝出土遺物
- (3) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ出土鐵鎌
- (4) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ'出土鐵鎌
- (5) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ・Ⅱ'出土滑石製有孔円盤
- (6) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ"出土滑石製模造品鎌
- P L. 13 第I調査区遺物包含層出土青磁・白磁
- P L. 14 第I調査区遺物包含層出土石器
- <吉田構内第2屋内運動場施設新營に伴う試掘調査>
- P L. 15 (1) Aトレンチ全景(東から)
- (2) Bトレンチ全景(東から)
- (3) Cトレンチ全景(東から)
- (4) Dトレンチ全景(東から)
- P L. 16 (1) Aトレンチ北壁土層断面
- (2) Bトレンチ南壁土層断面
- (3) Cトレンチ北壁土層断面
- (4) Dトレンチ南壁土層断面
- P L. 17 (1) 大溝全景(東から)
- (2) 大溝全景(南から)
- (3) 大溝土層断面(北から)
- (4) 大溝出土遺物

付篇 I

<吉田遺跡第I地区D区の調査>

- P L. 18 吉田構内統合移転当時全景（昭和40年頃）
- P L. 19 (1) 吉田遺跡第I地区D区の全景（南西から）
(2) 第1・2・5地点全景（南西から）
(3) 第3・6地点全景（南西から）
(4) 第4・7地点全景（南西から）
- P L. 20 (1) 第1・2地点全景（南西から）
(2) 第2地点調査風景（南西から）
(3) 第1地点北壁土層断面
- P L. 21 (1) 第3地点遺構完掘状況（南西から）
(2) 第3地点第2・3号土壙（南西から）
(3) 第3地点竪穴住居跡状遺構の西肩？（南西から）
- P L. 22 (1) 第4地点竪穴住居跡状遺構（南西から）
(2) 第4地点第1号土壙（南東から）
(3) 第4地点東西トレンチ北壁土層断面（火山灰の再堆積層）
- P L. 23 (1) 第5地点全景（南から）
(2) 第5地点南東-北西トレンチ南壁土層断面（溝状遺構）
(3) 第5地点溝状遺構弥生土器出土状況（北東から）
- P L. 24 (1) 第6地点溝状遺構（東から）
(2) 第6地点東西トレンチ（西から）
(3) 第6地点東西トレンチ北壁土層断面（落込み西肩）
(4) 第6地点東西トレンチ北壁土層断面（落込み）
- P L. 25 (1) 第1地点出土遺物
(2) 第1地点出土遺物
- P L. 26 (1) 第2地点出土遺物
(2) 第2地点出土石鍋
(3) 第2地点出土砥石
- P L. 27 (1) 第3地点出土遺物
(2) 第4地点出土遺物

- P L. 28 (1) 第4地点出土遺物
 (2) 第4地点出土遺物
- P L. 29 (1) 第4地点出土遺物
 (2) 第4地点出土石器
- P L. 30 (1) 第4地点出土扁平片刃石斧
 (2) 第4地点出土砥石
- P L. 31 (1) 第5地点出土遺物
 (2) 第6地点出土遺物
- P L. 32 (1) 第6地点出土遺物
 (2) 第6地点出土石器
- P L. 33 (1) 第6地点出土石斧
 (2) 第6地点出土くぼみ石
 (3) 第6地点出土くぼみ石
- P L. 34 (1) 第7地点出土遺物
 (2) 出土地点不明弥生土器（第5地点？）
 (3) 出土地点不明遺物

挿 図 目 次

<平成5年度山口大学構内遺跡調査の概要>

Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図 2

Fig. 2 山口大学小串・常盤両キャンパス位置図 3

Fig. 3 山口大学光キャンパス位置図 4

<吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査>

Fig. 4 調査区位置図 5

Fig. 5 調査区設定図 6

Fig. 6 第I調査区上段部分遺構配置図・南壁土層断面図 7-8

Fig. 7 SX-01実測図・出土遺物実測図 9

Fig. 8 柱穴群実測図 10

Fig. 9	Pit-04実測図	10
Fig. 10	Pit-04出土遺物実測図	11
Fig. 11	第I調査区上段部分遺物包含層出土遺物実測図	13
Fig. 12	第I調査区下段部分遺構配置図・南壁土層断面図	15・16
Fig. 13	近世大溝実測図・出土遺物実測図	17
Fig. 14	溝群実測図・第2号溝出土遺物実測図	18
Fig. 15	柱穴群実測図	19
Fig. 16	第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ・Ⅱ'・Ⅱ''出土遺物実測図	21
Fig. 17	第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ出土遺物実測図	23
Fig. 18	第I調査区下段部分遺物包含層Ⅰ出土遺物実測図	25
Fig. 19	第I調査区遺物包含層出土石器実測図	26
Fig. 20	第II調査区平面図・南壁土層断面図	27

<平成5年度山口大学構内の試掘調査>

吉田構内の立会調査

人文学部・理学部講義棟新営に伴う試掘調査

Fig. 21	調査区位置図	33
Fig. 22	トレンチ設定図	34

第2屋内運動場施設新営に伴う試掘調査

Fig. 23	調査区位置図	35
Fig. 24	トレンチ設定図	36
Fig. 25	B・C・Dトレンチ土層断面図	37
Fig. 26	Aトレンチ大溝実測図	38
Fig. 27	Aトレンチ土層断面図	39
Fig. 28	Aトレンチ大溝出土遺物実測図	40

農学部給水管理設工事に伴う試掘調査

Fig. 29	調査区位置図	41
Fig. 30	トレンチ設定図	42

常盤構内の立会調査

工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査

Fig. 31	調査区位置図	43
---------	--------	----

工学部地域共同研究開発センター新営工事に伴う試掘調査

Fig. 32 調査区位置図	44
<平成5年度山口大学構内の立会調査>	
吉田構内の立会調査	
Fig. 33 調査区位置図	45
Fig. 34 調査区位置図	46
Fig. 35 調査区位置図	47
Fig. 36 調査区位置図	48
Fig. 37 調査区位置図	49
Fig. 38 調査区位置図	50
Fig. 39 調査区位置図	51
Fig. 40 調査区位置図	52
Fig. 41 調査区位置図	53
Fig. 42 立会地点位置図	55
Fig. 43 調査区位置図	57
Fig. 44 立会地点位置図	59
Fig. 45 調査区位置図	61
小串構内の立会調査	
Fig. 46 調査区位置図	62
Fig. 47 調査区位置図	63
光構内の立会調査	
Fig. 48 調査区位置図	64
付篇 I	
<吉田遺跡第I地区D区の調査>	
Fig. 49 調査区位置図	65
Fig. 50 トレンチ設定図	67
Fig. 51 第1地点土層断面図	69
Fig. 52 第1地点出土遺物実測図	71
Fig. 53 第2地点出土遺物実測図	73
Fig. 54 第3地点遺構配置図	75

Fig. 55	第3地点土層断面図	76
Fig. 56	第3地点出土遺物実測図	77
Fig. 57	第4地点遺構配置図	79
Fig. 58	第4地点土層断面図	81
Fig. 59	第4地点出土遺物実測図(1)	83
Fig. 60	第4地点出土遺物実測図(2)	84
Fig. 61	第4地点出土遺物実測図(3)	85
Fig. 62	第5地点土層断面図	87
Fig. 63	第5地点出土遺物実測図	87
Fig. 64	第6地点遺構配置図	89
Fig. 65	第6地点と昭和58年度再調査の位置関係図	90
Fig. 66	第6地点土層断面図	91
Fig. 67	第6地点出土遺物実測図(1)	92
Fig. 68	第6地点出土遺物実測図(2)	93
Fig. 69	第7地点土層断面図	95
Fig. 70	第7地点出土遺物実測図	95
Fig. 71	出土地点不明遺物実測図	96

付篇 II

<山口県内弥生土器集成 I - 山口市小路遺跡出土の前期弥生土器 - >

Fig. 72	小路遺跡第12号溝状遺構出土大型壺形土器実測図	105
Fig. 73	小路遺跡第12号溝状遺構出土有文壺形土器拓影	106
Fig. 74	小路遺跡第12号溝状遺構出土大型・中型壺形土器実測図	107
Fig. 75	小路遺跡第12号溝状遺構出土壺形土器拓影	108
Fig. 76	小路遺跡第12号溝状遺構出土壺形土器実測図	109
Fig. 77	小路遺跡第12号溝状遺構出土条痕文土器・その他土器拓影	110
Fig. 78	小路遺跡第12号溝状遺構出土浅鉢形土器・底部実測図	111
Fig. 79	山口大学吉田構内地区割および調査区位置図	131・132
Fig. 80	山口大学小串構内調査区位置図	133・134
Fig. 81	山口大学常盤構内調査区位置図	135・136
Fig. 82	山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図	137・138
Fig. 83	山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図	139・140
Fig. 84	山口大学光構内調査区位置図	141・142

表 目 次

<平成5年度山口大学構内遺跡調査の概要>

Tab. 1 平成5年度山口大学構内遺跡調査一覧表 1・2

<吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査>

Tab. 2 出土遺物観察表 29~32

<平成4年度山口大学構内の立会調査>

吉田構内の立会調査

Tab. 3 大学会館前庭部立会調査一覧表 54

Tab. 4 遺跡保存地区立会調査一覧表 58

付篇 I

<吉田遺跡第I地区D区の調査>

Tab. 5 出土遺物観察表 99~102

付篇 II

<山口県内弥生土器集成I－山口市小路遺跡出土の前期弥生土器－>

Tab. 6 小路遺跡第12号溝状遺構出土土器の器種別分類表 112

Tab. 7 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 119

Tab. 8 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 119

Tab. 9 山口大学構内の主な調査一覧表 120

第1章 平成5年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市（吉田・亀山構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散している。各構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、旧石器時代のまとまった遺物が出土する小串構内など周知の遺跡が埋蔵している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を行う工事に対し、埋蔵文化財保護の立場から調査・研究を行っている。埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺における既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合などを勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、事前・試掘・立会の三種の調査方法によって調査を実施している。

平成5年度は下記のように、事前調査1件、試掘調査5件、立会調査14件の計20件の調査を実施した。

Tab. 1 平成5年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地図	構内地図割	調査面積	調査期間	確認番号
事前	本部裏給水管埋設工事	吉田構内	K-L-13	約70.0m ²	9月7日～10月15日	Fig. 79-134
試掘	人文学部・理学部埋蔵新舍工事	吉田構内	M-29	約4.0m ²	7月13日	Fig. 79-135
調査	第2屋内運動場設新舍工事	吉田構内	G-16	144.0m ²	8月3日～8月18日	Fig. 79-136
調査	農学部給水管埋設工事	吉田構内	N-O-P-18	9.0m ²	10月21-22日	Fig. 79-137
調査	工学部プレハブ研究・実験棟新舍工事	常盤構内		12.0m ²	7月15-16日	Fig. 81-15
調査	工学部地盤改良免震センター新設工事	常盤構内		16.0m ²	7月15-16日	Fig. 81-16
立会	基幹整備（屋外施設水管改修）工事	吉田構内	L-15,N-17 M-18	各8.0m ²	5月6・8日	Fig. 79-138
立会	農学部連合試験室新電気設備工事	吉田構内	O-16	約4.0m ²	8月25-26日	Fig. 79-139
立会	大学会館前庭パリカー設置工事	吉田構内	N-14	約1.0m ²	8月31日	Fig. 79-140
立会	大学会館前庭部記念植樹	吉田構内	L-15	約1.5m ²	9月10日	Fig. 79-141
立会	丸田川河川床改良工事	吉田構内		約40.0m ²	10月26日	Fig. 79-142
立会	農学部電柱立替え工事	吉田構内	W-17	約0.2m ²	11月11日	Fig. 79-143
立会	農学部ガラス室改築工事	吉田構内	R-14	約10.0m ²	2月15日	Fig. 79-144
立会	教育学部給水管埋設工事	吉田構内	H-19,J-19	約15.0m ²	2月24-25日 3月1日	Fig. 79-145
環境整備	(大学会館前庭)	吉田構内	L-14-15 M-13-14-15 N-14-15	約141.0m ²	12月2日～2月17日	Fig. 79-146
環境整備	(道路保存地区)	吉田構内	H-20 J-19-20-21 L-20-21	約361.0m ²	12月8日～2月15日	Fig. 79-147
環境整備	(正門周辺)	吉田構内	H-12-13 F-G-13	約350.0m ²	1月6・21日 2月4日	Fig. 79-148

平成5年度山口大学構内遺跡調査の概要

調査区分	調査名	構内地区	構内地地区割	調査面積	調査期間	確認番号
立会	医学部臨床実験施設新宮その他の工事	小串橋内		約9.0m ²	4月5日 6月6日	Fig. 80-23
	医学部附属病院基礎施設 (施設構造等の施工事)	小串橋内		約6.0m ²	4月9日	Fig. 80-24
	附属光中学校武道館新宮その他の工事	光構内		約6.0m ²	7月5日	Fig. 84-15

吉田構内の調査 (本部、人文・教育・経済・理・農・農の各学部、教養部: 山口市大字吉田1677-1、教育学部附属幼稚園: 吉田町300番地)



本部裏給水管埋設に伴う事前調査では、給水管の管路が大学本部の立地する丘陵の等高線に対して垂直に交わっており、ちょうど丘陵から低地部に向かってトレシチを入れた状態となった。丘陵側は削平のため、わずかに中世の柱穴が検出されたのにとどまったが、低地部では1.0m以上の厚さで遺物包含層が堆積しており、その下からは、古墳時代から古代にかけての溝や柱穴が検出された。遺物には滑石製模造品や中世輸入陶磁器片がある。

第2屋内運動場施設新宮に伴う試掘調査では、大溝を1条検出している。大溝は2段掘りで、北東から南西方向に走行し、幅約4.0m、深さ約60cmの規模をもつ。弥生土器や須恵器などが出土しているが、大溝の時期決定が行えるような遺物は検出できなかった。

人文学部・理学部講義棟新宮に伴う試掘調査、農学部給水管埋設工事に伴う試掘調査とともに顯著な遺構・遺物は検出されなかった。

Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図

立会調査は環境整備関連を除くと、いずれも規模の小さいものであった。教育学部給水管理設工事に伴う立会調査では、遺物包含層や河川跡と思われる緑灰色シルトの堆積を確認した。大学会館前庭部及び遺跡保存地区の環境整備は、保存されている埋蔵文化財に注意を払った工法がとられた。部分的には遺物包含層まで掘削が及ぶことがあったが、関係部局の配慮により工法変更などの処置がとられた。

小串構内の調査（医学部、附属病院、医療技術短期大学部：宇都宮市大字小串1144所在）

立会調査を2件実施した。

調査は構内の中央と、真緋川に沿った構内東端で行われている。構内の中央で行われた臨床実験施設新営その他工事に伴う立会調査では、現地表から約2.0m下位において地山と考えられる青灰色粘質土層を検出している。青灰色粘質土は下層が徐々に青灰色粘砂へと変化し、貝殻を含んでいた。

構内の東端で行われた焼却棟新営その他工事に伴う立会調査では、真緋川に隣接するためか湧水が激しく、厚さ2.0mの造成土を確認するのにとどまった。

常盤構内の調査（工学部：宇都宮市常盤台2557、尾山宿舎：河上野中所在）

試掘調査を2件実施した。

構内は北から南に向かって、階段状に4段にわたって平坦に造成されている。今年度の調査は1段目と2段目において行われた。1段目の東側で行われた地域共同研究開発セン



Fig. 2 山口大学小串・常盤両キャンパス位置図

平成5年度山口大学構内遺跡調査の概要



Fig. 3 山口大学光キャンパス位置図

光構内の調査（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市大字布穂浦1-1所在）

立会調査を1件実施した。

光附属中学校武道館の新営に関しては昨年度に事前調査を行ったが、屋外排水管の布設が今年度に持ち越されていたため立会調査を行った。地表下約30cmで黒褐色砂層を検出した。武道館で検出した遺物包含層に対応すると考えられるが、遺物はわずかに数点の近世陶磁器類であった。

ター新営工事に伴う試掘調査では、テニスコートのマサ土を除去すると直に地山が露出した。遺構・遺物は皆無であった。東側に一段高く隣接する国立宇部工業高等専門学校との間は崖面となっており、本地点における削平の激しさを物語っている。

2段目の中側でプレハブ研究・実験棟新営に伴い試掘調査を行った。構内造成土の下には旧地表が残されていたが、旧地表の直下は地山であり遺構・遺物は皆無であった。1段目と同じく、激しい削平が及んでいる。

第2章 吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

1 調査の経過

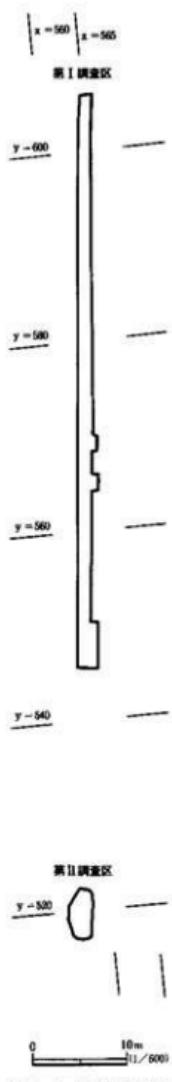
吉田構内校舎の老朽化により、給水管改修の必要が生じた。この改修に伴い、正門から実験水田の西側を通り直角に折れ、大学本部の裏側にある農学部飼料園から大学会館前まで東西に横断する新たな給水管の埋設が計画された。工事は、給水管の埋設に必要な幅約50cm、深さ約1.0mの管路を掘削するというものであった。このうち実験水田西側と大学会館前は、盛り土部分及び既調査部分であるため、埋蔵文化財への支障はないものと判断された。しかし、給水管が東西に横断する農学部飼料園は、姫山の支脈が張り出した洪積段丘の西端に位置し、過去には山口大学吉田遺跡調査団の調査によって遺物の包含が認められ、第Ⅰ地区D区として重要視された地域であった。¹⁾吉田遺跡調査団の調査以後も、埋蔵文化財資料館により周辺で調査が行われ、弥生時代から近世に及ぶ遺構・遺物が検出されている。²⁾特に、給水管埋設予定地の南側隣接地は、昭和59年度の排水管布設に先だって発掘調査が行われ、弥生時代～中世にわたる多数の遺構・遺物の埋存が確認されている。³⁾この調査は今回の給水管埋設区間に平行しており、その遺物包含層及び遺構検出面の深度から、給水管の埋設が埋蔵文化財へ影響を与えるものと予想された。

これらのデータをもとに、埋蔵文化財資料館運営委員会では審議が執り行われ、調査が必要であるとの決定がなされた。これをうけ埋蔵文化財資料館では、平成5年9月7日から10月15日にかけて発掘調査を実施した。なお、本学では試掘調査を経て事前調査を行うのを常とするが、今回は幅の狭い管路部分掘削に伴う調査であることや、隣接地の調査から地下の状況が判明していたため、そく事前調査を行うこととした。調査は給水管がこの丘陵の等高線に直行するかのように東西に埋設されるため、これに従い長さ100.0m、幅1.0mの調査区を設定した。調査区は大学造成時の盛り土が厚く、丘陵が下がるにつれて厚さ1.0mを超える箇所があった。



Fig. 4 調査区位置図

吉田橋内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査



調査区の幅が狭く壁崩落の危険性が生じたため、調査区東端より約60.0mの地点で一旦表土掘削を打ち切り、ここまでを第I調査区とした。そして、土層確認のため第I調査区西端より西側に約20.0m離れた地点を、長さ5.0m、幅2.0mの規模で掘削したものを第II調査区とした(Fig.5)。全体の調査面積は約70.0m²である。

なお、第I調査区は約60.0mと長く、調査区中央付近では段状に開墾され、上段と下段に2分されている。この上段と下段では、地山が異なり遺物包含層の状況も異なる。本報告では第I調査区を上段部分と下段部分に分け、報告を行うこととする。

2 第I調査区上段部分 (Fig.6, PL.2(2)-(3), 4(1)-(2), 5)

第I地区上段部分における基本層序は、次の順である。

第I層：褐色灰土（表土）

第II層：埋め土

第III層：灰色粘質土（旧耕土）

第IV層：褐色粘質土（遺物包含層Ⅰ）

第V層：褐色粘質土（遺物包含層Ⅱ）

第VI層：橙色粘土（鳥栖ローム）

第VII層：浅黄色粘土（八女粘土）

調査区東端からy=586m付近までの地山は鳥栖ロームであり、それより西側は八女粘土となる。本調査区内において鳥栖ロームの堆積する部分は標高が高く、遺物包含層及び遺構は削平により残存していない。八女粘土はy=581m付近において急激に落込み、その上部にはにごった火山灰層が堆積していた。上面において遺物を含んでいたため、SX-01とした。SX-01は火山灰の再堆積層や、近世における盛り土の可能性もある。SX-01が近世の盛り土であるとすれば、その上面で検出された包含層については、流れ込みによる再堆積層として検討する余地がある。

調査区上段部分において遺構が検出できたのは、y=584m付近の柱穴群のみである。柱穴群のうち、Pit-04からは足鍋が出土している。

Fig. 5 調査区設定図

南 側

E 22.0m

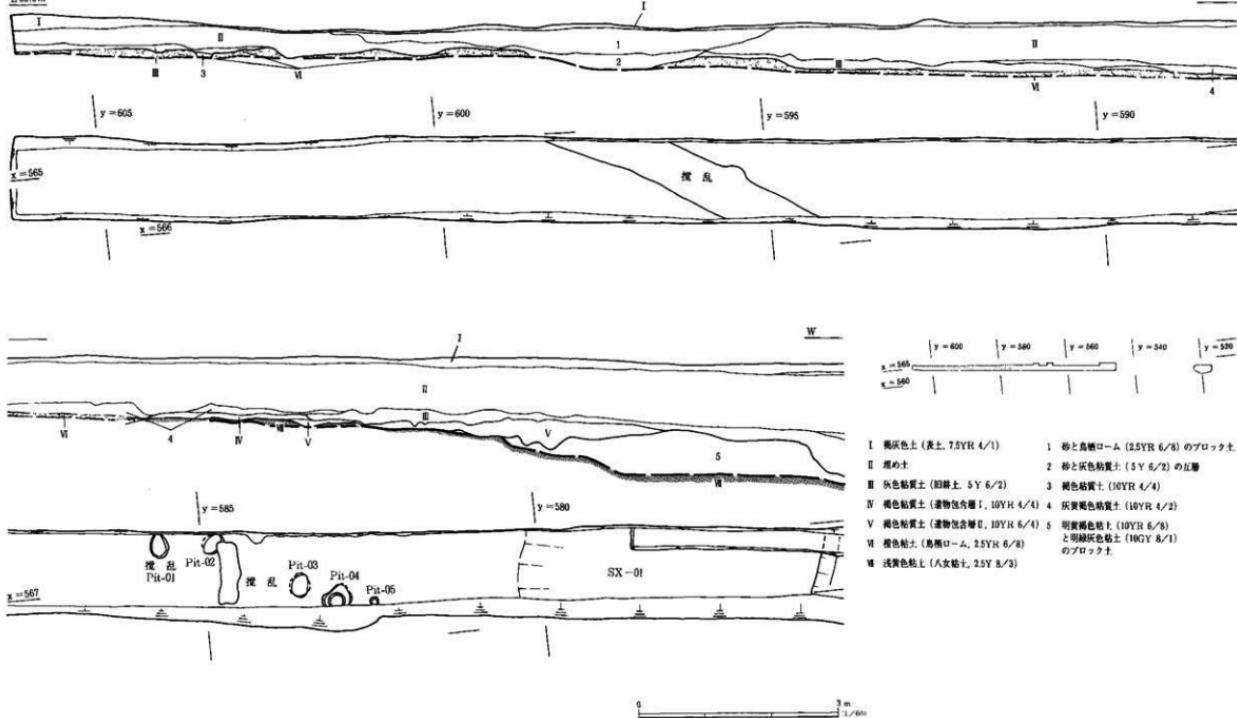


Fig. 6 第Ⅰ調査区上段部分地盤剖面図・隔壁土層断面図

第Ⅰ調査区上段部分

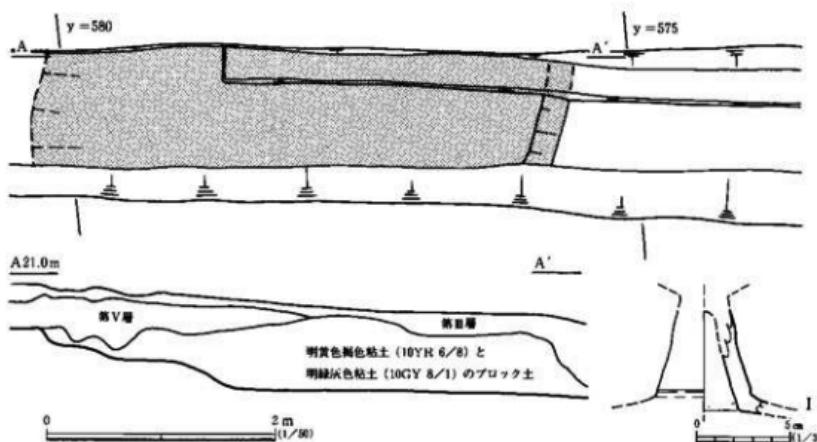


Fig. 7 SX-01実測図・出土遺物実測図

SX-01 (Fig. 7, PL.4(2))

上段部分の $y = 581\text{m}$ 付近から $y = 579\text{m}$ にかけて、地山である八女粘土が標高約 20.5m から標高約 20.0m まで落込み、その上部にはにごった火山灰層が $y = 576\text{m}$ 付近の上段部分と下段部分の境となる段まで、約 5.0m の範囲に堆積していた。上面から土師器高壺の脚部が出土したため、この地点を SX-01 とし一部深掘りを行い土層の堆積状況を観察した。

SX-01は標高 20.5m を遺構検出面とするが、 $y = 576\text{m}$ 付近ではその上面が標高 20.0m の地山面まで急激に落込み、段を形成する。埋土は明黄褐色粘土 (10YR 6/8) と明緑灰色粘土 (10GY 8/1) がブロック状に堆積している。土質は堅くしまっていた。土器が上面から出土してはいるものの SX-01 は人為的なものではなく、火山灰の二次的堆積層の可能性が強い。ただし、段部分は近世の棚田耕作によるものであり、SX-01が段形成のために運ばれてきた客土である可能性も残されている。調査区幅が 1.0m と狭いために、そのいずれかを判断することはできなかった。

SX-01出土遺物 (Fig. 7-1, PL.7(1))

1 は土師器高壺の脚部である。円錐形の柱状部と、柱状部より強く屈曲する裾部をもつ。裾端部は欠失する。外面の柱状部と裾部の境には強いヨコナデが施され、凹線状にくぼんでいる。風化が激しいために、他の調整を観察することはできなかった。その形態的特徴から、古墳時代中期のものと考えられる。

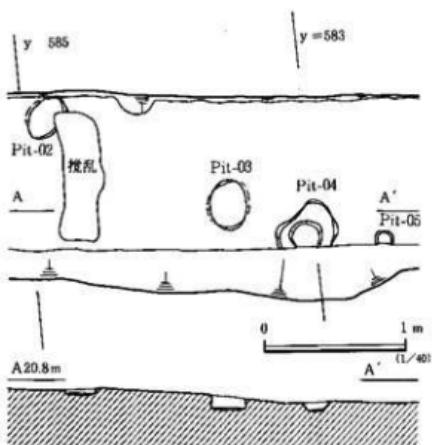


Fig. 8 柱穴群実測図

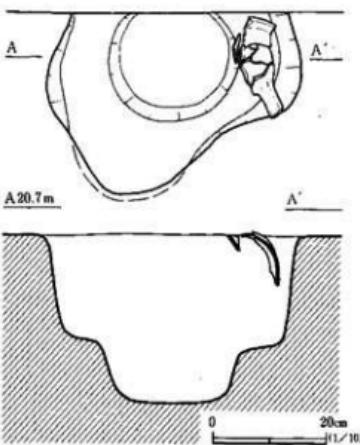


Fig. 9 Pit-04実測図

柱穴群 (Fig. 8, PL. 5)

上段部分からは、 $y=582 \sim 585\text{m}$ 付近に集中して4基の柱穴が検出されている。八女粘土層の上面を遺構検出面とし、その標高は $20.6 \sim 20.7\text{m}$ である。いずれの柱穴も埋土は、暗褐色粘質土 (10YR 3/4) である。なお、Pit-01はPit-02を切った擾乱と埋土を同じくすることから、現代遺構と判断し柱穴群には加えなかった。

Pit-02は西側の一部に擾乱を受けるが、直径約30cmの柱穴である。側面がややオーバーハングし、底面の標高は20.5mである。Pit-03は直径約30cmの柱穴である。側面がややオーバーハングし、底面の標高は20.6mである。Pit-05は直径約10cmの柱穴である。底面の標高は20.6mである。

Pit-04 (Fig. 9, PL. 5(2)・(3)・(4))

Pit-04は、Pit-03とPit-05に挟まれるようにして検出された。その一部が北側の調査区外に張り出しが、全形を推測することは可能である。2段掘りの柱穴で、標高20.65mで検出された上段の平面形は短軸約30cm、長軸約40cmの楕円形である。検出面から約20cm程の深さに1段目の底面がある。この底面中央に、直径約20cmの円形の平面形を呈する2段目が掘りこまれる。2段目の底面の標高は20.36mである。埋土は暗褐色粘質土 (10YR 3/4) であった。この柱穴の上面で、足鍋が検出された。足鍋は横にされた状態で埋没しており、柱穴検出時には破片の上端が露出していた。

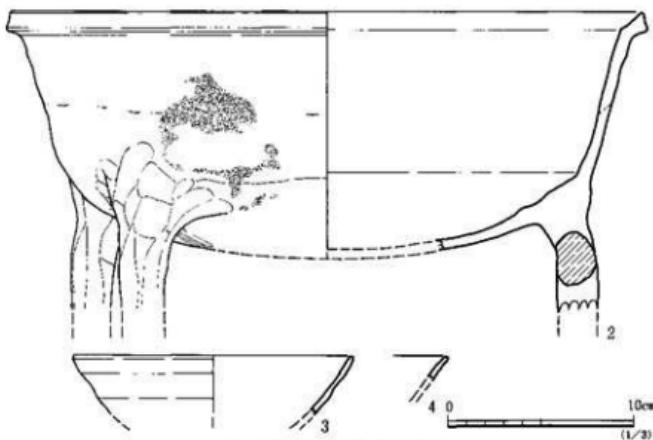


Fig. 10 Pit-04出土遺物実測図

Pit-04出土遺物 (Fig.10-2・3・4, PL.7(2)・(3))

2は足鍋である。口縁部から胴部下半および1本の脚部が残存している。全体の約1/4の破片である。径のやや大きいボール状の胴部に、短く屈曲した口縁部をもつ。口縁部は肉厚でその端部は幅広い面をもち、上端をややつまみ出すことによって拡張している。底面から胴部へのかすかな変換点で、脚部を貼り付けている。脚部の貼付け位置に対応した胴部内面には、押さえによる指頭圧痕が残る。脚部は中程で欠損するため、脚端部の形状は不明である。

外面はナデによる最終調整を行うが、胴部の中位には接合痕を残している。また、底面はナデ調整の下にタタキ痕を確認することができる。タタキは格子目である。内面は横方向にナデ調整が行われ、条線を残す。脚部は「にぎりしめ」による指頭圧痕が明瞭に残る。胴部外面には吹きこぼれによる煤がぶ厚く付着する。底面及び脚部内側は、二次焼成により赤褐色を呈する。内面には焦げ付きは認められないが、底面があれでいる。その形態的特徴より、岩崎編年のⅡ型式のものと考えられる。

3・4は土師器碗である。3は風化による器面の剥落が激しいが、外面にはロクロ成形による凹凸を残す。口縁端部断面は、やや棱をもつ。4は被片がきわめて小さい。口縁部外面には、ヨコナデによる条線を残す。口縁端部断面は、やや棱をもつ。3・4ともに色調は白色を呈し、胎土は精製粘土を使用する。

第Ⅰ調査区上段部分遺物包含層出土遺物 (Fig.11-5~20, PL.8(1)・(2), 13)

5・6は瓦質土器の鍋の口縁部である。5は口縁部を外方に「く」の字状に短く屈曲させる。口縁部下端をつまみ強いヨコナデを施すため、下端は下方に突出する。また、上端も強いヨコナデが施されるため、上端が突出し口縁部内面はかすかにくぼむ。上端、下端に施されたヨコナデにより口縁端部は拡張され幅広い面をもつ。6は口縁部と胴部の境に施されたヨコナデが強いため、胴部が凹線状にくぼむ。このヨコナデにより、口縁部は「く」の字状に強く屈曲する。口縁上端部は強いヨコナデによってつまみあげられる。5・6ともに胴部を欠くために、脚部の有無は不明である。口縁部の特徴から、5は岩崎編年のⅢ型式、6は岩崎編年のⅣ型式と考えられる。

7は瓦質土器のこね鉢の口縁部である。口縁部は粘土を外側に折り返し肥厚させる。このため外面の口縁部下には、明瞭な接合痕が残る。口縁外端部はヨコナデにより三角形状に突出し、口縁部内端もまたヨコナデにより内側に突出する。風化が激しい。8は瓦質土器で粘土帯を口縁部内側に貼り付け肥厚させた、いわゆる防長型すり鉢である。口縁端部の上面は幅広く、その上面はヨコナデによって凹線状に2条のくぼみがある。内面の口縁接合痕より約1cm下に6条の卸目が確認できるが、破片のため卸目の単位をつかむことはできなかった。その特徴より、岩崎編年のⅢ期と考えられる。9は土師質土器のほうろくである。口縁端部を内側に折り返し、玉縁状にする。風化が激しい。外面には長軸1.5cm、短軸8mmもある大粒の種子圧痕をもつ。10は瓦質土器の底部である。小片のため器種は不明であるが、内面が使用により光沢をもつことから、こね鉢とも考えられる。底部側面は凹凸が激しい。11は土師器皿の底部と考えられる。底面はややくぼみ、立ち上がりは直立気味である。12~14は足鍋の脚部である。いずれも風化が激しく、端部を欠く。外面には「にぎりしめ」による指頭圧痕を多数残す。

15は伊万里製の青磁碗と考えられる口縁部の破片である。白色の素地に、やや青みがかった釉薬がかけられる。17世紀後半のものか。16は小破片のため器種及び年代は不明な青磁である。灰白色の素地にやや緑色の釉薬がかけられる。中世の輸入陶磁器か。17は陶器の底部であるが、小破片のため器種及び产地、年代は不明である。破片への施釉は認められない。18は土鍋の底部である。内面には鉄釉が掛けられる。復元底径は6.2cm。18世紀末と考えられる。19は大鉢である。外面は口縁部より約1cmほど下に、白土を帯状に配し、その部分に櫛刷毛目による波状文を施す。内面は口縁端部と、口縁部より約2cmほど下に白土を帯状に配する。内外面には木灰による緑色の釉が施されるが、外面下半部は露胎で

第Ⅰ調査区上段部分

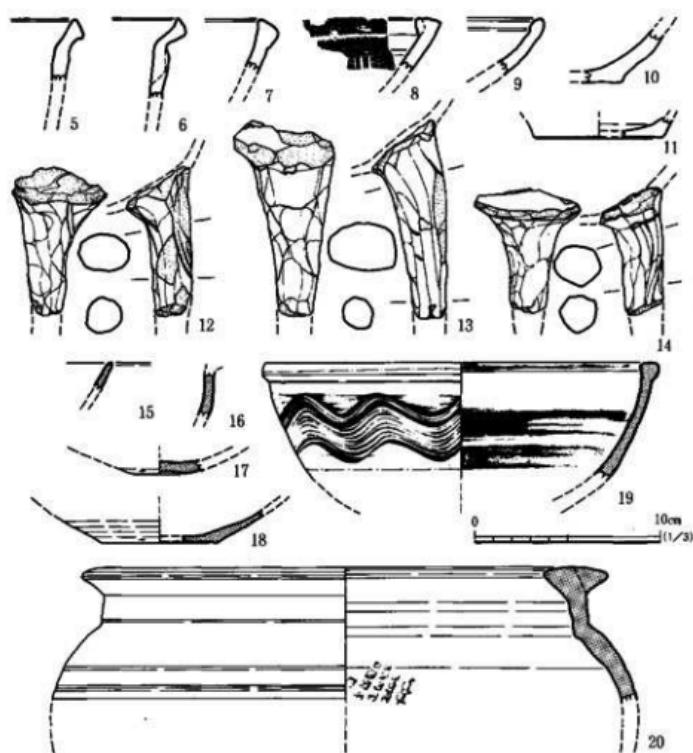


Fig. 11 第Ⅰ調査区上段部分包含層出土遺物実測図

ある。また、口縁上面は釉を拭き取っている。復元口径は19.2cmを測るが、片11をもつ可能性もあり、その数値には若干の誤差が含まれると考えられる。唐津系で、17世紀末～18世紀前半の年代が考えられる。20は水甕の口縁部および胴部上半の破片である。短く直立した頸部から口縁部が内外に拡張されており、断面はT字形を呈する。胴部には現状では3条の凹線が認められる。内面には格子目のあて具痕を残す。外面および内面に鉄釉を施すが、口縁上面は釉剥ぎを行う。唐津系で、17世紀後半～18世紀前半の年代が考えられる。

3 第I調査区下段部分 (Fig.12, PL.3(1)・(2), 4(3), 6)

第I調査区下段部分における基本層序は、次の順である。

第I 層：褐灰色土（表土）	第I b層：橙色砂質土（マサ土）
第II 層：緑灰色粘土ブロック（埋め土）	第II b層：緑灰色バラス（埋め土）
第III 層：灰色粘質土（旧耕土）	第III b層：黄褐色粘質土（床土）
第IV 層：黄褐色粘質土（遺物包含層I）	第V 層：灰黄色粘質土（遺物包含層II）
第Vb層：灰黃褐色粘質土（遺物包含層II'）	第Vc層：黄橙色粘質土（遺物包含層II'')
第VI 層：黒褐色粘土（遺物包含層III）	第VII 層：浅黄色粘土（八女粘土）

第I調査区下段部分は現在の地形と同じく、八女粘土の地山が東から西に向かって傾斜している。このため $y = 570\text{m}$ 付近までは地山の検出面が標高19.94mと高く、耕作による削平を受けており、遺物包含層及び遺構は残存しなかった。遺物包含層は地山の傾斜に対応して徐々に厚くなる。第I調査区西端の近世大溝に隣接した部分では、地山の八女粘土が標高18.6mと著しく落込むが、これに反比例して遺物包含層の厚さは1.0mを超えていた。遺物包含層はその色調や土質から、I・II・IIIの大きく3層に分けることができた。また、遺物包含層IIについては、色調の濃淡から更に3細分することができる。遺物包含層Iからは土師器焼や瓦質鍋、青磁、白磁などが出土している。遺物包含層IIも土師器焼や青磁・白磁などが出土し、遺物包含層Iの遺物内容とほぼ同様である。遺物包含層II'はわずかに土師器焼や雁段の鉄鏃など中世遺物を含むが、古墳時代の須恵器や土師器の量が増す。遺物包含層II''は全く中世遺物を含まず、出土遺物は古墳時代の須恵器や土師器で構成される。遺物包含層IIIの出土遺物は、弥生土器や土師器を主体としてわずかに須恵器片を含んでいる。このように、遺物包含層の出土遺物は下層から上層へと新しくなるのであり、搅乱を受けることなくほぼ正常な堆積状況を示しているといえよう。

近世大溝を除く遺構は、八女粘土の上面あるいは遺物包含層IIIの下層で検出される。それぞれの遺物包含層上面でも精査をおこなったが、遺構を検出することはできなかった。検出された遺構は、溝3条と柱穴13基である。これらの遺構からの出土遺物は少なく、土師器焼が出土した第2号溝を除いて時期決定は困難であった。ただし、遺構上面に堆積する遺物包含層の遺物をもって、遺構の下限年代を推測することは可能である。近世土師器皿を含んだ遺物包含層I及び遺物包含層IIが上面を覆う溝3条は、近世以前の年代が与えられる。古墳時代の須恵器を含んだ遺物包含層IIIが上面を覆う柱穴13基は、古代以前の年代が与えられる。これらの遺構については調査区が狭く、その性格を明らかにするには到らなかった。

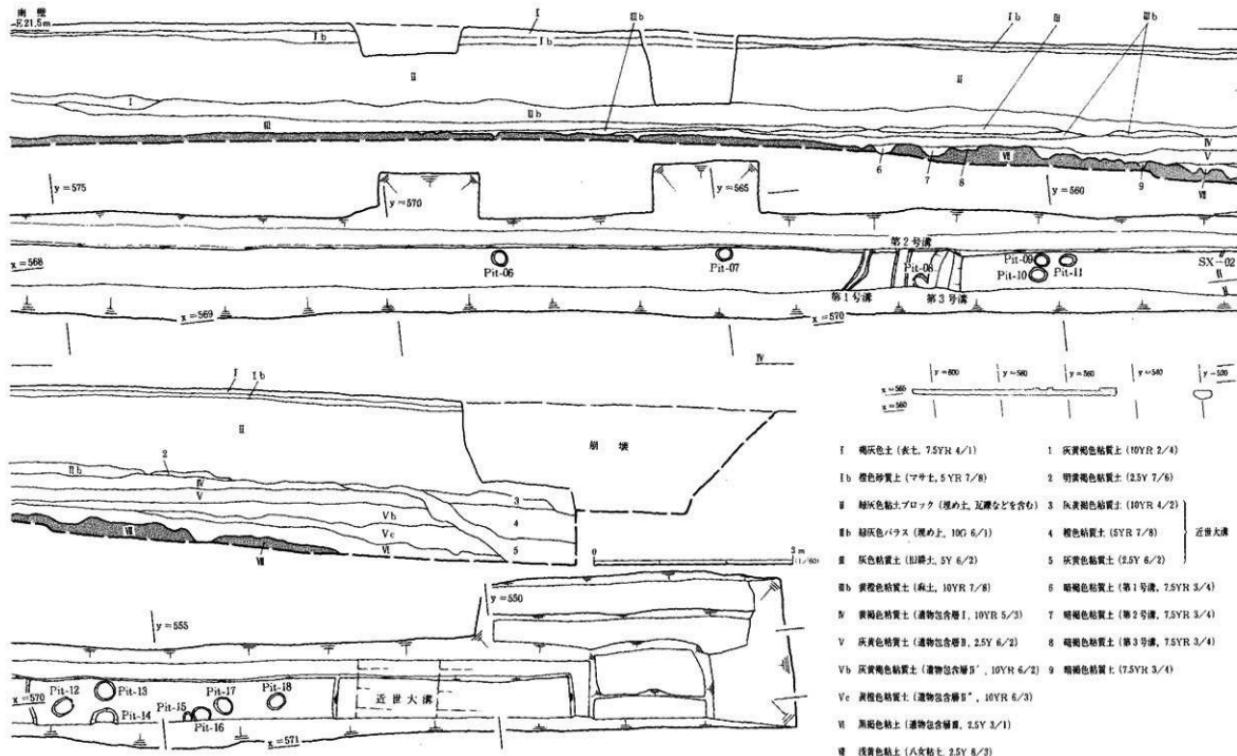


Fig. 12 第1調査区下段部分地盤構成図・南壁土壌断面図

第I調査区下段部分

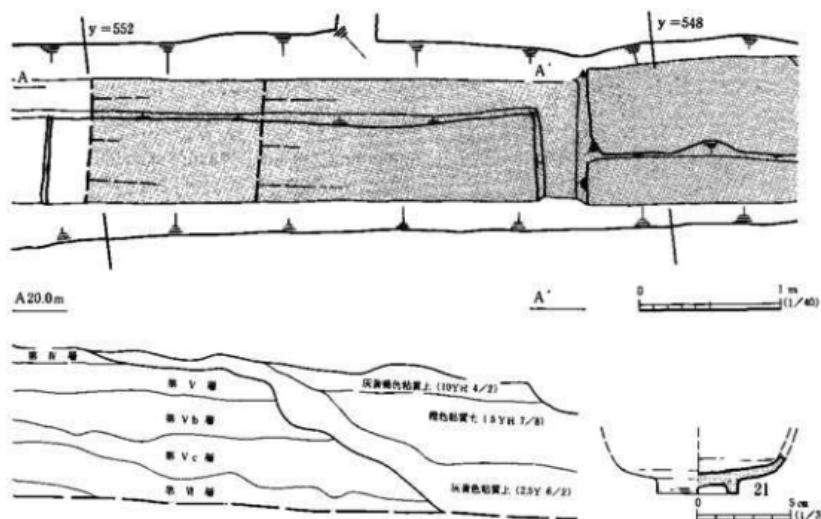


Fig. 13 近世大溝実測図・出土遺物実測図

近世大溝 (Fig. 13, PL. 4(3))

旧地形の落込みが次第に激しくなるy=552付近において近世大溝の東肩が検出された。現地表より約2.5m、検出面から約1.2mまで掘り下げを行ったが底面には到達せず、そのうえ地盤が脆弱で壁面が崩落したため、作業を中止した。よって、溝の幅や深さは未確認である。埋土中に多量の鳥柄ロームを含む層があり、この大溝は後方の丘陵上部から運ばれた土砂により一気に埋め立てられたものと考えられる。現在、本調査区南側にある本部2号館の西側は崖面となって一段さがり、車庫へと続いている。統合移転前の状況を知る人物より、この崖面は当時のままで、その直下には水路があったとの教示を得た。本調査で検出した大溝は、位置的にもこれに連なるものであろう。

近世大溝出土遺物 (Fig. 13-21, PL. 12(1))

21は陶器皿である。形態は水平に近い底部から甘く屈曲した腰部を経て、胴部が垂直に立ち上がっている。胴部上半及び口縁部を欠くが、短く終わるものと考えられる。高台を持つが径4.4cmで、腰部の径8.4cmに比べてやや小さめである。内外面及び縁付にいたるまで緑灰色の上灰釉が施される。見込みと縁付に、窯積み時の砂目痕がみられる。唐津系で、17世紀前半の年代が考えられる。

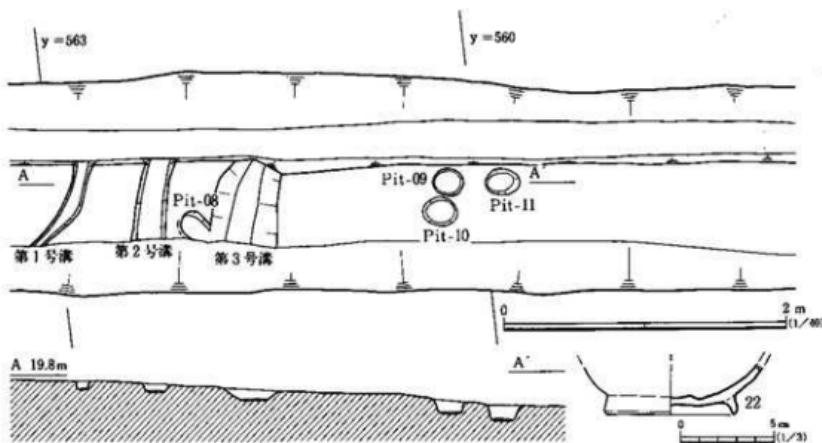


Fig. 14 溝群実測図・第2号溝出土遺物実測図

溝群 (Fig.14, PL.6(1)・(2))

$y = 562 \sim 563$ の付近で、八女粘土を遺構検出面として 3 条の溝が検出された。遺構検出面の標高は 19.75m である。3 条の溝は南北方向に軸をもち、ほぼ平行している。東側から、第 1 号溝、第 2 号溝、第 3 号溝とする。第 1 号溝は幅約 10cm、検出面からの深さは約 6cm で、底面の標高は 19.7m である。第 2 号溝は幅約 20cm、検出面からの深さは 4 ~ 6cm で、底面の標高は 19.68m である。第 3 号溝は幅約 50cm、検出面からの深さは約 10cm で、底面の標高は 20.61m である。いずれも規模は小さい。溝群はヘラ切り底の土器器皿が出土した第 2 号溝を除いて、時期決定となる遺物はほとんど出土していない。第 1 号溝からは固化が不可能な瓦質土器が出土している。ただし、これらの溝の上面は包含層 I によって覆われており、包含層 I が含む土器器皿など中世末～近世初頭の遺物から、溝の下限年代は中世で収まるものと考えられる。

第2号溝出土遺物 (Fig.14-22, PL.12(2))

22 は第 2 号溝の底面に貼り付くようにして出土した土器器皿である。高台部分は完存するが、胴部の大半は欠失する。高台は貼り付けで、内弯気味に高く突出する。底面には同軸ヘラ切り痕及び、板状圧痕をのこす。見込み中央には、ユビオサエによる粘土の盛り上がりを残し、ロクロ成形の始点を示している。胎土には 1 ~ 2mm の砂粒を多量に含み、色調は灰白色を呈する。内外面共に風化が激しい。

第Ⅰ調査区下段部分

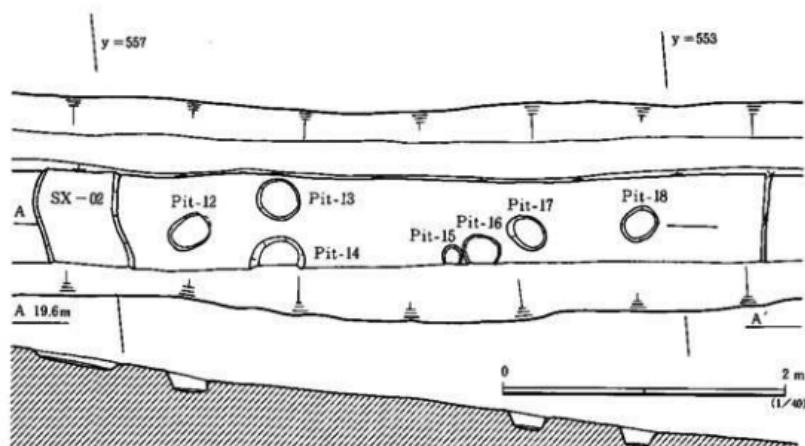


Fig. 15 柱穴群実測図

柱穴群 (Fig. 15, PL. 6(3)・(4))

$y=557\sim 553$ mの付近で、地山の八女粘土よりもわずかに高く、第VI層黒褐色粘質土の下層を遺構検出面として、柱穴群が検出されている。柱穴は、Pit-12～18の7基である。検出面の標高は、東端のPit-12がもっとも高く19.2mであり、もっとも低い西端のPit-18が18.86mである。東端と西端の柱穴検出面の比高差は、約30cmである。柱穴の直径は、約15cmのPit-15と約40cmのPit-14を除いて、いずれも30cm前後である。検出面から底面までの深さは、5～15cmである。

これらの柱穴群の埋土はほとんど遺物を含まず、Pit-12・14・15からわずかに土器片が、Pit-18からは土器片と凝灰岩の剥片が出土するのにとどまった。いずれも、時期を決定することは不可能な小片であった。しかし、柱穴群の遺構検出面は、弥生土器や土師器を主体としてわずかに須恵器を含んだ第VI層の下層にある。少なくとも、第VI層の上層が形成される以前の柱穴群であり、古墳時代後期以前に位置づけられる可能性が高い。埋土の色調によって、柱穴群における時期差を見いだす方法もあるが、Pit-13が灰褐色粘質土 (7.5YR 5/2) の他はいずれも黒褐色粘質土 (7.5YR 2/2) であり、色調に差はなかった。これらの柱穴群がどのような遺構に伴うものかは、調査区幅が狭いため明らかにすることはできなかった。しかし、直径30cm前後でまとまりをもつことから、住居跡に伴う柱穴であった可能性もある。

第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅲ出土遺物 (Fig.16-23~35, PL.9(1), 12(3)~(5))

23・24は壺の口縁部である。23の口縁部は如意状を呈する。弥生時代前期のものと考えられる。24の口縁部は「く」の字に外反する。口縁外面にはタテハケを施し、口縁端部は面をもつ。25は壺の底部である。底部は台状に裾部が突出する。外面は二次焼成により、淡赤白色を呈する。その特徴より、弥生時代中期のものと考えられる。26は弥生時代後期終末の器台かとも考えられるが、口縁部の立ち上がり及び脚部に相当する部分を欠くため判然としない。受け部の内面にはラセン状にハケが施されている。受け部の外端には継ぎザミが施されている。27は弥生時代後期の複合口縁壺の口縁部である。大きく開いた受け部のやや内側より口縁部が立ち上がる。口縁端部は面をもち、その端部は内側にも外側にも突出する。立ち上がった外面には波状文が多段に施され、受け部の端部には上下2段に竹管文が施される。28~31は土師器の高坏である。28~30は坏部であるが、28・29は口縁端部を欠失している。30は口縁端部が残存するもので、外反し端面は丸い。31は脚部である。裾部は強く屈曲する。柱状部の内面には右方向のケズリが施される。32・33はミニチュア土器の壺である。34は器種不明の鉄器である。35は滑石製模造品の有孔円盤である。約1/2を欠失する。円盤の中央には、径約1.5mmの円孔がうがたれる。円盤の裏表には、一次研磨の幅広い削痕が認められ、未製品の可能性がある。やや厚みをもつ。

第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅱ' 出土遺物 (Fig.16-36~42, PL.9(2), 12(6))

36は「く」の字に外反する壺の口縁部である。口縁外面にはタテハケを施し、口縁端部は面をもつ。37は高坏の脚部と考えられる。破片の上部には、円孔の透かしが二つ認められる。ハケ調整を残した外面には、朱が塗布される。38~41は土師器の高坏である。38・39は坏部である。38は口縁端部を外反させ端面は丸い。39は外面屈曲部がわずかに突出している。40・41は脚部である。40は脚裾部が強く屈曲しており、端部は面を持つ。器壁は薄く、胎土には精製粘土を使用する。41は裾部が屈曲するが、その屈曲はさほど強くはない。器壁もやや厚く、胎土には粗い砂粒を混えている。42は滑石製模造品の鏸である。直線的な刃部を表現している。基部には円孔がうがたれている。

第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅱ' 出土遺物 (Fig.16-43~46, PL.9(2), 12(5))

43は垂下口縁壺の頸部である。断面三角の突帯が間隔を開けて、2帯以上貼付けられている。44は須恵器の高坏である。坏部および脚裾部を欠く。脚部の中程に凹線が巡る。45は雁又の鉄鏸である。鏸による腐食が激しく、範被の有無は不明である。46は滑石製模造品の有孔円盤である。二次研磨により薄く仕上げられている。

第Ⅰ調査区下段部分

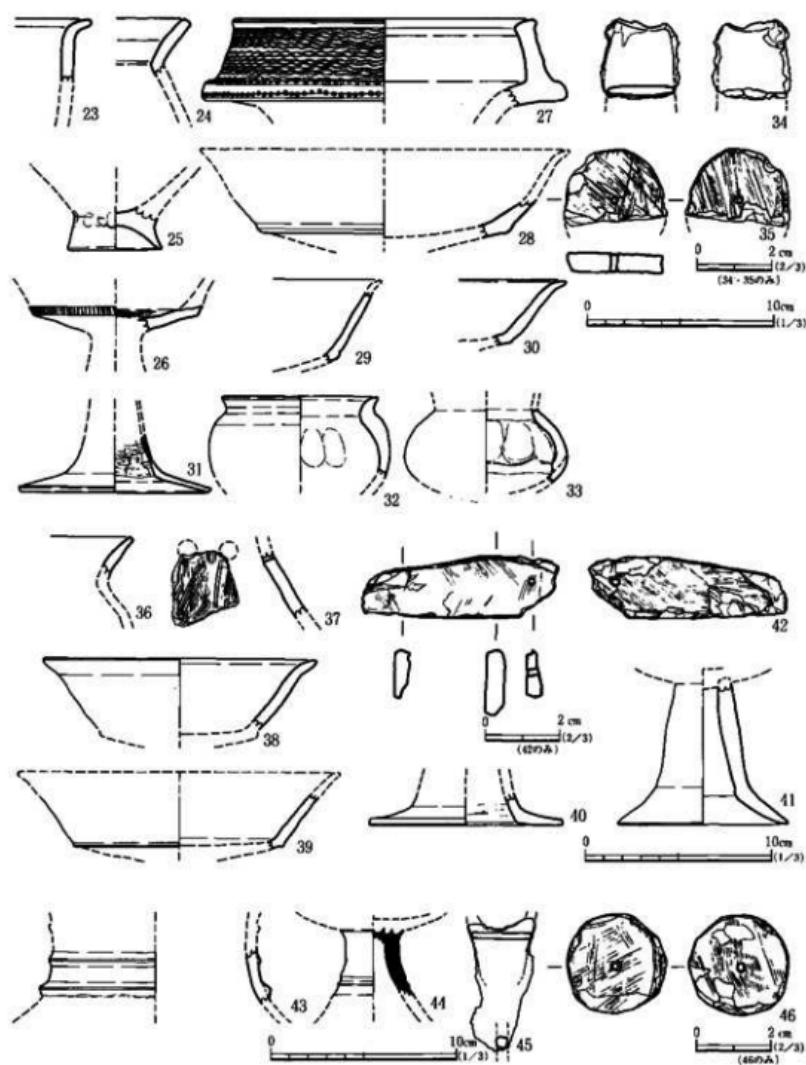


Fig. 16 第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ出土遺物実測図

第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅱ出土遺物 (Fig.17-47~71, PL.10, 13)

47は弥生土器の高坏脚部である。坏部と脚裾部を欠失する。残存部分は円柱状を呈し、中空である。器面の風化が激しく、調整を観察することができない。その形態から、後期後半と考えられる。

48は須恵器長頸壺である。頸基部の部分的な破片である。外面基部は接合のナデによって、凹線状にくぼむ。内面に頸胴部の接合痕を明瞭に残す。49は高台をもつ須恵器坏の底部である。底部から胴部への屈曲部に接して高台が貼付けられる。胴部と高台端部は欠失する。底径は7.0cm前後と小さい。

50は土師器の壺と考えられる。口縁部は外方に引き出され、口縁部上面が凹線状にくぼむ。器面にはロクロ成形によるものと考えられる凹凸が認められる。胴部を欠損するが、長胴になると考えられる。胎土には1mm前後の砂粒を多量に含んでいる。51は土師質土器の鍋である。口縁部に接して鈎のついた、いわゆる羽釜と呼ばれるタイプである。鈎は水平ではなく、やや斜め上に突出している。鈎の上面はヨコナデによって浅く、くぼんでいる。外面は鈎より下にタテハケ調整、内面にはヨコハケ調整が施されている。外面の鈎から下は煤が密に付着する。

52~64は土師器壺である。52・53は口縁部の破片で風化が激しいが、外面にはロクロ成形による凸を残す。53の直口氣味の口縁部に対して、52の口縁部はやや内弯する。54~61は底部の破片で、高台をもつものである。54は断面が方形のしっかりとした高台をもつ。胎土は精製粘土を使用し、風化が激しい。55~57は低いが肉厚の高台をもつものである。55の高台端部は面をもたない。胎土に砂粒を多く含む。56は風化が激しく、高台の形状は明瞭ではない。胎土は精製粘土を使用する。57の高台は、幅が厚いのに対し高さは低い。胎土は砂粒を多く含む。58は高いが華奢な高台である。高台端部が内側にやや巻き込まれている。胎土は精製粘土を使用する。59~61は断面が三角形の細い高台をもつものである。59は器壁がやや薄く、底面には板敷状の圧痕を残す。胎土は精製粘土に微砂粒を多く含む。60・61は胎土に精製粘土を使用し、色調は白色を呈する。いずれも器面の風化が激しい。62~64は高台をもたない底部である。胎土には赤色斑粒を含んだ精製粘土を使用するが、器面の風化が激しい。大型の皿の底部である可能性もある。

65・66は土師器皿の底部である。いずれも風化が激しい。65は風化した底面に、かすかな糸切り痕を残している。胎土には微砂粒を多く含む。66はロクロから切り離す際の工具痕を、底部側面に残す。胎土は精製粘土に赤色斑粒を含んでいる。

第 I 調査区下段部分

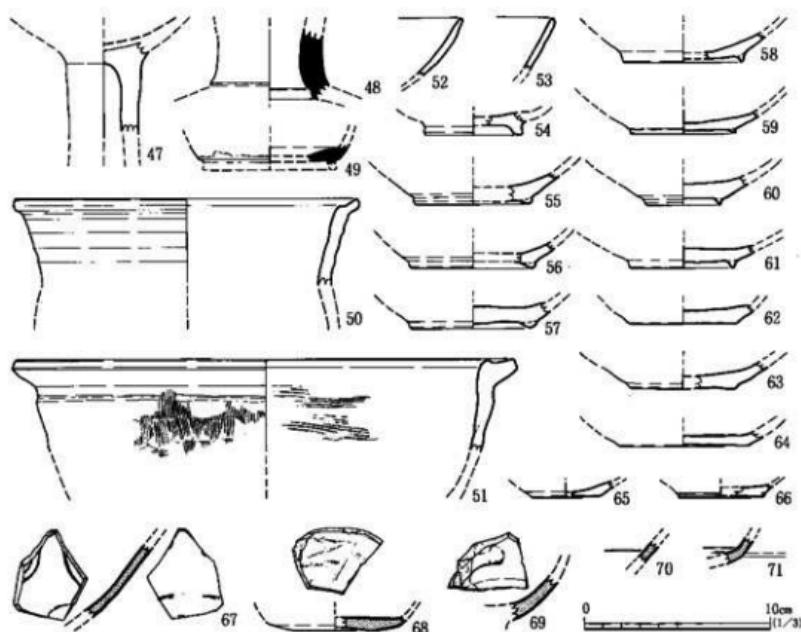


Fig. 17 第 I 調査区下段部分遺物包含層 II 出土遺物実測図

67・69は龍泉系の青磁碗である。67は体部内面に片彫りによって、蓮華文が施されている。また、体部外面下半には、凹線が一条巡っている。69は胴部下半の高台に近い破片である。内面には片彫りによって蓮華文が施されている。いずれも12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。

68・71は同安系の皿である。68は内面見込み部に、ヘラによる片彫りと櫛による刺突によって草花文を施す。全面施釉した後、底面の軸はカキ取られ露胎となる。71は内面の体部と見込み部の境に沈線状の段を有する。内面は櫛による文様が施される。底部の軸はカキ取られ露胎となる。いずれも12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。

70は白磁碗である。内面見込み部に沈線状の段をもつ。玉縁の口縁をもつ器形の胴部片と考えられる。

第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅰ出土遺物 (Fig.18-72~119, PL.11, 13)

72は本調査で唯一出土した縄文土器片である。風化が激しいが、外面には貝殻条痕、内面にはケズリ痕が観察できる。

73~92は土師器碗である。73・74は口縁部片である。73は胎土に精良な粘土を使用する。74は胎土に微砂粒を含む。いずれも、口縁端部が甘い面をもって外面に傾斜し、内面は端部から約1.5cm下までがヨコナデによって浅くくぼむ。75~88は高台をもつ土師器碗の底部片である。75~77は高台が高く突出するものである。いずれも胎土は粗い。75は底面にヘラ切り痕を残す。78は端面がやや丸い断面三角形の高台がつくが、胎土に微砂粒を多量に含む。79は高い高台をもつが、胎土は精良な粘土を基本として大粒の砂粒を含むものである。80~83は端面がやや丸い断面三角形の高台をもつもの。81・82は胎土に精良な粘土を用いる。84~88は低い断面カマボコ状の高台をもつもの。いずれも胎土は精良な粘土である。89~92は高台をもたないもの。89・91は底面に糸切り痕をもつ。

93~97は土師器皿である。いずれも風化が激しい。93は唯一口縁部から底部までの全形がわかる個体である。底部からの立ち上がりは短く、口縁端部は丸い。94・95は底部がやや厚めのものである。

98~106は瓦質土器の鍋である。いずれも風化が激しい。98は外側に「く」の字に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は面をもち、浅い2条の凹線が施されている。瓦質土器と思われるが、風化が激しく色調は淡赤褐色を呈しており、瓦質土器の鍋とは時期や器種が異なる可能性もある。99~101は口縁部に接して鈎が貼り付けられるもので、いわゆる羽釜である。99・100は風化が激しいが、101は比較的残存状態が良く、外面の鈎より下に煤が付着している。102は足鍋の脚部である。103~106は鍋口縁部の小片である。いずれも口縁端部がさほど内面に突出しておらず、岩崎縦年の皿型式に属する。ただし、106に関しては口縁部の屈曲がなく、鍋ではなく鉢の可能性がある。内面にはヨコハケ調整を残す。

107・112・117・118・119は白磁である。107・118・119は碗である。107は玉縁の口縁部をもつ。119は高台の低い底部である。外面下半部は露胎。118は119とは異なり、高台が高く突出すると考えられる。外面下半部は露胎。117は皿である。外面下半部は露胎。いずれも12世紀末~13世紀前半のものと考えられる。108・109・111・113・115は龍泉系の青磁である。109はやや外反する口縁部であるが、器面にはかすかな稜があり、体部に連弁文をもつものと考えられる。115は体部外面に、連弁文を削り出している。110は同安系の青磁碗、116は同安系の青磁皿である。116は見込み部に草花文を施す。114は産地不明の青磁碗である。

第 I 调查区下段部分

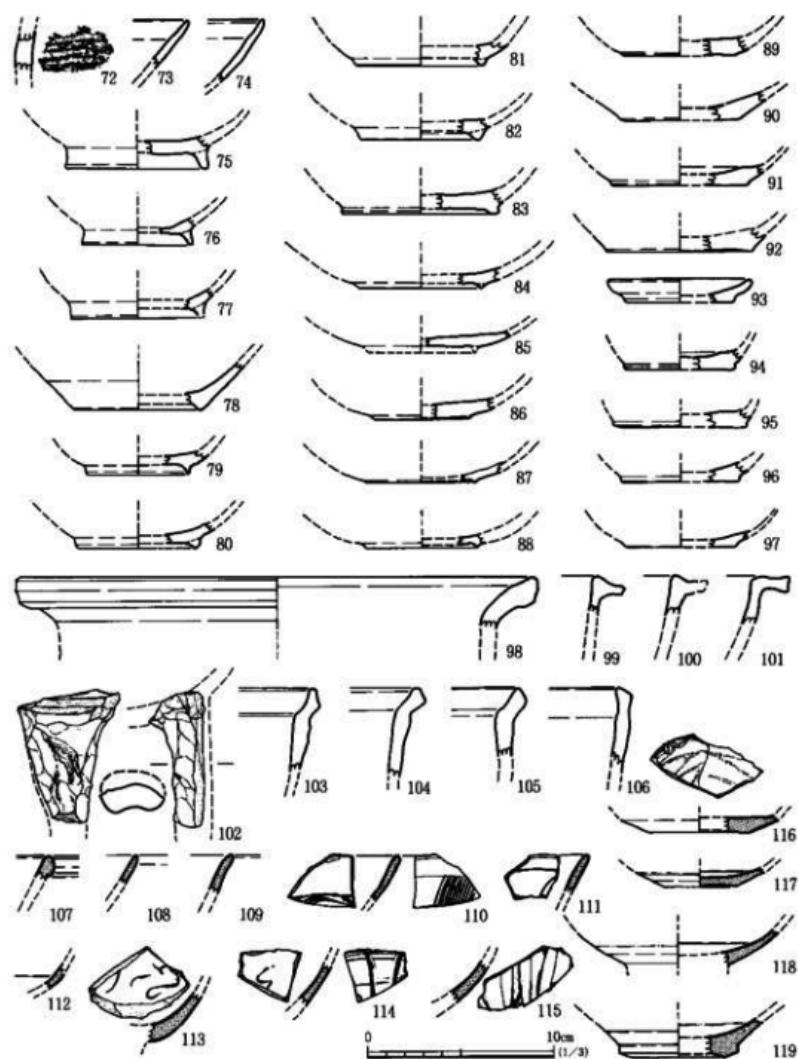


Fig. 18 第 I 调查区下段部分遗物包含层 I 出土遗物实测图

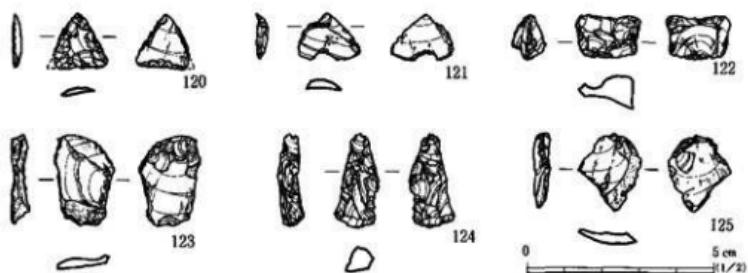


Fig. 19 第I調査区遺物包含層出土石器実測図

第I調査区遺物包含層出土石器 (Fig.19-120~125, PL.14)

120の石鋸は、平基式で平面形はほぼ正三角形に近い形態をもつ。表側には周縁に細部調整が施されるが、裏面のものにくらべると大きい。裏側の細部調整は外縁部だけにとどまる小さなもので、中央に大きく素材面を残しており主要剥離面と考えられる。

121・123・124・125は二次加工のある剥片である。いずれも石材は、黒曜石である。121は左右側縁及び下端部に細部調整が施される。123は背面の下端部右半に細部調整を施す。125は背面上端部に打点をもつ大きな剥離面がある。

122は楔形石器の可能性がある。背面下端部と腹面の上下端部に使用痕と思われる小さな剥離面がある。石材は黒曜石である。

4 第II調査区 (Fig.20, PL.3(3), 4(4))

第II調査区は、第I調査区から西に約20.0m離れた地点に設定されている。本来、第I調査区と第II調査区は一連の調査区として設定されたが、予想以上に旧地形の落込みが激しく、掘削の幅に対して深さが深くなりすぎたため、設定した調査区の1/3を残して掘削を中止した。ここまでが第I調査区であり、土層確認のために西側に約20.0m離れた地点を長さ5.0m、幅2.0mの規模で掘削したものを作成した。

第II調査区における基本層序は、次の順である。

第I層：埋め土I	第Ib層：埋め土II（マサ土）
第II層：明青灰色粘質土（旧耕土）	第III層：暗灰黄色粘質土（床土）
第IV層：黄褐色粘土（遺物包含層I）	第V層：灰色粘土（遺物包含層II）
第VI層：灰黄褐色粘土（遺物包含層III）	第VII層：灰白色砂+明綠灰色粘土（遺物包含層IV）
第VIII層：明綠灰色粘土（地山）	

第Ⅱ調査区

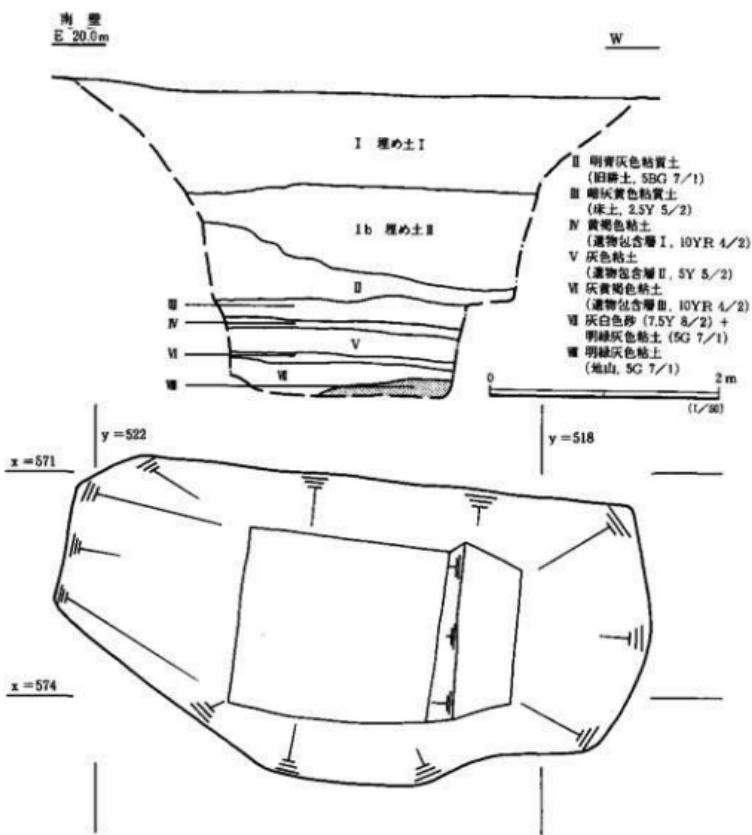


Fig. 20 第Ⅱ調査区平面図・南壁土層断面図

第Ⅱ調査区の地山上面は標高17.0mである。第Ⅰ調査区西端の地山上面は標高18.6mであり、その比高差は1.6mにも及ぶ。第Ⅲ層の床土より下が、遺物包含層である。しかし、遺物量は少なく、土器片は摩滅している。第V層の灰色粘土までは、瓦質土器片や須恵器片を含んでいる。最下層の第Ⅶ層は、古墳時代前期の土師器片を含んでいる。第V層から下は砂を多く含んでおり、最下層の第Ⅶ層に至っては灰白色砂と明緑灰色粘土が互層になつて堆積している。その堆積状況は、河川跡の堆積とよく似ている。

5 小結

調査の結果、古墳時代～近世までの溝や柱穴が検出された。これらの遺構に関しては、調査区の幅が狭いために、その性格を明らかにはしえなかつた。しかし、幅は狭いものの長大な調査区は、丘陵の上部から低地部に向かってトレンチを入れる形となり、旧地形の落込みおよびそれに伴う地山の変化を明らかにした。第Ⅰ調査区の東端では地山の上面が標高21.3mを測るが、第Ⅰ調査区西端の地山上面の標高は18.7mであり、その比高差は2.5mにも及ぶ。更に、第Ⅰ調査区西端より西に約20.0m離れた第Ⅱ調査区の地山上面は標高17.0mである。標高差が激しいために、地山となる上層がそれぞれの地点で異なる。第Ⅰ調査区のy=586を境として、高い東側が鳥栖ローム、低い西側が八女粘土を地山とする。これらは洪積段丘に堆積した、阿蘇山からの噴積物である。第Ⅱ調査区の地山は明緑灰色粘土であり、第Ⅰ調査区の洪積段丘を侵食した沖積低地の埋積土と考えられる。

旧地形の落込みは、地山の上面で検出された遺構や遺物包含層の最下層から出土した遺物より、古墳時代中期以降にその埋没が始まったものと考えられる。遺物包含層の最も新しい遺物は岩崎編年Ⅲ型式の瓦質足踏であり、15世紀の前半には落込みの埋没がほぼ完了していたものと考えられる。この後に、近世棚田の開墾が行われたわけであるが、上段部分遺物包含層や近世溝から出土した陶磁器類により、遅くとも18世紀の初頭には開墾が開始されていたものと考えられる。開墾の契機については本部2号館で検出された、伊万里製の染め付け碗を伴う近世屋敷との関連を考えていく必要があろう。

[注]

- 1) 山口大学吉田道路調査団「山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報」(山口大学、1971年)
- 2) 山口大学吉田道路調査団「山口大学構内吉田道路発掘調査概報」(山口大学、1976年)
- 3) 山口大学理蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内道路調査研究年報』Ⅲ、1985年)
- 4) 山口大学理蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内道路調査研究年報』Ⅳ、1990年)
- 5) 山口大学理蔵文化財資料館「吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査」(『山口大学構内道路調査研究年報』Ⅴ、1985年)
- 6) 岩崎仁志「防長地域の足踏について」(『山口考古』第17号、1988年)
- 7) 岩崎仁志「防長型擂鉢について」(『山口考古』第19号、1990年)

Tab. 2 出土遺物観察表

法長()は復元値

番号	器種	法長(cm) (①復元値②器高)	色 面 (①外面②内面)	胎土	備考
SX-01					
1	土師器 高环 腹部		黄灰色(外面)・褐褐色	精製粘土の中に1mm前後の砂粒を含む	
FU-04					
2	土師器 足綱	①(34.5)	褐褐色(外底は赤褐色)	1~3mmの白色砂粒を含む	外面保有者。脚部に擦痕を残す
3	土師器 瓢 口縁部	①(15.0)	灰白色	精製粘土	風化が激しい
4	土師器 瓢 口縁部		白色	精製粘土	
上段包含層					
5	瓦質土器 瓢 口縁部		黒灰色	精製粘土に砂粒を含む	
6	瓦質土器 瓢 口縁部		灰褐色	精製粘土	
7	瓦質土器 こね鉢 口縁部		灰黑色	精製粘土に1~4mmの砂粒を含む	風化が激しい
8	瓦質土器 すり鉢 口縁部		①黒色 ②暗青灰色	精製粘土に砂粒を含む	
9	土師質土器 はうろく 山側部		灰褐色	精製粘土に1~2mmの砂粒を含む	
10	瓦質土器 こね鉢 底部		①黒灰色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	内面に光沢をもつ
11	土師器 瓢 底部	②(6.8)	①暗褐色 ②淡褐色	精製粘土	風化が激しい
12	瓦質土器 足綱 腹部		青灰色	1mm前後の砂粒を多量に含む	
13	瓦質土器 足綱 腹部		青灰色	1mm前後の砂粒を含む	
14	瓦質土器 足綱 腹部		青灰色	1mm前後の砂粒を含む	
15	青磁 瓢 口縁部		素面 白色 釉面 白色(やや青味)		伊万里系
16	青磁 瓢		素面 淡褐色 釉面 紫色		
17	陶器 底部	②(2.8)	①青灰色 ②黒青色	致密	
18	陶器 土鍋 底部	③(6.2)	素面 茶色 釉面 暗赤褐色	致密	内面のみ鉄軸
19	陶器 大鉢	①(19.2)	素面 暗赤色 釉面 赤色	致密	外面 白土の刷毛目 内面 白土の茶
20	陶器 水甕	③(23.6)	素面 小褐色 釉面 暗赤褐色	2mm前後の砂粒を含む	横浜系
近世大清					
21	陶器 瓢 底部	③(4.4)	素面 灰色 釉面 灰褐色		横浜系
SD-02					
22	土師器 瓢 地部	②(1.2)	灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	風化が激しい 底部へきり
遺物包含層Ⅱ					
23	弥生土器 瓢 口縁部		黄褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	風化が激しい
24	弥生土器 瓢 口縁部		淡黄色	1~4mmの砂粒を含む	
25	弥生土器 瓢 底部	②(4.8)	淡褐色	1~4mmの砂粒を含む	
26	弥生土器 瓢口		①淡褐色 ②淡棕褐色	精製粘土に微細砂粒を含む	
27	弥生土器 萩口縁付 口縁部	①(15.9)	淡黄色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
28	土師器 高环 壁部		淡青灰色	1mm前後の砂粒を含む	風化が激しい
29	土師器 高环 壁部		明褐色	1mm前後の砂粒を含む	
30	土師器 高环 壁部		淡黄色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
31	土師器 高环 腹部	②(10.0)	淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	
32	ミニチュア土器 瓢	①(8.3)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	
33	ミニチュア土器 瓢		淡褐色	精製粘土に微細砂粒を含む	

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

法量()は復元値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③高さ)	色調 (①外面②内面)	胎土	備考
遺物包含層Ⅰ					
36	弥生土器	壺 口縁部		暗褐色	1~2mmの砂粒を含む
37	條纹土器	高环 腹部		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む 外面に朱を塗布
38	土師器	高环 环部 ②(14.6)		明褐色	1~3mmの砂粒を含む 風化が激しい
39	土師器	高环 环部	②(10.4)	明褐色	1~2mmの砂粒を含む
40	土師器	高环 腹部	②(9.0)	赤白色	精製粘土
41	土師器	高环 腹部 ②(9.0)		淡青灰色	1~4mmの砂粒を含む 風化が激しい
遺物包含層Ⅱ					
43	弥生土器	壺下口縁部		灰褐色	1mm前後の砂粒を含む 断面三角突溝をもつ
44	須恵器	高环 腹部		明青灰色	精製粘土
遺物包含層Ⅲ					
47	弥生土器	高环 腹部		淡青色	2~4mmの砂粒を含む
48	須恵器	長頸壺		青灰色	白色粒を含む
49	須恵器	壺 底部		青灰色	精製粘土
50	土師器	壺 口縁 ①(18.3)		灰褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む
51	土師器	壺 口縁 ①(23.9)	①無色 ②淡黃褐色	精製粘土に微砂粒を含む	外側 優等看
52	土師器	壺 口縁		淡褐色	精製粘土に微砂粒を含む 風化が激しい
53	土師器	壺 口縁		灰白色(一部灰色)	精製粘土
54	土師器	壺 底部 ②(5.2)		淡青褐色	精製粘土に赤色斑紋を含む 風化が激しい
55	土師器	壺 底部 ②(6.0)		灰褐色	1~2mmの砂粒を含む
56	土師器	壺 底部 ②(6.6)		黄白色	赤色斑紋と2~3mmの砂粒を含む 風化が激しい
57	土師器	壺 底部 ②(6.4)		淡青白色	微砂粒を多量に含む
58	土師器	壺 底部 ②(6.4)	①淡黄色 ②灰白色	精製粘土	
59	土師器	壺 底部 ②(5.6)		淡褐色	精製粘土
60	土師器	壺 底部 ②(4.0)		白色	精製粘土 風化が激しい
61	土師器	壺 底部 ②(5.7)		白色	精製粘土 風化が激しい
62	土師器	壺 底部 ②(5.6)		淡褐色	精製粘土に赤色斑紋を含む 風化が激しい
63	土師器	壺 底部 ②(5.6)		褐色	精製粘土に赤色斑紋を含む 風化が激しい
64	土師器	壺 底部 ②(7.0)		褐色	精製粘土に赤色斑紋を含む 風化が激しい
65	土師器	壺 底部 ②(3.6)		淡青白色	1mm前後の砂粒を多量に含む 風化が激しい
66	土師器	壺 底部 ②(4.6)		褐色	精製粘土
67	青磁	碗	素地 灰色 釉面 緑色		龍泉窯系
68	青磁	皿 底部	素地 灰白色 釉面 水色		同安窯系
69	青磁	碗	素地 灰白色 釉面 紫色		龍泉窯系
70	白磁	碗	素地 白色 釉面 白色		
71	青磁	皿	素地 灰白色 釉面 緑灰色		同安窯系
遺物包含層Ⅳ					
72	縞文土器		①明褐色 ②墨灰色	2~3mmの砂粒を含む	外面 背面赤板 内面 ケズリ
73	土師器	壺 口縁部		淡白黄色	精製粘土 風化が激しい
74	土師器	壺 口縁部		淡明褐色	微砂粒を多量に含む

出土遺物観察表

注量： 1 は複数

番号	器種	法算(?) (①口縁部と底部)	色調 (①外側(?)内面)	胎土	備考
75	土師器	瓶 底部 ② (7.6)	淡青褐色 ②灰褐色	1~2 mmの砂粒を多量に含む	ヘタ切り底
76	土師器	瓶 底部 ② (6.6)	淡赤褐色 ②灰白色	赤色斑点と1~2 mmの砂粒を含む	
77	土師器	瓶 底部	灰白色	1~2 mmの砂粒を含む	
78	土師器	瓶 底部 ② (6.8)	①灰白色 ②灰褐色	無砂粒を多量に含む	
79	土師器	瓶 底部 ② (5.4)	淡赤褐色 ②灰白色	無砂粒に2~4 mmの砂粒を含む	風化が激しい
80	土師器	瓶 底部 ② (6.4)	①淡黄褐色 ②灰白色	1~2 mmの砂粒を含む	風化が激しい
81	土師器	瓶 底部 ② (6.8)	①明黄褐色 ②淡黄褐色	無砂粒	
82	土師器	瓶 底部 ② (6.2)	灰白色(底部外壁暗灰色)	無砂粒に2~4 mmの砂粒を含む	
83	土師器	瓶 底部 ② (5.2)	淡黃褐色	2~3 mmの砂粒を含む	
84	土師器	瓶 底部 ② (6.6)	①灰白色 ②淡黃褐色	無砂粒に微細砂粒を含む	
85	土師器	瓶 底部	淡黃白色	無砂粒	
86	土師器	瓶 底部 ② (5.0)	黃褐色	無砂粒	
87	土師器	瓶 底部 ② (5.4)	淡黃白色	無砂粒	風化が激しい
88	土師器	瓶 底部 ② (6.0)	淡黃白色	無砂粒	
89	土師器	瓶 底部 ② (6.0)	淡黃褐色	無砂粒に砂粒を含む	手切り底
90	土師器	瓶 底部 ② (6.0)	①明褐色 ②暗褐色	無砂粒	風化が激しい
91	土師器	瓶 底部 ② (7.0)	①淡褐色 ②灰黑色	無砂粒に母粒を含む	手切り底
92	土師器	瓶 底部 ③ (7.6)	淡褐色(底部が淡赤色)	無砂粒	風化が激しい
93	土師器	皿 ① (7.4) ② (5.8)	淡褐色	無砂粒	
94	土師器	皿 底部 ② (5.8)	淡黃褐色	無砂粒に赤色斑点を含む	
95	土師器	皿 底部 ② (6.5)	淡褐色	無砂粒	
96	土師器	皿 底部 ② (6.2)	淡褐色	無砂粒に赤色斑点を含む	
97	土師器	皿 底部 ② (5.8)	淡褐色	無砂粒に赤色斑点をわざわざ含む	
98	土師器	鍋 口縁部 ① (27.5)	淡赤褐色	2~3 mmの砂粒を含む	
99	瓦質土器	鍋 口縁部	暗褐色	1~2 mmの砂粒を含む	風化が激しい
100	瓦質土器	鍋 口縁部	灰褐色	1~2 mmの砂粒を含む	風化が激しい
101	瓦質土器	鍋 山縁部	灰褐色(盤により黒色)	1~2 mmの砂粒を含む	鉢底下に盤が付着
102	瓦質土器	足柄 瓦部	淡赤褐色	1~2 mmの砂粒を含む	
103	土師器	鍋 口縁部	灰褐色	1~2 mmの砂粒を含む	
104	瓦質土器	鍋 口縁部 ①灰褐色 ②灰黑色	1 mm前後の砂粒を含む		
105	瓦質土器	鍋 口縁部	黒褐色	1 mm前後の砂粒を含む	
106	瓦質土器	鍋(鉢) 口縁部	黒褐色	1 mm前後の砂粒を含む	
107	白磁	瓶 口縁部	素地 白色 釉調 白色(やや青味)		
108	青磁	瓶 山縁部	素地 淡白色 釉調 灰白色		龍泉窯系
109	青磁	瓶 山縁部	素地 淡褐色 釉調 灰褐色		龍泉窯系
110	青磁	瓶 口縁部	素地 淡白色 釉調 灰色		同安窯系
111	青磁	瓶 口縁部	素地 白色 釉調 灰色		龍泉窯系
112	白磁		素地 白色 釉調 灰色		
113	青磁	瓶	素地 灰白色 釉調 灰色		龍泉窯系
114	青磁	瓶	素地 灰白色 釉調 オリーブ色		

吉田構内本部裏給水管路設に伴う発掘調査

番号	器種	法量(cm) (①口径②壁厚③器高)	色 調 (④外側⑤内側)	胎上	備考	
					法量()は復元値	
115	青磁 瓶		素地 白色 格調 木目			龍泉窯系
116	青磁 皿 底部	② (5.2)	素地 灰白色 格調 木目			同安窯系
117	白磁 皿 底部	② (4.0)	素地 灰白色 格調 木目			ヘラ切り底部
118	青磁 瓶		素地 灰白色 格調 木目			
119	白磁 瓶 底部	② (4.7)	素地 灰白色 格調 木目			

番号	器種	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考	
							法量()は現存値	
遺物包含層Ⅲ								
35	滑石製陶器品 有孔円盤	径9.7 孔径0.15		0.6	(5.86)	結晶片岩	未製品か	
遺物包含層Ⅳ								
42	滑石製陶器品 盤	5.3	1.7	0.5	7.71	結晶片岩	ほぼ完形	
遺物包含層Ⅴ								
46	滑石製陶器品 有孔円盤	径9.8 孔径0.2		0.4	5.27	結晶片岩	ほぼ完形	

番号	器種	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考	
							法量()は現存値	
120 石錐								
120	石錐	1.5	(1.5)	0.2	0.43	鷹島産黒曜石	遺物包含層Ⅰ	
121 二次加工のある削片								
121	二次加工のある削片	1.2	1.7	0.3	0.54	長崎産黒曜石	遺物包含層Ⅱ	
122 横形石器?								
122	横形石器?	1.1	1.7	0.9	1.29		遺物包含層Ⅰ	
123 二次加工のある剥片								
123	二次加工のある剥片	2.4	1.6	0.5	1.75	長崎産黒曜石	遺物包含層Ⅱ	
124 二次加工のある剥片								
124	二次加工のある剥片	2.5	1.1	0.6	1.51		遺物包含層Ⅲ	
125 二次加工のある削片								
125	二次加工のある削片	2.1	1.7	0.3	1.16		遺物包含層Ⅲ	

番号	器種	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考		
					法量()は現存値		
遺物包含層Ⅳ							
34	不明鉄器	(2.2)	1.9	0.3	途中で欠損しており形状不明		
遺物包含層Ⅴ							
45	鐵錐	(7.1)	3.65	0.4	各0.6	籠鉢式	

第3章 平成5年度山口大学構内の試掘調査

第1節 吉田構内の試掘調査

1 人文学部・理学部講義棟新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

吉田構内の南端中央部、人文学部講義棟の北側に、人文学部・理学部講義棟の新営が計画された。本地区周辺は、昭和53年度人文学部校舎新営¹¹⁾や昭和58・59年度理学部大学院校舎新営および付随工事の調査により、地下のデーターは集積されている。これによれば、当地区は1.0m以上の埋め土と、わずかな旧水田耕土をはさんですぐに地山であると予想された。しかし、過去の調査において旧水田耕土中から遺物が出土していることや、計画された建物床面積が約600.0m²と規模の大きいことから埋蔵文化財資料館運営委員会は先ず、予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査の必要があると判断した。

埋蔵文化財資料館は、平成5年7月13日に試掘調査を実施した。新営予定地は自転車置場として利用されており、調査地点は既定されることとなった。自転車置場を避けて、予定地内に2カ所のトレンチを設定した(Fig.22)。自転車置場に対して西側のものをAトレンチ、北側のものをBトレンチとした。調査面積は約4.0m²である。

2 調査結果

Aトレンチ 自転車置場の西側、舗装を避けて1.5m×3.0mのトレンチを設定した。調査地点は西側の南北に走る道路から1.5m以上の高さがある。この比高差は丘陵の段状造成以外に、相当に盛り土されているものと予想された。掘削を行ったところ予想をこえて盛り土が厚く、排土が置けなくなったため、トレンチを1.0m×2.0mの大きさに切り替えた。現地表下約1.6mは盛り上で、その直下に茶灰色粘質土(7.5Y 7/3)の地山を検出した。地山の標高は東壁の20.4mに対して西壁は20.1mであり、西側に傾斜している。



Fig. 21 調査区位置図

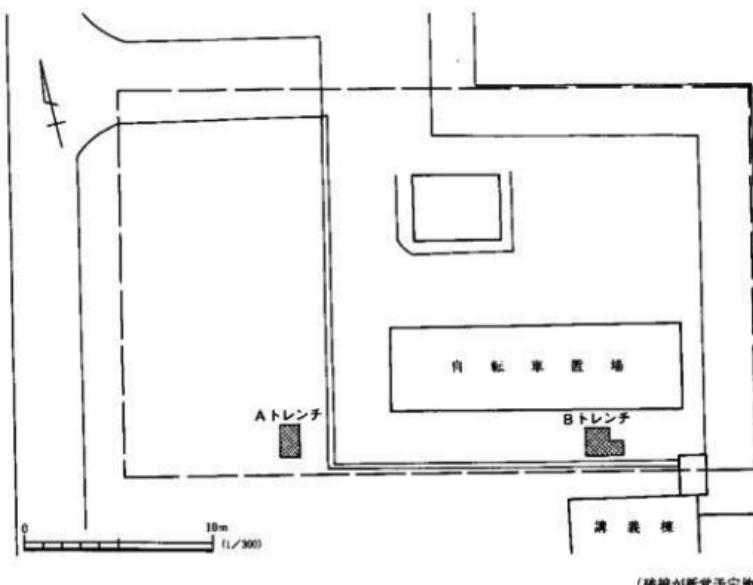


Fig. 22 トレンチ設定図

(破線が新宮予定地)

B トレンチ　自転車置場の北側、自転車置場とそれに並行した排水溝との間に $2.0\text{m} \times 2.0\text{m}$ のトレンチを設定した。調査地点はアスファルト舗装がされており、アスファルトカッターによって舗装部分を除去した。掘削を開始して、現地表下70cm程で水道管に当たったため、トレンチを南北1.5m×東西1.2mに変更した。現地表下約1.0m、標高20.8mで茶灰色粘質土(7.5Y 7/3)の地山を検出した。地山上面はわずかに、にごっており土師器皿小片を含んでいた。流れ込みによる遺物と推測される。

A トレンチとB トレンチの距離は、わずかに15mほどであるが、地山の比高差は40~70cmもある。西側にいくにしたがって、丘陵が低まっていくものと考えられる。顯著な遺構・遺物は検出されなかった。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田棟内人文学部校舎新宮に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1992年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「理学部大学院校舎新宮および付随工事に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅲ、1985年)

2 第2屋内運動場施設新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

吉田構内の北西部にあって、陸上競技用グラウンドより1段高く立地する体育館やサークル棟の一画に、第2屋内運動場の新営が計画された。新営予定地は第1屋内運動場と第1武道場に囲まれ、陸上競技用グラウンドに面する三角形を呈した空き地である。なお、新営予定地が陸上競技用グラウンドより1段高いのは構内造成の埋め土によるためであり、旧地形をとどめてはいない。本来の地形は陸上競技用グラウンドとの間にさほど比高差がなく、グラウンドや正門周辺と共に吉田遺跡の低地部を形成していたと考えられる。

吉田遺跡の低地部に当たる新営予定地の周辺は、昭和56年度に教育学部音楽棟新営の発掘調査、平成元年度に体育施設系給水管改修に伴う立会調査¹⁾が行われている。これらの調査では、北東から南西方向に走行する溝群が検出された。出土遺物は少なく時期決定の判断材料を欠くが、溝は幾度も掘削し直されており長期間にわたって機能していたことが判明している。吉田遺跡の低地部にあって、遺物が少なく長期間使用された平行する溝群は、農業用の水路である可能性が示唆された。これにより新営予定地の周辺は吉田遺跡の耕作部分であったと想定でき、新営予定地からは周辺と同様の遺構あるいはそれに付随した遺構が検出されるものと考えられた。

埋蔵文化財資料館運営委員会では上述の所見を重視し、新営予定地内の試掘調査が必要であると判断した。これを受けて埋蔵文化財資料館が、試掘調査を実施した。調査は建物要求範囲（約27.0m×約40.0m）の四隅にトレチを設定した。なお、調査前より構内造成による相当量の埋め土が予想されていたため、調査による掘削が深くなった場合の2段掘りを想定し、トレチを6.0m×6.0mと広く設定している。結果的には埋め土以下の堆積が浅く、2段掘りの必要はなかった。調査面積は144.0m²である。



Fig. 23 調査区位置図

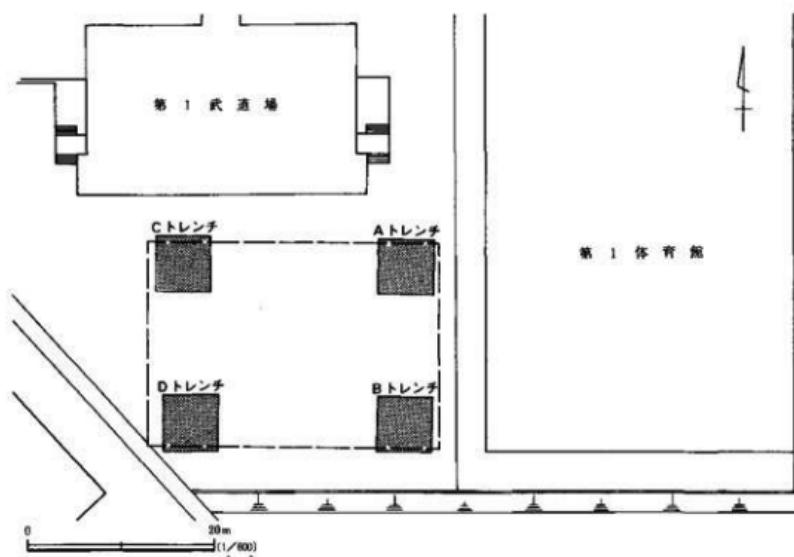


Fig. 24 トレンチ設定図

トレンチの名称は、北東隅をAトレンチ、南東隅をBトレンチ、北西隅をCトレンチ、南西隅をDトレンチとする(Fig.24, PL.15)。Aトレンチから1条の大溝が検出されたが、他のトレンチからは顕著な遺構・遺物は検出されなかった。調査期間は平成5年8月3日から8月18日までである。

2 層位 (Fig.25, PL.16)

本調査区の基本層序は、次の順である。

第Ⅰ層：茶灰色粘質土（埋め土）

第Ⅱ層：褐灰色粘質土（旧耕土）

第Ⅲ層：暗青灰色粘質土（床土）

第Ⅳ層：明緑灰色あるいは青灰色シルト（地山）

第Ⅰ層の埋め土は、東側で0.6mの厚さであるが西側では1.4mを測る。地形が東から西へ傾斜していたことを示すものである。第Ⅱ層は部分的に削平されている箇所がある。第Ⅳ層の地山の検出標高は、東側で17.3m、西側で16.9mを測る。Aトレンチで検出された本調査区唯一の遺構、大溝は第Ⅳ層の上面で検出された。

吉山構内の試掘調査

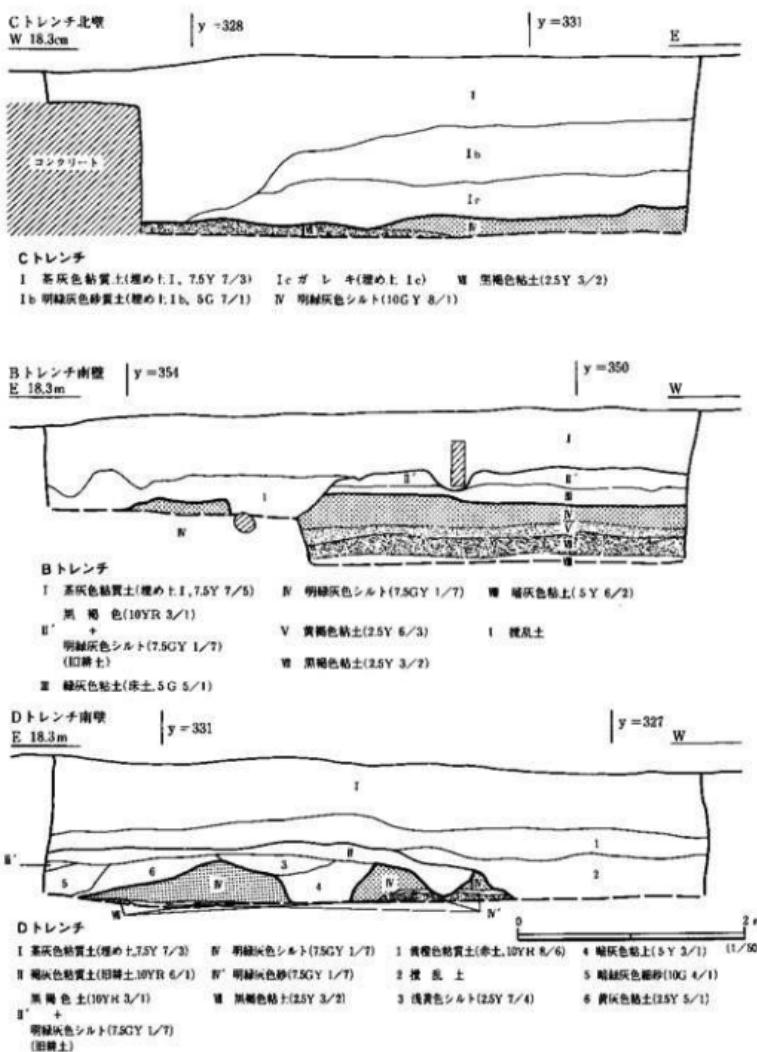


Fig. 25 B・C・D トレンチ土層断面図

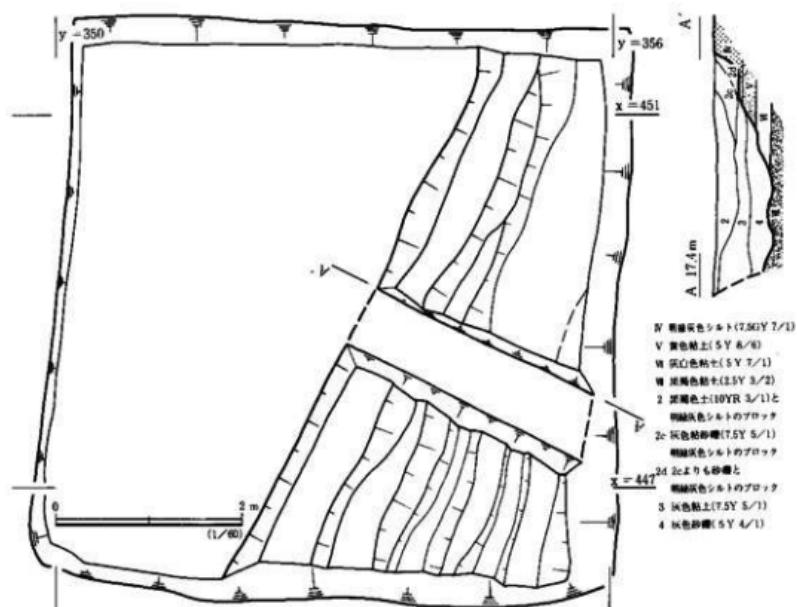


Fig. 26 A トレンチA溝実測図

3 遺構

A トレンチで、北東から南西方向に走行する大溝の西肩を検出している (Fig.26,PL.17)。検出面の標高は17.3mである。東肩は調査区外にあるためその溝幅は確かではないが、溝底中央をもって西肩を反転させると約4.0mの溝幅が想定される。溝断面は2段あるいは部分的に3段掘りの逆台形を呈し、その深さは検出面より溝底まで約60cmを測る。溝底の標高は16.7mである。溝の埋積土は4層からなる (Fig.27,PL17)。第1層は明緑灰色シルトのブロックを含んだ黒褐色土、第2層は灰色粘土、第3層は灰色砂礫、第4層は灰黑色細砂であった。第3層以下の砂礫は、本溝に流水があったことを示すものである。

他のトレンチでは、近・現代の遺構が検出されている。B トレンチからは北東から南西方向に軸をもつ、近代の暗渠を検出した。C トレンチの南東隅では、幅約1.0mの北東から南西方向に軸をもち、黒褐色粘質土を埋積土とする小溝を検出している。大部分はトレンチ外に広がるため、上面の検出のみにとどめた。D トレンチからは、大学統合移転直前まで機能していたと考えられる南北方向の水路が検出された。

古田橋内の試掘溝

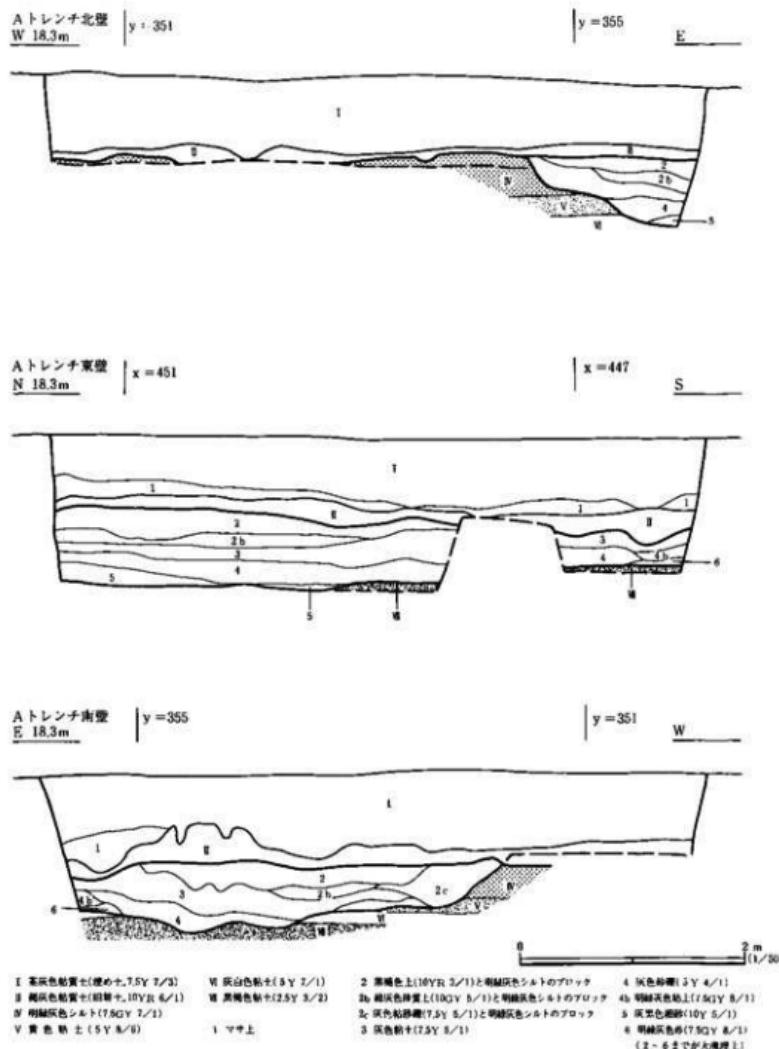


Fig. 27 A トレンチ土層断面図

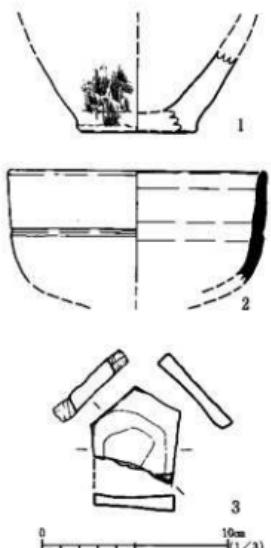


Fig. 28 A Trench Large Ditch Excavation Site Relics Actual Measurement Diagram

4. 出土遺物 (Fig. 28, PL. 17(4))

Aトレンチの大溝から、弥生土器・須恵器・砥石などが出土している。その数量は極めて少なく、破片も小さい。図示したのは、以下の3点のみである。

1は弥生土器壺の底部である。復元底径約6.0cm。平底であるが、底面がわずかにくぼむ。外面はタテハケ後ナデ調整、内面はナデ調整を施す。器壁はやや厚く、底部付近で約1.5cmを測る。2~3mm前後の砂粒を混じている。前期に所属すると考えられる。

2は須恵器の壺である。復元口径約14.0cm。口径に対して器高が高く、塊状を呈した壺である。口縁端部は丸く、胴部には一条の凹線がめぐっている。高壺の可能性もある。焼成が不良で、器面の風化が著しい。中村浩氏の陶邑編年³⁾でいうⅢ型式1段階のものと考えられる。

3は砥石である。2面の研砥面をもつ。現存長約4.4cm、最大幅約4.7cm、最大厚約0.85cmである。

5 小結

今回の試掘調査で検出した顕著な遺構は、Aトレンチの大溝のみであった。この大溝は一部が検出されたにすぎず、今回の試掘調査では溝の規模を明らかにしえなかつた。また、大溝は延長方向にあるBトレンチから検出されておらず、新営予定地外の東側に折れるか、トレンチが設定されていない新営予定地中央を流れていた可能性がある。大溝からは弥生土器・須恵器など出土しているが、大溝の機能期間を決定しうる資料ではない。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内II-16区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1982年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「体育施設系水管改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、IX、1991年)
- 3) 中村浩『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』(柏書房、1981年)

3 農学部給水管埋設工事に伴う試掘調査

1 調査の経過

吉田構内の中央やや東よりにある農学部校舎、その南側に給水管の埋設が計画された。発掘調査が行われた本部裏給水管と同じ、平成5年度の基幹整備事業によるものであるが、農学部給水管の工事は支管のため、幅約80cm、現地表下70cmまでの掘削であり、本部裏の本管に対しやや小規模な掘削が予定されていた。本地區周辺は過去の調査から、遺構の密度が比較的薄いと考えられる地域であった。また、構内造成時の埋め土が厚く、給水管程の掘削では旧表土層に及ばないことも予想された。しかし、給水管埋設の管路は約140mにも及ぶ長大なものであった。

上記の内容を踏まえて、埋蔵文化財資料館運営委員会はまず、管路予定部分の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査を実施することとした。また、顯著な遺構・遺物包含層が検出された場合には、再度、同委員会においてその取り扱いについて協議することとした。この決定を受けて埋蔵文化財資料館が、試掘調査を実施した。

調査は管路予定部分について3.0m×1.0mのツボ掘りを数多く行う予定であったが、樹木や道路などの障害物に阻まれた。そこでまず、調査可能な3地点についてツボ掘りを行い、必要に応じて調査地点を増やすこととした。調査の結果、他地点の追加調査は必要なかった。3地点は西側からAトレンチとし、最も東側をCトレンチとする(Fig.30)。調査期間は平成5年10月21から22日までで、調査面積は9.0m²である。

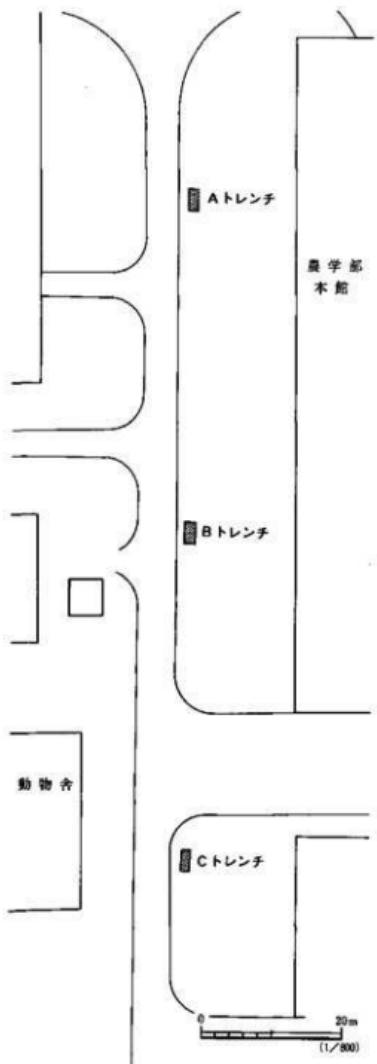
2 調査結果

Aトレンチ 現地表下約50cmでバラス及び瓦礫を含んだ整地土層の上面を検出したが、これより下は機械力をもってしても掘削が困難となった。その状況より、工事掘削深度の70cmまで整地土層の及ぶことが想定されたため、整地上層上面で調査を中止した。

Bトレンチ 現地表下70cmの範囲は、埋め土であった。しかし、現地表下80cmにおいて、調査区の東側で明緑灰色シルト(10GY 8/1)の地山が検出された。



Fig. 29 潜在区位置図



地山検出面の標高は20.6mである。なお、西側では埋め土が現地表から80cmよりも下に及んでいる。おそらく、AトレンチからBトレンチの周辺は構内造成時の埋め土などが厚く客土されており、給水管埋設による埋蔵文化財への影響は考えられない。

Cトレンチ 農学部解剖実験棟の南側に設定したこのトレンチは、他のトレンチと比較して構内造成の影響をさほど受けでておらず、地表下に旧耕土層が残されていた。旧耕土層下には、厚さ約20cmの暗灰色砂礫層（N 3/）²⁷を検出した。この暗灰色砂礫層下、標高20.9mで地山の黒色粘土（10Y 3/1）を検出した。本地區は平成3年度に調査した連合獣医学科棟の繩文河川跡に近く、暗灰色砂礫層がその河川跡の氾濫によって形成された可能性もある。遺物の出土はなかった。

3地点の調査結果は、本地区は埋蔵文化財が希薄であり、埋存するとしても掘削範囲は、埋め土や旧耕土層のため、給水管埋設工事の影響が及ばないことを明らかにした。

[註]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「昭和56年度山口大学構内古田遺跡の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1982年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新營に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』第、1994年)

Fig. 30 トレンチ設定図

第2節 常盤構内の試掘調査

1 工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

常盤構内の北西部に位置するグランドの、その南側の空き地にプレハブ研究・実験棟の新営が計画された。グランドは侵食谷を埋積して造成されたものであるが、南側の空き地は台地の部分であることが、周辺の地形より判断することができた。埋蔵文化財資料館運営委員会は先ず、予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査の必要があると判断した。

埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の決定を受け、平成5年7月15・16日に試掘調査を実施した。新営予定建物の範囲に従い、東西29.0m×南北8.0mの4隅に2.0m×2.0mのトレンチを設定したが、地表面に大きなコンクリートの廃材が露出していた南西隅のトレンチでは掘削を行わなかった。調査面積は12.0m²である。

2 調査結果

試掘を行った3地点とも厚さ約10cmの表土層を剥ぐと厚さ約20cmの埋め土層があり、その下には厚さ約10cm程の常盤構内造成以前の旧表土層があった。旧表土層は明褐色粘質土(7.5YR 5/8)で、その上層は炭灰を含んでいた。旧表土層の直下は橙色粘質土(5YR 7/8)の地山である。旧表土層の直下が地山であることが示すように、本調査地は著しい削平を受けており、遺構・遺物は確認されなかった。

[注]

- 1) 河村吉行「山口大学構内の埋蔵文化財の分布」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1992年)



Fig. 31 調査区位図

2 工学部地域共同研究開発センター新営工事に伴う試掘調査

1 調査の経過

常盤構内の南東部に位置するテニスコートに、地域共同研究開発センター新営が計画された。新営予定地は、北から南に向かって平坦地が4段にわたって造成された常盤構内の1段目にある。平坦地1段目の東側は過去に調査事例がなく、埋蔵文化財の有無については不明であった。埋蔵文化財資料館運営委員会は先ず、新営予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査を実施することにした。

埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の決定を受け、平成5年7月15・16日に試掘調査を実施した。地域共同研究開発センター新営予定の建物範囲は東西18.0m×南北31.0mであり、その4隅に2.0m×2.0mのトレンチを設定した。調査面積は16.0m²である。

2 調査結果

試掘を行った4地点とも、マサ土とその下の排水用スミハイが厚さ20cmほど敷き詰められていた。その直下は、黄色粘質土(2.5Y 8/8)の地山であった。このテニスコートの東側は崖面であり、一段高くなつて国立宇部工業高等専門学校の敷地がある。両者には相当の高低差が認められる。本調査地は調査結果や現地の状況から、常盤構内造成時に平坦地を確保するため、丘陵をかなり削平した部分であることがうかがえた。今回及び過去

の調査例から、常盤構内の1段目平坦部分は、旧状をとどめないほどに著しい削平を受けているものと考えられる。1段目平坦部分に関しては、過去に埋蔵文化財があったとしても既に消失しており、調査の必要はないものと判断した。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報」Ⅲ、1994年)

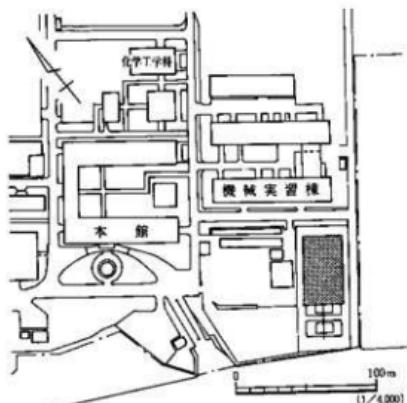


Fig. 32 調査区位図

第4章 平成5年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 基幹整備（屋外他給水管改修）工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-15, N-17, M-18

調査期間 平成5年5月6・8日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 各8.0m²

調査結果 工事は屋外共同溝内の給水管・ガス管を改修するために、資材搬入坑を教養部研究実験棟北側、図書館前庭部東側、理学部研究実験棟北側の3地点に新たに設営するものである。資材搬入坑は、既設共同溝の上部を改修して設営された。改修に伴う掘削は共同溝直上の既掘部分であったが、位置確認のために埋蔵文化財資料館が立会調査を行った。

掘削は資材搬入坑設営工事に必要な余掘り幅も含めた2.0m×4.0mの規模で行われた。教養部研究実験棟北側では、現地表下から約90cmで共同溝上面が検出された。図書館前庭部東側では、現地表下から約1.8mで共同溝上面が検出された。理学部研究実験棟北側では、現地表下から約1.6mで共同溝上面が検出された。掘削範囲の埋土は、いずれも搅乱土であった。

現地表面より1.0m以上の深度をもつ共同溝は、標準的な吉田遺跡の遺物包含層及び、遺構面よりも深く設置されている。共同溝の設置に関しての調査記録はなく、吉田遺跡調査団が組織される以前に施工されていたと考えられる。共同溝周辺に遺構・遺物包含層が分布していたとしても、その設置により搅乱を受けていると考えられる。



Fig. 33 調査区位置図

2 農学部連合獣医学科棟新営電気設備工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 O-16

調査期間 平成5年8月25・26日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約4.0m²

調査結果 工事は平成4年度に新営された連合獣医学科棟の電気室へ、ボイラー室にある総合受電所から高圧ケーブルを布設するために、ボイラー室前の道路にある共同溝から連合獣医学科棟に向かって幅約50cm、長さ約18.0m、深さ約1.1mの管路を掘削するものである。道路部分は標高22.1m以上を測り、平成4年度の連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査で検出された遺構面の標高21.2mよりも90cm以上高く、相当の盛り土がなされていることが予想された。このため、埋蔵文化財資料館は立会調査によって、掘削範囲内の遺構・遺物の有無に注意を払うこととした。

共同溝との接続部分の掘削は、共同溝の深度に合わせ1.6mとやや深くなつた。しかし、共同溝の埋設によって搅乱を受けた部分であり、埋蔵文化財への支障はなかった。また、掘削深度が1.1mである他の箇所においても、道路のかさ上げのための盛り土部分までにとどまつた。今回の工事では、盛り上がりが厚く地下の遺構・遺物に影響を与えることはなかつたが、連合獣医学科棟の調査では純文時代晚期の河川跡が検出されており、周辺部において工事を行う際には慎重に対応していかなければならない。



[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅹ、1994年)

Fig. 34 調査区位置図

3 大学会館前庭バリカー設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 N-14

調査期間 平成5年8月31日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1.0m²

調査結果 大学会館前のロータリーはブロック敷きのため、車両の乗入れは禁止されていた。近年、無断で進入する車両が多く、基礎に砂を敷き詰めた程度のブロック路面は波うた様な状態となり傷みが激しくなった。このため、大学会館前のロータリーと道路の間にバリカーを設置し、車両の進入を完全に遮断することとなった。工事は道路に面した幅約14.8mのロータリー入口に歩行者用通路を両わきに1.4mずつ確保し、残された12mの範囲に2mの間隔をあけて7ヶ所にバリカーを設置するものである。バリカー設置に必要な掘削範囲は、直徑約50cmほどの小規模なものであるが深さは約1.0mと深く、土層確認のため埋蔵文化財資料館は立会調査を行った。

バリカー1基を設置するための掘削範囲は小規模であるものの、東西に一列に7ヶ所を掘削したため、東から西に向かって低まっていく大学会館丘陵の土層状況を観察することができた。7ヶ所ともブロック敷きのため、基礎として砂を約10cmとその下にパラスを約30cmの厚さで敷き詰めている。東端部分ではパラス敷きの直下に明茶色粘土(5YR 7/8)の地山が検出されるが、西側にゆくにしたがいパラスと地山の間に有る擾乱土層が厚みを増し、西端部分の掘削では地山は検出されなかった。当地区は丘陵の高い部分を削り、低い部分に盛り土した可能性、あるいは大規模な掘削が及んでいた可能性がある。



Fig. 35 調査区位置図

4 大学会館前庭部記念植樹に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-15

調査期間 平成5年9月10日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1.6m²

調査結果 本学と中国山東大学との学術交流協定締結10周年記念行事として、記念植樹が大学会館前庭部に計画された。植樹は幹回り約25cm、樹高約3.5mのシダレ柳を2本、上下二段にわたって造成されている大学会館前庭部の下段部分西端に行なうものである。植樹に際しての掘削は直径約1.0m、深さ約30cmと小規模であり、地下の遺構や遺物へ影響を及ぼすとは、過去のデーターからも考えられなかった。埋蔵文化財資料館は立会調査を行い、植樹位置や掘削深度の確認を行った。

現地表から深さ30cmはマサ土を客土しており、その下にある搅乱土の上面で掘削はとどまつた。地下の遺構や遺物への支障は全くなかった。しかし、昭和60年度の試掘調査により、本地区における遺構・遺物の埋存は確実である。遺物包含層や遺構面の比較的浅い箇所もあり、本地区での植樹に伴う掘削には十分な注意を払う必要がある。また、掘削だけではなく、植物の根の成長による地下への影響も考えらるのであり、あまり根の張らない樹種を選択する必要がある。



Fig. 36 調査区位置図

5 九田川河川局部改良工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成5年10月26日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約40.0m²

調査結果 現在、山口県により九田川の護岸改修工事が進められているが、平成5年度から2ヶ年で吉田構内西端にあるテニスコート北側での改修が行われることになった。改修工事に際しては、掘削が吉田構内の敷地に及ぶとの連絡が山口県土木建築事務所からあった。関係者による協議の結果、構内敷地での掘削には埋蔵文化財資料館が立会調査を行うことになった。工事は既存の護岸ブロックを撤去し、掘削によって法面を整え新たに護岸を行うものである。既存の護岸ブロックによって法面は搅乱を受けており、掘削はその範囲にとどまった。しかし、構内敷地ではないが対岸側は、未搅乱の部分にまで掘削がおよび土層の堆積状況を確認することができた。構内ではないが、参考のため報告を行っておく。

舗装のアスファルト下より30cmはバラス、30~50cmが旧耕土、50~90cmが青灰色シルト、90~130cmが黒色粘土、130~180cmが黄橙色粘土、180cm以下が砂礫層であった。旧耕土の直下は一般に地山と考えられている青灰色シルト層であり、遺物包含層及び遺構は認められなかった。青灰色シルト層もまた遺物を含んでいなかった。青灰色シルト層の下にある黒色粘土層は、平成4年度に吉田構内正門周辺で検出された黒色粘土層と同一のものと考えられる。また、本年度の吉田構内第2

屋内運動場施設新営に伴う試掘調査でも同様の黒褐色粘土層が検出されている。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査（信号機設置）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅹ、1994年）
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「第2屋内運動場施設新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅺ、1995年）



Fig. 37 調査区位置図

6 農学部電柱立替え工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 W-17

調査期間 平成5年11月11日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.2m²

調査結果 日本電信電話株式会社より、東門脇に既設されている電柱を補強するための支柱を構内に埋設したいとの旨、山口大学学長へ国有財産使用許可の申請があった。工事は支線を張るために、表土を50cm角で深さ50cmまで掘削し、支柱を固定するためのアンカーを機械力によって掘削面から地下1.5mまで打ち込むものである。掘削自体は小規模なため、埋蔵文化財資料館が立会調査を行った。掘削は搅乱土の範囲内であり、埋蔵文化財への支障はなかった。

本調査地周辺は旧地形の谷筋にあたり、本調査地の南側にある尾根は吉田遺跡第II地区と呼ばれ、家畜病院周辺から溝や柱穴群が検出されている。¹⁾ 本調査地周辺では昭和60年度に農学部附属農場農道改修に伴う立会調査、昭和61年度に交通標識設置に伴う立会調査が実施されているが、両調査とも掘削深度は搅乱土の範囲内であった。現在のところ埋蔵文化財の有無は明かではない。ただし、農学部の実験水田からは、弥生土器・須恵器が採集されている。これらの遺物が、旧地形の谷筋に当たる実験水田に当初から伴っていたものか、客土に含まれていたものは明らかではない。今後の調査によって、埋蔵文化財の有

無を明らかにしていく必要がある。

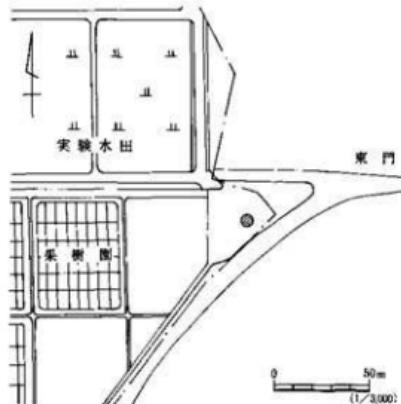


Fig. 38 調査区位置図

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査團「山口大学構内吉田遺跡発掘調査報告」(山口大学、1976年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場農道改修に伴う立会調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報」V、1986年)
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「交通標識設置に伴う立会調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報」VI、1987年)

7 農学部ガラス室設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 R-14

調査期間 平成5年2月15日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約10.0m²

調査結果 吉田構内の東端部にある農学部附属農場に、ガラス室の新営が計画された。実験水田より一段高くなつた農場本館の前面に、既存のガラス室がまとめて設営されており、その一側が新営予定地となつた。工事は、ガラス室の基礎部分となる10ヶ所を1.2m×0.9mの規模で深さ60cmまで掘削するものである。本地点は平成4年度に立会調査を行つており、現地表下はかなり厚い埋め土で覆われていることが判明している。本地区の埋蔵文化財の有無は明らかではないが、今回の掘削深度では影響がないものと考えられ、埋蔵文化財資料館は立会調査を行つた。掘削範囲内は、当初の予想通り埋め土であり埋蔵文化財への支障はなかつた。

本地点が実験水田より一段高くなつてゐるのは、自然のものとは考えられない。本来の丘陵の高まりが利用されたのであろうが、相当の客土がなされているものと考えられる。農場は、標高の高い場所では岩盤が露出している箇所があり、高地を削り低地にそれを客土する大規模な造成が行つたと考えられる。埋め土が厚いと考えられるガラス室周辺では、1.0m以内の掘削であれば埋蔵文化財への支障はないものと考えられる。農場の高地は山口大学吉田遺跡調査用によって昭和41年に発掘調査されているが、低地部の調査は行われておらず実態は不明である。埋め土によって埋蔵文化財が保護されている可能性もある。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場ガラス室新営その他の工事に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』3、1994年)

- 2) 山口大学吉田遺跡調査用『山口大学構内古墳遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

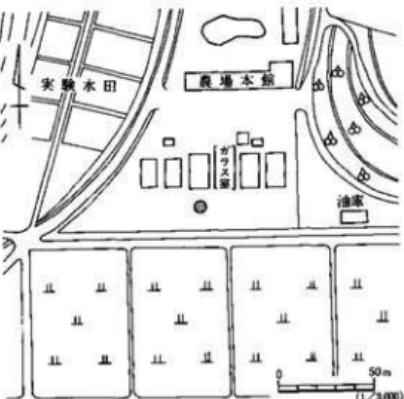


Fig. 39 調査区位置図

8 教育学部給水管埋設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 H-19・J-19

調査期間 平成6年2月24・28日、同3月1日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約15.0m²

調査結果 吉田構内の西部、教育学部校舎の周囲を巡る屋外給水管の付け替え工事が行われた。既設部分については支障がなかったが、新たに掘削する所が数カ所あった。本地区は、昭和60年度の教育学部環境整備に伴う立会調査によって、現地表から約80cm下位までは埋め土であることが判明していた。今回の掘削は幅約80cm、深さ70cmと規模が小さく、その深さも埋め土の範囲内と想定されたため、立会調査を行い土層の変化に注意した。

A地点 土層堆積状況は、現地表～50cmは埋め土、50～60cmは緑灰色粘質土（10G 6/1）、60～73cmは灰オリーブ色粘質土（5Y 6/2）であった。遺物・遺構は検出されず、掘削は遺物包含層や遺構面に到達していないものと考えられる。

B地点 遺構と考えられる遺物を包含した黒褐色粘質土の落ち込みを確認した。黒褐色粘質土の落込みが露出した北側断面の土層堆積状況は、現地表～40cmがマサ土、40～90cmが埋め土、90～110cmが遺物を包含した黒褐色粘質土（10YR 2/3）であった。掘削が深く比較的良好な土層堆積状況を残す南側断面は、現地表～20cmがコンクリート、20～40cmがマサ土、40～47cmが埋め土、47～55cmが旧耕土、55～68cmが緑灰色シルト（10Y8/2）



Fig. 40 調査区位置図

の地山であった。

C地点 アスファルトから下47cmは埋め土、47～81cmは緑灰色シルト（7.5GY 5/1）、81～111cmは黄色粘土（5Y 8/8）であった。遺構・遺物は検出されていないが、緑灰色シルトは河川堆積によって形成された可能性がある。

[注]

- 1) 山口大学蔵文化財資料館「教育学部環境整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』V、1986年)

9 環境整備（大学会館前庭）に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L-14・15、M-13・14・15、N-14・15

調査期間 平成5年12月2日～平成6年2月17日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約141.0m²

調査結果 吉田構内の大学会館前庭部が、平成5年度環境整備事業の対象となった。大学会館前庭上段部分は本来、大学会館の新営が予定された地点であった。しかし、昭和58年度に行なった試掘調査によって堅穴住居跡や溝などの遺構が検出され、学内の合意による工事計画変更によって大学会館を現在の位置にまで上げ、盛り土を施す保存措置が講ぜられている。

また、下段部分についても大学会館新営に伴って環境整備が行われることになり、昭和60年度に試掘調査を行い、遺構及び遺物包含層の埋没深度を図示し、埋蔵文化財への影響が及ばない範囲での工事や植樹が行われた。昭和60年度以降も植樹は続けられているが、先の図面をもとに関係部局との協議が行われ、埋蔵文化財に影響が生じそうな地点は避けられてきた。

このように大学会館前庭部は、大学会館予定地の変更に始まり現在の植樹に到るまで、埋蔵文化財に対しては細心の注意が払われてきた地点である。今回計画された環境整備は、今までの大学会館前庭部整備の総括ともいいくべきものである。関係部局は階段、外灯及びそれに伴う電気配線、公園設備（ベンチ・東屋など）を設置するための掘削を伴った現状変更を要求した。大半の掘削は盛り土の範囲におさまるものと考えられたが、構内における埋蔵文化財保存のシンボル的な地点でもあることから、関係部局と綿密な協議を行い、極力掘削深度を浅くするよう合意を求めた。また、掘削に際しては埋蔵文化財資料館が立会い、遺物包含層や遺構が検出された場合には工法の変更を指示した。

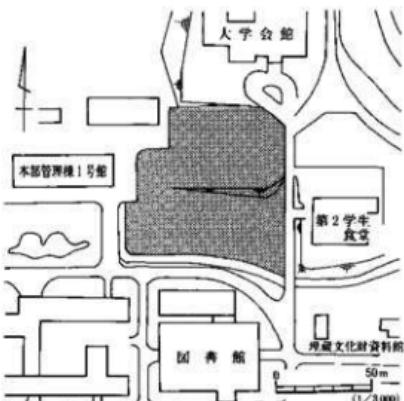


Fig. 41 調査区位置図

Tab. 3 大学会館前庭部立会調査一覧表

調査名	地点	調査面積	調査期間
大学会館前庭西側階段工事	A地点	約18.0m ²	12月2日
大学会館前庭東屋工事	B地点	約4.0m ²	12月8日
大学会館前庭西側擁護壁工事	C地点	約8.3m ²	12月10日
第2学生食前自転車置場設置工事	D地点	4.0m ²	12月15日
大学会館前庭東側階段工事	E地点	約18.0m ²	12月22日
大学会館前庭電気工事	F地点	約52.0m ²	1月10日
大学会館前庭アーチ工事	G地点	12.0m ²	1月11日
大学会館前庭パーク工事	H地点	15.4m ²	1月18日
大学会館前庭カシ設置工事	I地点	約4.0m ²	2月4日
大学会館前庭鍾乳石設置工事	J地点	約3.0m ²	2月7日
大学会館前庭外灯設置工事	K地点	約2.2m ²	2月17日

立会調査を必要とする掘削を行ったのは、A～Kまでの11地点である (Fig.42)。

A地点 大学会館前庭部西側に階段を設置するため、基礎となる階段両端の2箇所を幅約1.8m、長さ約5.0m、最深部で現地表から約1.5mの掘削を必要とした。本地点は西側に隣接する本部駐車場から急激に盛り上がっており、盛り土の行われていることが予想された。このため、工事中に立会調査を行い、埋蔵文化財の有無に注意を払った。結果、掘削範囲の大部分が盛り土であり、その下の10cm程の厚さの耕土層下にある地山の上面を検出したに留まった。地山の上面において遺構を検出することはできず、本地点における旧地形の激しい削平が予想された。

B地点 東屋設置のため、約2.0m×約2.0mの範囲を深さ約1.0mまで掘削した。現地表から約80cm下位において鳥栖ロームの地山を検出したが、遺構は認められなかった。

C地点 西側に擁護壁を設置するため、幅約1.0m、長さ約8.3mの範囲を深さ約70cmほど掘削したところ、現地表下約30cm、標高22.15mにおいて灰黄褐色粘質土 (10YR 5/2) の遺物包含層の上面を検出した。この灰黄褐色粘質土は約10cmほどの厚みをもち、さらにその下には黒褐色粘質土 (5YR 2/1) の遺物包含層があった。黒褐色粘質土は掘削範囲よりもさらに下位に及んでいるようであったが、現地における関係部局との協議の結果、掘削範囲を現地表より下30cmの遺物包含層上面でとどめることで合意が得られたため、黒褐色粘質土のそれ以上の掘削を中止し現状を保存することに努めた。

D地点 大学前庭部にある自転車置場が第2学生食堂前に移築された。屋根の支柱基礎部分となる4箇所を、1.0m×1.0mの範囲で深さ1.0mまで掘削した。約15cm程のマサ土の

吉田構内の立会箇所

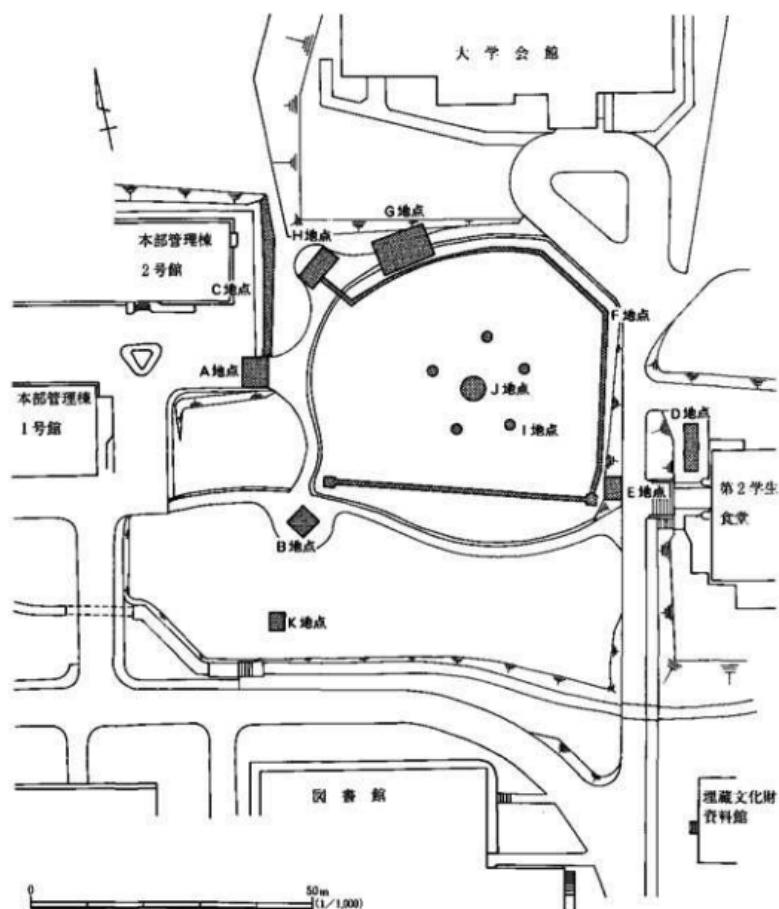


Fig. 42 立会地点位置図

下には鳥柄ロームがなく直に山土であり、本地点周辺の削平の激しさが明かとなった。

E地点 東側にも階段を設置するため、西側階段と同じ工事が行われた。既に道路布設により削平を受け、埋め土による客土がなされた地点であり、埋蔵文化財への支障はなかつた。

F地点 外灯用電気配線の管路を幅約40cm、深さ30cmで前庭部上段部分の西側を除く周縁に沿って掘削を行った。管路の総延長は約130.0mである。北東側のコーナー（大学会館ロータリーの西側）では鳥柄ロームの地山を検出し、この付近が旧地形の高まった箇所であることを確認した。遺構や遺物包含層は認められず、削平を受けたものと考えられる。

G地点 前庭部上段の遊歩道にアーチを設置するため、遊歩道の両わきに6箇所ずつ計12箇所を1.0m×1.0mの範囲で深さ1.0mまで掘り下げた。前庭部上段及び大学会館周辺は盛り土によって現在のような丘になっており、1.0m程の掘削では盛り土された砂を検出するに留まった。

H地点 前庭部上段の西側にバーゴラを設置するため、基礎部分の6箇所を1.6m×1.6mの範囲で深さ1.0mまで掘り下げた。G地点に隣接しており、同じく盛り土であったため、埋蔵文化財への支障はなかった。

I・J地点 前庭部上段の丘にモニュメントとなるべき、鍾乳石とシラカシの木を設置する工事が行われた。現在の丘は厚さ約1.0mの盛り土によって造成されたもので、現地表をわずかに掘削する鍾乳石やシラカシの設置は、埋蔵文化財へ影響を与えたなかった。

K地点 前庭部下段に外灯を設置するため、基礎部分を約1.7m×約1.9mの範囲で深さ約75cmまで掘り下げた。今回の環境整備で、前庭部下段には從来の盛り土にさらに約30cm程の盛り土がなされており、埋蔵文化財への支障はなかった。

以上が大学会館前庭部環境整備に伴う立会調査の結果である。事前におこなった関係部局との協議によって、掘削箇所を盛り土の厚い地点に限定するなどの措置を取ったため、C地点以外は埋蔵文化財に関しての支障がなかった。C地点についても、遺物包含層が露出した時点で現地において関係部局との協議を行い、工法の変更によって保存されることとなった。なお、整備された大学前庭部には、東側階段横に焼付けタイルによる説明板を設置し、遺跡を保存し後世に引き継ぐ地区であることを明示している。

【注】

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新設予定地M-14・15区の試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、1985年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』V、1986年)

10 環境整備（遺跡保存地区）に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 H-20、I-19・20・21、J-20・21

調査期間 平成5年12月8日～平成6年2月15日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約361.0m²

調査結果 吉田構内の第1学生食堂西側にある遺跡保存地区が、平成5年度環境整備の対象となった。本地点は山口大学吉田調査団による昭和42年の発掘調査により、弥生・古墳時代の堅穴住居跡を含む多数の遺構、遺物が検出されている。吉田遺跡における本地点の重要性を認識した調査団は、マサ土を厚く敷き詰め遺構を保護し、住居跡の位置を瓦と芝生によって仮に示し、将来の本格的な遺跡修景を期すこととした。この後、吉田調査団から埋蔵文化財資料館へと吉田遺跡の調査組織は移り変わり、当時の事情を知る関係者が転出していく中で、遺跡保存地区及びその整備計画は風化しつつあった。しかし、昭和56年度に遺跡保存地区北側で行われた教育学部校舎新宮に伴う発掘調査で、弥生時代後期の堅穴住居跡が4棟検出されるに至って、これらを含んで大規模な居住域となる遺跡保存地区的重要性が再認識された。この結果、現状保存されたままの遺跡保存地区的修景・復元のためのデーター収集を目的とした再発掘が昭和57～61年度にかけて行われることとなった。遺跡保存地区の再発掘は、弥生時代中期前半から古墳時代中期の堅穴住居跡21棟、弥生時代中期前半から古墳時代前期の土塹50基、弥生時代中期中頃から古墳時代前期の溝14条、古墳時代後期から奈良時代の河川跡および柱穴など遺構の実数を明らかにした。

遺跡保存地区修景への基本構想は整ったが、経費の面で不都合が生じ、計画は立消えの状態となっていた。今回の遺跡保存地区環境整備は大学会館前庭部や正門周辺と同じ構内公園整備の一貫であり、埋蔵文化財資料館主導によるものではないが当地区の性格を十分に考慮し、かつて埋蔵文化財資料館が提示した整備試案に基づいた公園設計がなされた。



Fig. 43 調査区位置図

Tab. 4 遺跡保存地区立会調査一覧表

調査名	地点	調査面積	調査期間
北側階段工事	A地点	約5.0m ²	12月8日
電気設備工事	B地点	約26.0m ²	12月24日
電気設備工事	C地点	約12.5m ²	12月27日
電気設備工事	D地点	約13.5m ²	12月28日
河川跡復元工事	E地点	約300.0m ²	1月26日
水道設備工事	F地点	約4.0m ²	2月15日

すなわち、説明板を設置し、住居跡をタイルで河川跡を石灰岩クラッシャー敷きによって行う平面表示である。これらとは別に公園整備として階段や遊歩道の足元灯、ベンチなどの設置が計画された。遺跡保存地区は約50cmの盛り土によって現状保存されており、多少の掘削ならば支障はないものと思われたが、埋蔵文化財資料館はこれらの整備の際にはさらに盛り土することを提示した。この案は経費の関係から不可能とされたため、掘削深度の深いものについて埋蔵文化財資料館が立会調査を行うことにした。

立会調査を必要とする掘削を行ったのは、A～Fの6地点である(Fig.44)。

A地点 グラウンドより一段高くなった遺跡保存地区的北側に階段を設置するため、幅約2.0m、長さ約2.5mの範囲を現地表から約25cmほど掘削した。掘削は盛り土と搅乱土部分にとどまった。

B地点 遺跡保存地区的東側にある既設マンホールに接して、北側にハンドホールを設置し、そのハンドホールから電気線を遺跡保存地区的東辺に沿った埋設が計画された。ハンドホール設置坑は1.0m×1.0mの範囲で深さ約90cmを掘削するものであったが、既設マンホールによって搅乱を受けており、地表下約70cmで削平された浅黄色粘質土(5Y 7/4)の地山を検出した。

電気配線は幅約50cm、深さ約50cmで総延長約50.0mの掘削を必要とした。再発掘により遺跡保存地区的東辺は側溝により搅乱を受けていることが報告されていたため、側溝に沿って埋設するよう指示した。しかし、搅乱は部分的なものであつたらしく、地表面より約45cmほど掘削すると約7.0mの長さに渡って遺物包含層が露出した。遺物包含層は約10cmの厚さをもち、その直下には青灰色シルトの地山があった。現地において掘削を遺物包含層の上面でとどめるよう指示した。

C地点 B地点で設置したハンドホールから北方向に遺跡保存地区的東辺に沿う電気配

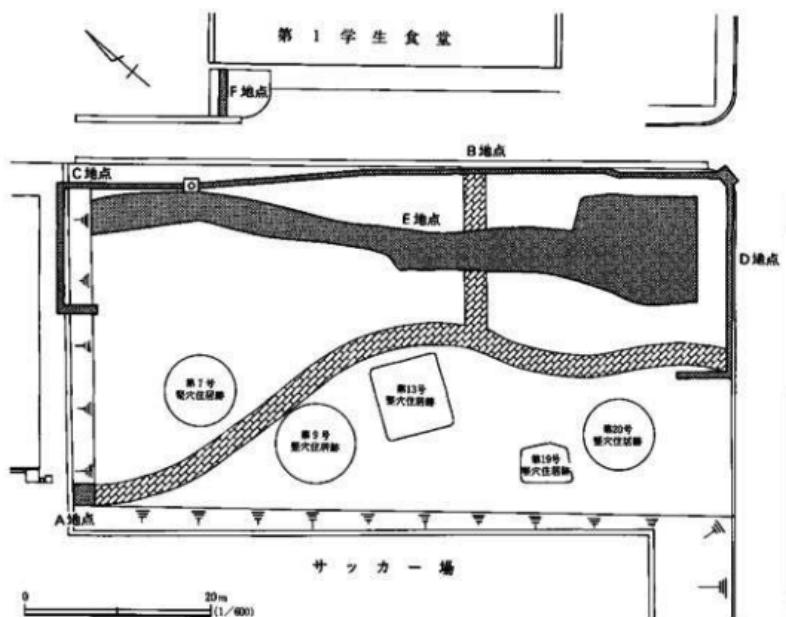


Fig. 44 立会地点位置図

線と、北辺の中央から出て先の東辺配線の北端部に合流する電気配線のため、幅約50cm、深さ約50cmで、総延長約25.0mの掘削を行った。既設の水道管があり、掘削範囲は擾乱部分であった。

D地点 遺跡保存地区の南辺を、電気配線のため幅約50cm、深さ約40cmで総延長約27.0mの掘削を行った。掘削の深さ40cmは盛り土内で、埋蔵文化財への影響はなかった。

E地点 遺跡保存地区の東辺に沿って検出された河川跡を、原位置で盛り土上に復元するため、河川跡の範囲に沿って地表面を約30cmほどさきとった。掘削範囲は遺構保護のために盛り土がなされた部分であり、埋蔵文化財への影響はなかった。

F地点 **B地点**のハンドホールに、第1学生食堂から電気本線を引き込むため、保存地区と第1学生食堂の間にある道路部分を幅約75cm、深さ約50cmで掘削した。掘削は旧水田の床土層までにとどまった。既存の下水溝付近では、その下で配線を行うため深さ約1.1mほどの掘削を行ったが、下水溝の設置により擾乱をうけていた。

以上が遺跡保存地区環境整備に伴う立会調査の結果である。本地点は遺跡を保護するために盛り土がなされており、掘削が埋蔵文化財に対して影響を与えることはB地点を除いてなかった。また、関係部局も遺跡保存地区であるという本地区的性格を踏まえた上で、B地点における遺物包含層露出の折には、工法の変更に柔軟に対処していただいた。

このようにして、山口大学吉田調査団からの念願であった遺跡保存地区的修景は行われた。5棟の竪穴住居跡はカラータイルによって、河川跡は石灰岩のクラッシャー敷きによって平面復元している。復元された遺構ごとや入り口に、転写タイルによる説明板を設置している。説明板は平易な文章と発掘調査当時の写真により、見学者が遺跡をイメージし易いように工夫している。構内道路に接した南辺や体育器具庫に接した北辺には、景観を考慮して植栽を行い、歴史的空間を現代から独立させている。また、保存地区は単に遺構を修景しただけでなく、それらを巡る遊歩道やベンチを設置し、芝を張るなど公園としての機能も兼ね備えている。ある時は野外博物館として、ある時は憩いの場として、使用者に応じた多機能な施設として活用することが可能である。

構内で遺跡が保存された空間は、公開・活用を目的として公園整備され、研究教育の施設として新たな価値を生み出した。多くの方々の協力と努力によって整備された遺跡公園を、大学の内外を問わず広く利用してもらえることを望んでいる。

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学構内遺跡保存地区的発掘調査(昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』V、1986年)
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学構内遺跡保存地区的発掘調査(昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』VI、1987年)
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学構内遺跡保存地区的発掘調査(昭和60-61年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』VII、1990年)
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区的発掘調査(総括)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』IX、1991年)

11 環境整備（正門周辺）に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 H-12・13、F・G-13

調査期間 平成6年1月6・21日、同2月4日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約350.0m²

調査結果 正門周辺の環境整備として、平成6年度は2件の工事が計画された。1件は門衛所の前にある築山に、「あい広場」と称するポケットパークを設置するものである。工事は築山を道路面まで掘削するもので、盛り土の範囲と考えられ立会調査を行った。築山で最も掘削が及んだ範囲では、掘削面から築山表土層まで高さ約1.3mの崖面を呈する。崖面に露出した土は、いずれも盛り土であり埋蔵文化財には支障がなかった。

もう1件は生活排水処理施設と弓道場の間に、プレハブの廃棄物倉庫を新設するものである。工事はプレハブの基礎設置のため、現地表から深さ70cmまで掘削するものであった。正門周辺は過去の調査から、吉田遺跡の低地部にあたり相当の埋め土が客土されているものと予想されている。本調査地周辺では、平成3年度のサークル棟新営に伴う立会調査が行われており、現地表から約60cm下位までは埋め上であった。本調査地においても同様な状況が予想されたが、立会調査を行い土層の変化に注意を払った。当初の予想通り、掘削範囲は埋め土で埋蔵文化財には支障がなかった。

正門周辺は構内造成時の埋め土が厚く、小規模な工事等ではその掘削が旧地表面にも及ばないため、埋蔵文化財の分布に関する
は不明な地域である。今後の継続的な調査によって、明らかにしていく必要がある。

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「サークル棟新営に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1993年)



Fig. 45 調査区位置図

第2節 小串構内の立会調査

1 医学部臨床実験施設新営その他工事に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 平成5年4月5日、同6月8日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約9.0m²

調査結果 工事は動物・RI実験棟の新営に伴い、既設の共同溝に接続する新営棟からの新たな共同溝を設置するものが1件と、動物・RI実験棟からの屋外配水管の布設が1件である。本調査地に関しては、平成2年度に本体の動物・RI実験棟部分で事前の試掘調査が行われている。その調査結果から、本調査地に遺構・遺物が埋存する可能性は薄いと考えられた。このことにより、調査方法は工事施工時における立会調査とした。

4月5日に共同溝の掘削に伴う立会調査を行った。現地表面から約2.1m下位まで、構内造成等による埋め土が厚く客土されている。埋め土の直下には、第2層：青灰色粘質土（5BG 5/1）が堆積する。層の厚さは約50cmである。その下には、貝殻を含んだ第3層：青灰色粘砂（5BG 5/1）が堆積する。青灰色粘砂を50cmほど掘削したが湧水が激しく、調査を中止した。現地表面の2.0mよりも下位に青灰色粘質土が検出されたことは、動物・RI実験棟の調査結果とも一致する。この青灰色粘質土には遺物が含まれておらず、本調査地周辺部は遺構・遺物が希薄な地域と考えられる。



Fig. 46 調査区位範囲

6月8日に行われた屋外配水管の布設に伴う立会調査では、掘削深度が約30cmと浅く、埋め土の範囲内であった。

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部附属病院動物・RI実験棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1992年)

小串構内の立会調査

2 医学部附属病院基幹整備（焼却棟新営その他工事）に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 平成5年4月9日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約6.0m²

調査結果 工事は既設の焼却棟を解体し、新たに焼却棟を建設するものである。新営予定地は平成4年度にボーリング調査¹⁾が行われており、そのデータにより地表から深さ2～4mの範囲は造成上であることが判明していた。また、既設の焼却棟により、地下が搅乱を受けていると想定されたため、埋蔵文化財資料館は既設焼却棟撤去後の新設棟工事施工時に立会調査を行うこととした。

新設棟の基礎が及ぶ地表下2.0mはボーリング調査のデータ通り、構内造成等による埋め土が厚く客土されていた。また、2.0mより下位からは湧水が激しく、それより下位の土層を確認することは不可能であった。今回の工事では埋蔵文化財への支障はなかったが、本調査地より12.0m西側で昭和61年度に雨水井の取設に伴い立会調査を行い、地表下80cmで未搅乱の青黄橙色粘質土層が確認されている。遺構・遺物は未検出であるが、掘削規模が小さくその有無について正確な判断は成していない。本調査地は昭和61年度の調査地よりも真綿川に近く、青黄橙色粘質土層がより深い位置で検出される可能性がある。本調査地周辺で地下の破壊が2.0m以上に及ぶ場合には、排水処理を伴った調査を行う必要がある。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「焼却棟地盤調査に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』3), 1994年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「医学部附属病院外來診療棟周辺環境整備等に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』VI, 1987年)



Fig. 47 調査区位置図

第3節 光構内の立会調査

附属光中学校武道館新営その他工事に伴う立会調査

調査地区 光構内

調査期間 平成5年7月5日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約6.0m²

調査結果 附属光中学校武道館の新営に伴い、屋外排水管の布設が必要となった。工事は武道館から中学校校舎前の既設拠までの延長約30.0mを、幅約50cm、深さ約60cmにわたって掘削するものである。平成4年度の武道館新営に伴う発掘調査では、古墳時代と中世の遺構面を2面検出している。遺構は土壙や柱穴などが、遺物は縄文土器・須恵器・土師器などが検出されている。また、昭和40年の附属光中学校体育館の新営では、縄文土器～中世土器を含んだ遺物包含層が検出されている。峨眉山の据にあたる武道館から、御手洗浜の汀に近接する体育館までにわたる遺物包含層の堆積が予想される。今回の屋外排水管布設工事は、武道館から体育館方向に向かっての掘削であったため、地下の埋蔵文化財への影響が懸念された。掘削幅が狭いため、埋蔵文化財資料館が工事に際して立会調査を行い、地下の状況に注意を払うこととした。

現地表から下約30cmは、黄褐色砂（2.5Y 5/4）による表土層であった。表土層より下には、黒褐色砂（2.5Y 3/1）層が掘削範囲の地表下約60cmまで続いている。この黒

褐色砂は体育館方向に進むに従って淡くなる。また、黒褐色砂層は遺物包含層と考えられるが、わずかに近世陶磁器類の小片が数点出土したのにとどまった。

【注】

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属中学校武道館新営に伴う発掘調査」
〔『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅲ、1986年〕
- 2) 福本幸夫「御手洗遺跡」〔『先原史時代の光市』、1966年〕



Fig. 48 調査区位置図

付 篇

付篇 I

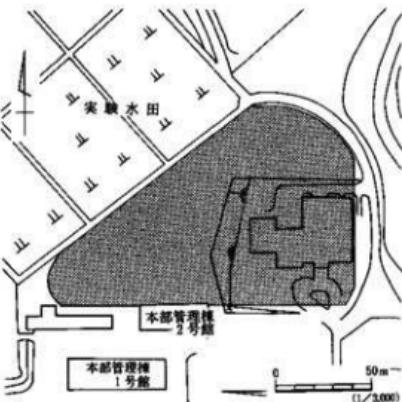
吉田遺跡第 I 地区 D 区の調査

1 調査の概要

昭和46年4月に調査の行われた吉田遺跡第I地区D区は、吉田構内の中央部からやや北よりに位置し、現在では大学会館及び農学部の家畜飼料園として利用されている。地形的には、姫山の北から南にのびる支脈である通称「もり山」が、西に向かって舌状に張り出した洪積段丘の北斜面、19.0~24.0mの標高に立地している。

この洪積段丘および周辺においてD区調査以前には、昭和41年にA・B区（本部前排水路）、昭和42年にC区（本部1号館）¹⁾の調査が行われている。A・B区からは弥生時代中期後半の土壌や古代の遺物包含層、時期不詳の柱穴が、C区からは土壌・柱穴などの遺構や、弥生時代後期終末の土器を多量に検出している。これらの調査により、この洪積段丘周辺は遺構分布密度の高い地域であることが判明し、吉田遺跡調査団は第I地区と呼称し重視した。また、D区の調査以後にも、昭和46年E区（第2学生食堂）、昭和54年本部2号館、昭和58年大学会館などの調査が吉田遺跡調査団や埋蔵文化財資料館によって継続された。E区からは古墳時代中期の方形竪穴住居跡が6棟、古代の溝が1条、時期不詳の柱穴が多数検出されている。本部2号館からは弥生時代後期終末の土壌、近世初期の屋敷跡などが検出されている。大学会館からは古墳時代中期の土壌や時期不詳の柱穴、弥生土器・土師器・須恵器の他に綠釉陶器・青磁・白磁・石錦帯・硯・木筒などの特殊な遺物が検出されている。

これらの調査により、弥生時代～近世に及ぶ第I地区的遺構分布密度の高さが明らかとなっている。特に、大学会館から出土した木簡や石錦帯などの、官衙的遺物は本地区の重要性を示すものといえる。そして、D区はこの大学会館調査区と重なりながら、標高の低い実験水田側へと広がっている。



D区調査の経緯は吉田遺跡調査団発行の『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』によれば、「この地区に仮設の排水溝が長く掘られ、倒斜面にとうもろこしを播種するため耕耘した際、弥生式土器ら古式土器の破片を含む包含層が、5ヶ所で掘り出されたことからこの地とその周辺部を調査した。」とされている。また、当時の調査日誌によれば、「今回は、農学部が仮設農道以北を牧草地にするため、農道以北に重点を置き、農道以北については、後に詳しく調査する。」と記述されている。これらの記録から、本地区を家畜飼料園とする計画の具体化に伴い、耕作による地下への影響が予想されたため、吉田遺跡調査団は試掘調査を行ない、埋蔵文化財分布の把握を行ったことが読み取れる。

現在、埋蔵文化財資料館にはD区に関連した調査日誌が1冊と、図面が28葉残されている。28葉の図面のうち、15葉が原図であり13葉がその縮尺図である。また、36枚撮りフィルムのネガが、カラー1本、白黒2本の計3本保存されている。当時の調査を記録するものは、これらが全てである。過去に幾枚かの図面が散逸してしまい、遺構平面など内容を明らかにしえない部分がある。図面を欠くものについては、調査日誌や当時の写真によって推測し、文章及び図版での報告を行うこととする。

D区における調査は調査日誌によれば、まず発掘調査に先行してボーリングによる予察調査が行われ、7ヶ所の遺物包含層分布地点を確認している。この7ヶ所の遺物包含層分布地点に対して、トレチングが設定されている(Fig.50)。各トレチングの主軸は仮設農道に平行しており、農道にあわせてその設定が行われたと考えられる。各トレチングは洪積段丘の北斜面、標高19.0~24.0mの範囲に配置されている。D区のうち最も低い標高19.0~20.0mの部分では、3ヶ所で調査が行われている。南から北へ、第1地点、第2地点、第5地点の順である。次に、標高21.0~22.0mの部分では仮設農道を挟んで南に第3地点、北に第6地点の2ヶ所が設定されている。最も高い標高23.0mの部分には、仮設農道の部分に第4地点、その北側に平行して第7地点の2ヶ所が設定されている。これら7ヶ所の調査は、当初から厳密な計画が立てられていたわけではなかったらしく、調査日誌によればそれぞれのトレチングでの埋蔵文化財の遺存状況によって、調査の中断や拡張が行われている。このためか、いずれのトレチングも複雑な形状をしている。調査は、昭和46年4月12日から4月25日までの14日間、山口大学吉田遺跡調査団が山口県教育委員会社会教育課と山口大学文化会考古学部員の協力を得て実施した。なお、今回の報告に使用した発掘調査の図面類は、すべて山口大学吉田遺跡調査団が当時記録したものであるが、掲載にあたっては埋蔵文化財資料館が新たにトレースしたものを使用した。

調査の概要

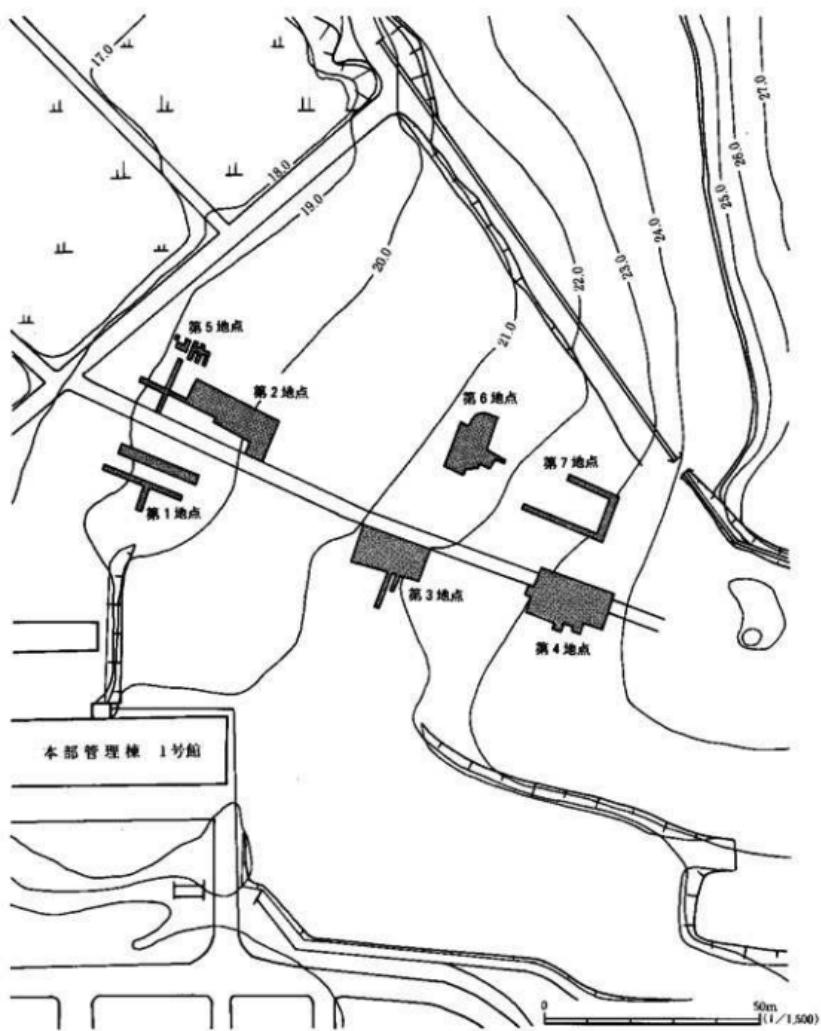


Fig. 50 トレンチ設定図

2 第1地点

第1地点はD区に設定されたトレンチのうち、第2・5地点とともに最も西側に位置し、標高も最も低いトレンチである。第2地点とは東南から西北にむかって走る仮設農道を挟んで向かい合っている。第1地点の調査に至る経緯は、吉田遺跡調査団が当時に刊行したガリ版刷りの『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』によれば、「仮設の農道の側溝として掘られた排水溝に、8~10mの長さに遺物包含層が露出していたので、はじめは堅穴住居址ではないかと考え付近一帯をボーリングしたところ、ほぼ南北方向に走る巨大な溝状の掘り込みであることがわかった。そこで、遺構の形態と構造や文化期をとらえる目的で、所要のトレンチを設けて発掘した。」とされる。埋蔵文化財資料館が保管する第1地点の図面類は平面図を欠き、土層断面図及びその縮図のみが残存している。

第1地点の調査区規模に関する記述は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』では認められない。しかし、資料館に残された第Ⅰ地区D区トレンチ設定図(Fig.50)によれば、等高線に直交して東南-西北に長軸をもつ長さ約20.0mのトレンチが平行して2本設定されている。幅2.0mの北側トレンチに対して、南側トレンチは幅が1.0mと狭い。南側トレンチはさらにトレンチを垂直に2分するかのように、拡張区が5.0mほど南に張りだしている。発掘調査日誌によれば第1地点の調査は4月12日に始まり、4月15日までは掘削作業が終了していたものと考えられる(4月15日の日誌が未記入のため明らかにしないが、16日以降の第1地点に関する掘削の記載が見られることより判断した)。土層断面図は、4月23・24日に作成されている。

第1地点における作業内容の詳細が日誌に記録されている。これによれば、掘削が開始された4月12日には溝状の落込みが確認され、第Ⅰ地区C区(本部)で検出された溝状遺構との関連が想定されている。4月13日には溝状遺構の下部に泥炭層が分布していることが判明している。また、第1地点の溝状遺構の延長を探す目的で、第5地点の掘削が行われている。4月14日には溝状遺構の下部で確認された泥炭層を調べるために、2ヶ所でツボ掘りが行われている。第1地点の溝状遺構は第Ⅰ地区C区(本部)で検出されたものとの関連が当初想定されていたが、「山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報」によれば「耕耘された土壤や旧水田土層の下位に、東西の上幅約17m、下幅13.5m、深さ1mから1.3m以上の幅の広い溝状遺構で、南部にいくにつれて浅くなり、昭和43年に発掘調査した本部敷地の調査の際に掘りだした溝状遺構と異なるものであることがわかった。」とされる。地点的に平成5年度本部裏給水管埋設に伴う発掘調査で検出した、近世大溝に対応するものと想定できる。

第1地点

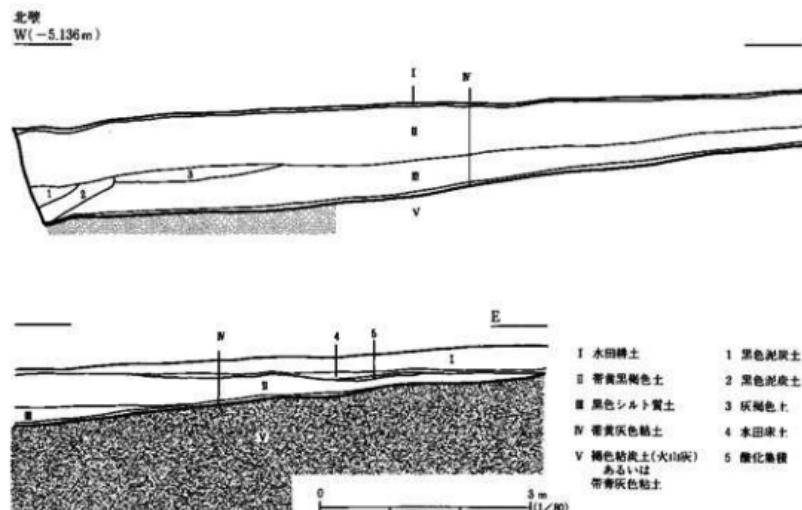


Fig. 51 第1地点土層断面図

第1地点は、次のような基本層序である (Fig.51)。

第I層：水田耕土、厚さ5～30cm

第II層：帶黃黑褐色土（土師器～中世土器片を含む）、厚さ5～80cm

第III層：黒色シルト質土（泥炭層、摩滅した弥生土器片を含む）、厚さ15～40cm

第IV層：帶黃灰色粘土、厚さ約3cm

第V層：褐色粘炭土（火山灰層）あるいは帶青灰色粘土（地山）

第I層は耕土層であるが薄く、直下が遺物包含層である。図面中には「土器は最下層にまで包含している」との記載が見られ、第II層から第IV層まで遺物包含層であったと考えられる。東から西にむかって地表の標高が下がっているが、それ以上に地山が下がっており、遺物包含層である第II・III層が厚みを増している。なお、第V層地山に関して図面上に褐色粘炭土と帶青灰色粘土の境は示されていない。現在の知見からすれば褐色粘炭土は鳥栖ロームであり、帶青灰色粘土は八女粘土であると考えられる。とすれば、帶青灰色粘土は褐色粘炭土よりも下位の堆積層であり、帶青灰色粘土の露出は褐色粘炭土が侵食されたことによるものであろう。

第1地点出土遺物 (Fig.52-1~19, PL.25)

1は複合口縁壺の口縁部片である。頸部以下及び口縁端部を欠失し、残存する口縁部も全体の1/3程度である。口縁部の形態は頸部がゆるやかに外反し、その端部において強く「く」の字に屈曲して口縁部へと立ち上がっている。口縁部の屈曲部分は、断面において接合痕が認められる。内外面の風化が激しく、調整を観察することは出来ない。弥生時代後期の土器と考えられる。2は高坏の脚部部片である。底径を復元してはいるが、小片のためその数値には誤差が含まれる。脚端部はヨコナデによって、つまみ上げられる。内外面の風化が激しく、調整を観察することは出来ない。弥生土器と考えられるが、古墳時代中期の土師器である可能性もある。3・4・5は底部片である。いずれも風化が激しく、調整を観察することは出来ない。また、いずれも底面が小さく、器壁が厚いことから、弥生時代後期後半の土器と考えられる。

6は土師器高坏の口縁部片である。坏部の屈曲部以下を欠失し、残存する口縁部も全体の1/5程度である。口縁部の形態はやや内弯気味に立ち上がり、端部がヨコナデによって外方へ屈曲している。内外面の風化が激しく、調整を観察することはできない。古墳時代中期の土器と考えられる。7は土師器高坏の脚部である。脚部は坏部との基部よりゆるやかにひろがり、裾部は強く屈曲して外方に長く伸びる。脚端部はヨコナデによって面をもつ。内外面の風化が激しいが、内面には時計と逆回転のケズリ痕を残している。なお、脚部の中央には、焼成後に外面から施された穿孔をもつ。孔径は6.5mmである。古墳時代中期の土器と考えられる。8は須恵器の坏身である。立ち上がり及び、胴部下半を欠く。立ち上がりの根元部分は残存しており直立気味であることや、比較的しっかりとした作りから、その所属時期は6世紀前半と考えられる。

9・10は鍋の口縁部である。胴部を欠くため、足付きであったかは定かではない。9の口縁部外面は、ヨコナデによってかすかにくぼんでいる。口縁端部は上方に、やや立ち上がり気味である。その口縁部の特徴から、岩崎編年のⅢ型式と考えられる。10の口縁端部はヨコナデによってつまみ出されるが、折り返すまでには到らない。その口縁部の特徴から岩崎編年のⅣ型式と考えられる。11はいわゆる羽釜の口縁部片である。口縁端部はヨコナデによって幅広い面をもつ。口縁端部よりわずかに下がった位置に、水平な鈎を張り付ける。内面にはハケ調整を残す。12・13は足鍋の脚部である。14・15は高台をもつ土師器塊の底部である。いずれも高台の突出は低い。16~18は高台をもたない土師器塊の底部である。19は土鍤である。

第1地点

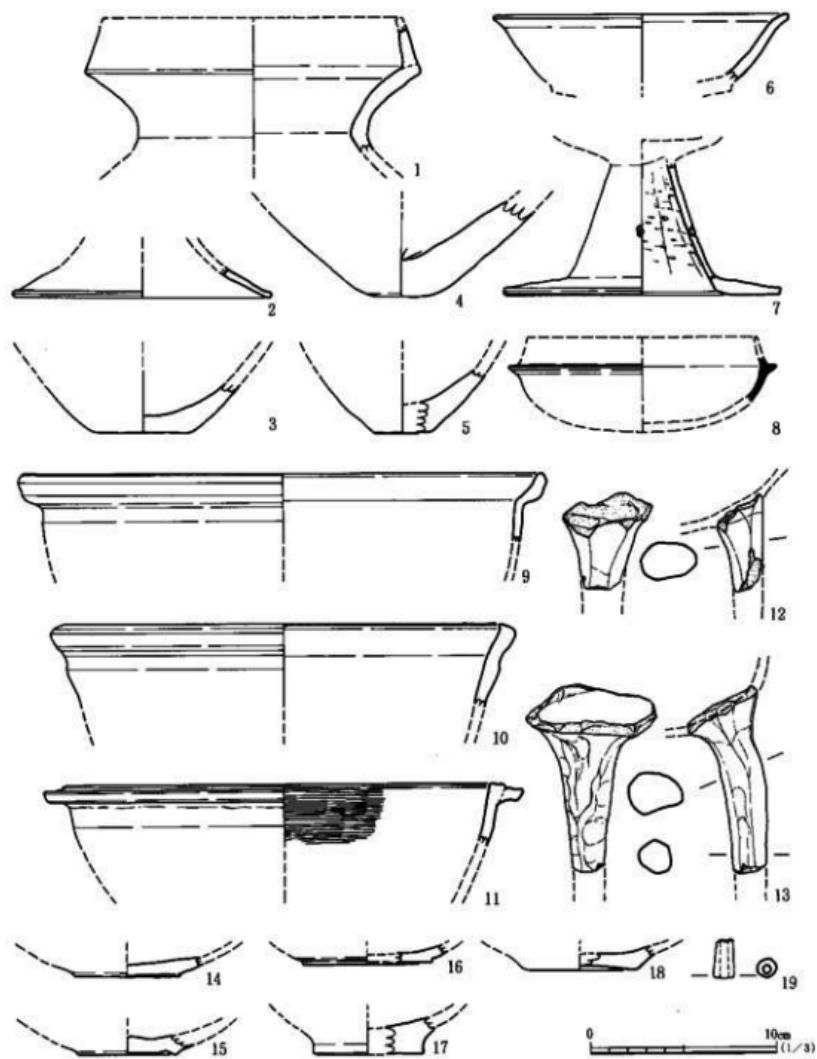


Fig. 52 第1地点出土遗物实测图

3 第2地点

第2地点は仮設農道を挟んで第1地点と向かい合い、北側には第5地点が近接している。標高19.0~20.0mに位置しD区では第1・5地点とともに、最も標高の低いトレンチである。第2地点の調査に至る経緯は、「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」によれば、「第1地点から仮設農道を挟んだ北東側の飼料闇で、耕耘された土壤が黒褐色をした遺物包含層であったので、総めくりして調べた。」とされている。埋蔵文化財資料館が保管する第I地区D区の図面類は、第2地点の平面図も土層断面図も欠いている。この点については後述するが、当初より実測作業が行われていなかった可能性がある。第2地点トレンチの位置や形については、第I地区D区のトレンチ設定図から知ることが出来る。

第2地点の調査区規模に関する記述は、「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」には認められない。第I地区D区トレンチ設定図(Fig.50)によれば第2地点トレンチの形態はやや複雑である。仮設農道に平行した長さ24.0m、幅7.0mの長方形を基本形としているが、南側辺の東端部が幅5.0mほど仮設農道にむかって突出し、西側辺の南端部には十字形のトレンチが取り付いている。このようなトレンチの形態が、いかなる目的で設定されたのかは不明である。おそらく、遺物の包含状況の確認を目的としたトレンチの拡張が行われたため、不定形な形態になったものと考えられる。

発掘日誌によれば第2地点の調査は4月12日に始まっているが、すでに4月13日の日誌には「P.D.2は、破壊されている可能性が非常に濃い」と記述されている。また、4月13日の日誌に明日の予定が記述されており、そこには「P.D.2 溝状遺構に至るまでの表土はぎ」とある。しかし、4月14日以降の日誌には、第2地点に対する記述が全く認められない。このことから、第2地点の調査が4月14日以降行われていなかったと想定することも可能である。また、「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」によれば、「(前略)削剥が著しいため明瞭な遺構の形態はとらえられず、若干の小起伏面や、小石の配石を見だしたにすぎなかった。」とされる。おそらく、表土除去作業中に搅乱の激しいことが判明し、本地区的調査はその時点で切り上げられ、他地区に調査の主力が置かれたものと考えられる。削平により遺物包含層も遺構も検出されなかったため、第2地点の土層断面図も遺構平面図も作成されなかつたのであろう。第2地点出土遺物には、粗陶器片や砥石など近世あるいは近代のものと考えられる遺物がある。「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」に記述された「小石の配石」も含めて考えるならば、近世の屋敷地があり、周辺を整地によって削平している可能性が強い。

第2地点

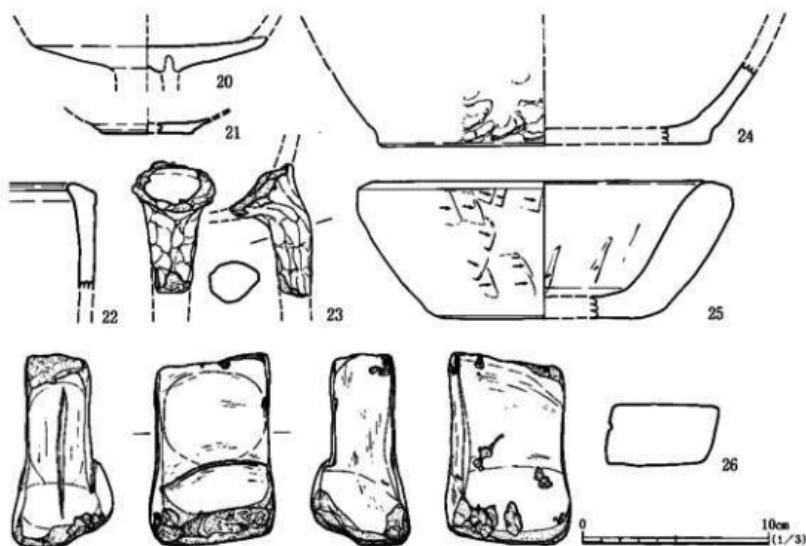


Fig. 53 第2地点出土遺物実測図

第2地点出土遺物 (Fig.53-20~26, PL.26)

20は高坏の坏部である。口縁部と脚部を欠失する。脚部との接合痕を明瞭に残す。内外面の風化が激しく、調整を観察することが出来ない。古墳時代中期の土器と考えられる。21は土師器皿の底部である。風化が激しいが、底面には糸切り痕を残す。22は土師質の粗陶器で、器形は口縁部に最大径をもつ壺と考えられる。口縁部を内側に突出させ、上端に幅広い面をもつ。口縁部外端からやや下った部分に、接合痕による一条の沈線を残す。内面には成形時のタキ工具痕とそれを消したハケ工具痕が一部残る。近世あるいは近代のものと考えられる。23は瓦質土器の足鍋の脚部である。脚部外面には成形時の指頭圧痕を残す。24は土師質の粗陶器で、壺の底部と考えられる。底部側面には指頭圧痕を多数残している。22の口縁部と同じく、近世あるいは近代のものと考えられる。

25は滑石製の石鍋である。底部から胴部が斜めに立ち上がり、そのまま口縁部となる。鋤はもない。口縁端部は肉厚である。ノミ痕をかすかに残すが、製品であるらしく、外面には吹きこぼれの痕跡がある。26は石英斑岩製の砥石である。4面を使用する。実測図における正面には、鋤の曲刃部分を研ぐことによって生じた、半円形の高まりを残している。また、左側面には何等かの刃部を研ぐことによって生じた、長さ約7.0cm、幅4mm、深さ2mm弱のV字形をした溝がある。

4 第3地点

第3地点は標高21.0~22.0mのD区中央に位置し、仮設農道の南側に接しており、第6地点とは仮設農道を挟んで向かい合っている。第3地点の調査に至る経緯は、「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」によれば、「第1地点の東方約42mの地点で、仮設農道の掘取面に竪穴住居址か円形土壙とみられる遺構の一部が露出していたので、付近を縁ぐりして調査した（後略）」とされる。仮設農道の側溝が遺物包含層を露出させたと考えられる。埋蔵文化財資料館が保管する第3地点の図面類は、平面図1葉に南壁断面図1葉、東壁断面図1葉、土壙断面図が1葉の計4葉である。

第3地点の調査区は平面図によれば仮設農道に平行しており、南長辺約15.2m、北長辺約14.4m、東短辺約7.2m、西短辺約8.4mのいびつな長方形を呈している。また、土層確認のための幅50cmのトレンチが調査区の南側に2本延長されている。発掘調査日誌によれば、4月13日から調査が開始されている。発掘日誌には「今回調査しない予定であったが、調査することにし、とりあえず、トレンチを2本入れる。」との記述がなされている。さらに4月14日の記述には「P.D 3・4にて表土を取り除いた結果住居址らしきものが見つかっており、以後こちらに重点をおいて調査する。」とある。これらの記述の背景には、D区の低地部である第1・2・3地点の調査成果がおもわしくなかったため、調査の重点が他所に切り替えられたことを示していると考えられる。この後、竪穴住居跡状遺構の検出や図取りが行われ4月24日に調査が終了している。

第3地点で検出された主な遺構（Fig.54）として、竪穴住居跡状遺構・土壙・柱穴などがある。竪穴住居跡状遺構は、発掘日誌には「方形住居址の可能性大」、「方形住居址らしいが、ピットとの関連不明」と記述されている。「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」においては、「柱穴群と深い竪穴住居址や土壙を検出することができたが、これまた、複雑に遺構が重複し、損壊が著しいので、それらの元の形状をとらえることが困難であった。」と記述され、検出状態が良好でなかったと考えられる。このことは平面図にも反映されており、竪穴住居跡としての明確な図示はなされていない。図面中には東側と西側に対応するかのように、落込みの角張ったコーナーが表現されている。これを方形竪穴住居跡の2隅と考えるならば、1辺が9.0mにも達する大型建物となる。山口県下で検出される一般的な方形竪穴住居跡は1辺が4.0m前後であり、2つのコーナーを1棟のものと考えるのには無理がある。2つのコーナーを竪穴住居跡に伴うものとするならば、2棟の竪穴住居跡が切り合ったと考えるべきである。しかし、その可能性も薄いものと考えられる。

第3地点

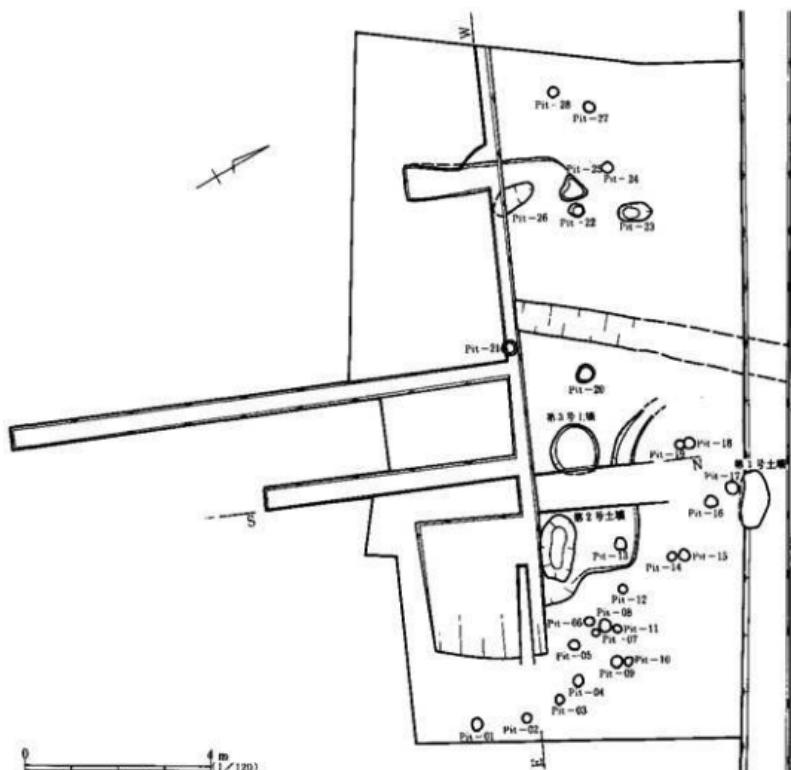


Fig. 54 第3地点遺構配置図

土壤は3基検出されている。1基は第3地点を調査するきっかけとなった、仮設農道の側溝に切られた第1号土壤で、平面は梢円形を呈している。断面は袋状で、深さは検出面より約0.6mを計り、内部は黒色上で充填される。第2号土壤は東側の竪穴住居跡状遺構と切り合っており、平面は梢円形を呈する。第3号土壤もまた、竪穴住居跡状遺構と切り合っており、平面は円形を呈する。いずれの土壤も、出土遺物はなかったようである。柱穴に関しては『山口大学構内第I地区K-D区発掘調査概報』に「なお柱穴には、直径20cm、深さ30cm内外を測る太くて深いものと、径10cm内外、深さも10cm内外の浅くて小さいものとの2群が重複しており、浅い方には古式土師器が埋まっていた。」と記述される。

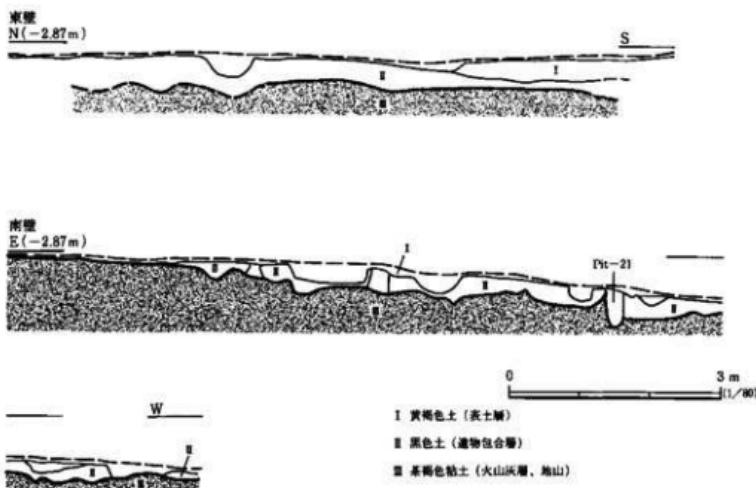


Fig. 55 第3地点土層断面図

第3地点は、次のような基本層序である (Fig.55)。

第Ⅰ層：黄褐色土（表土層）、部分的に残存

第Ⅱ層：黒色土（遺物包含層）、厚さ10~30cm

第Ⅲ層：茶褐色粘土（火山灰層、地山）

第3地点の土層断面図において地表面は破線で表現され、実線での表現は包含層の上面からである。土層断面図の注記には、「表土を5cm内外掘り取る」と記述されている。調査日誌にも、トレーニング設定が表土の除去後に行われていたことを示す記述がある。ただし、除去された表土層は、厚さ5cm前後できわめて薄いものであったと思われる。第Ⅱ層の黒色土は遺物包含層であるが、標高の高い東側では削平されて残存しない。これに対して、標高の低い西側には約30cmほど遺物包含層の堆積が残存している。Pit-21が南壁土層断面図に表現されているが、第Ⅱ層を切っており遺物包含層形成以後に掘り込まれたものである。近世以降の柱穴であろう。

第Ⅱ層の遺物包含層直下は、火山灰層の地山である。火山灰層は茶褐色粘土と注記されており、現在の鳥栖ロームを指すものである。なお、ボーリング調査を行っており、この第Ⅲ層茶褐色粘土は約40cm下位より「黄味を帯びる」ことが判明している。この「黄味を帯びる」とは、鳥栖ロームの下位に八女粘土が堆積していることを示すものであろう。

第3地点

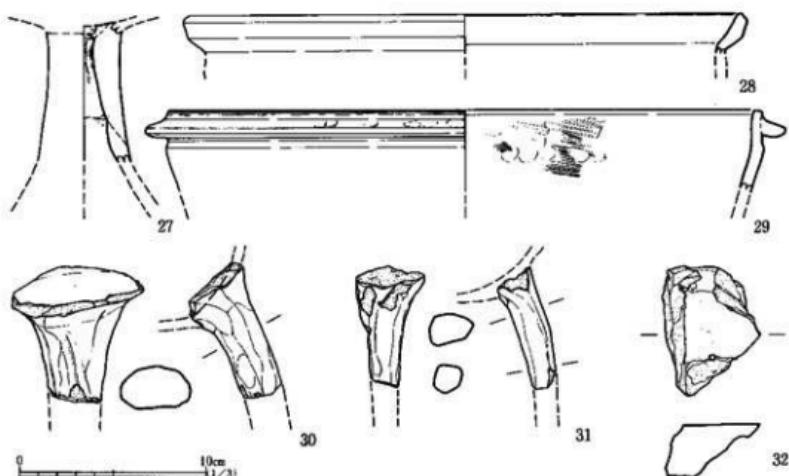


Fig. 56 第3地点出土遺物実測図

第3地点出土遺物 (Fig. 56-27~32, PL. 27(1))

27は高坏の脚部である。坏部に近い基部は柱状を呈するが、裾部を欠くため全体の形態は明らかではない。風化が激しく、調整を観察することが出来ない。基部内面にはシボリ痕を残す。弥生時代中期後半の土器と考えられる。28は鍋の口縁部である。胴部を欠くため、足付きであったかは定かではない。口縁部外面は、ヨコナデによってかすかにくぼむでいる。口縁端部は上方に、やや立ち上がり気味である。その口縁部の特徴から、岩崎編年のⅢ型式と考えられる。口径を復元してはいるが、小片のためその数値には誤差が含まれる。29はいわゆる羽釜である。口縁端部より下がった位置に、水平な鉢を張り付ける。鉢張り付けのために強いヨコナデが施され、鉢下端に接した胴部が凹線状にくぼむ。鉢の上側は全体的にナデつけられているが、下側にはナデが及ばない部分があり接合痕を明瞭に残している。内面には、左上がりのハケ調整を残す。外面は二次焼成により赤褐色を呈する。30・31は足鍋の脚部である。30は風化により色調は黄灰色を呈するが、外面には多数の指頭圧痕を残している。31は風化が激しく、器面が摩滅する。色調は二次焼成により、淡赤色を呈している。

32は凝灰岩製の砥石である。使用面の1面と自然面の1面を部分的に残すのみで、他の部分は消失する。

5 第4地点

第4地点の調査に至る経緯は、概報や日誌には記録されていない。しかし、第I地区D区全形図によれば、調査区は仮設農道と重なっており、第3地点と同じく仮設農道の設置に伴って遺物包含層が露出したために、調査が行われたものと考えられる。埋蔵文化財資料館が保管する第4地点の平面類は、平面図1葉に東西トレンチ断面図1葉、南北トレンチ断面図1葉、第1号上層図1葉、の計4葉である。

第4地点の調査区は仮設農道を挟み込む形で、農道の南側と北側に設定されている。北側の調査区は東西に約17.0m、南北に約3.6mの長方形を呈する。南側の調査区は東短辺が約4.8m、西短辺が約6.5mと西に行くに従い開き、北辺が約19.0m、南辺は不定形な階段状を呈している。調査は、D区全体の調査が開始された4月12日から、全てが終了する4月25日まで継続して行われたようであり、調査の重点が置かれていたと推測される。その要因として、4月12日の表土をめくった段階で、溝状遺構と竪穴住居跡状遺構が確認されたことによるものと考えられる。

第4地点より検出された遺構（Fig.57）は、溝状遺構と竪穴住居跡状遺構、土壙、柱穴とされる。溝状遺構は『山口大学構内第I地区D区発掘調査概報』によれば、「下位にある溝状遺構は、その上幅3.5m、下幅1.3m内外で深さは約10cmを測り、断面形は逆台形を呈して、南から北西方向に走り、第7地点を経て第6地点に連なるものと推考される。」と記述されている。しかし、平面図には溝状遺構の表現はなく、後述するが断面図には逆台形の落込みが表現されているが、概報の記述と数値が一致しない。また、第6地点及び第7地点で検出したとされる溝状遺構は、それぞれの頁において詳述するが、自然地形の落込みであることが確実である。これらに第4地点の溝状遺構が連なるものとすれば、同様な自然地形の落込みであろう。ただし、第6・7地点とは異なり土壙断面図には、落込みの両肩のあがりが表現されており、遺構の可能性も考えておく必要があろう。

竪穴住居跡とされる直徑が約15.2mの円形遺構も、溝状遺構と同様に誤認の可能性が高いものである。まず、吉田遺跡における弥生時代の竪穴住居跡で、直徑が約15.2mを測るような超大型住居があったとは考え難い。さらには竪穴住居跡状遺構は溝状遺構が埋没した後に、その上面に掘削されたとするが、溝状遺構の出土遺物に瓦質土器が含まれる以上、竪穴住居跡の可能性はきわめて低いといえる。遺物を包含した、何等かの浅い落込みであったと考えられる。竪穴住居跡状遺構の南側では、直徑約1.0m、深さ90cmの不整円形の土壙が1基検出されている。

第4地点

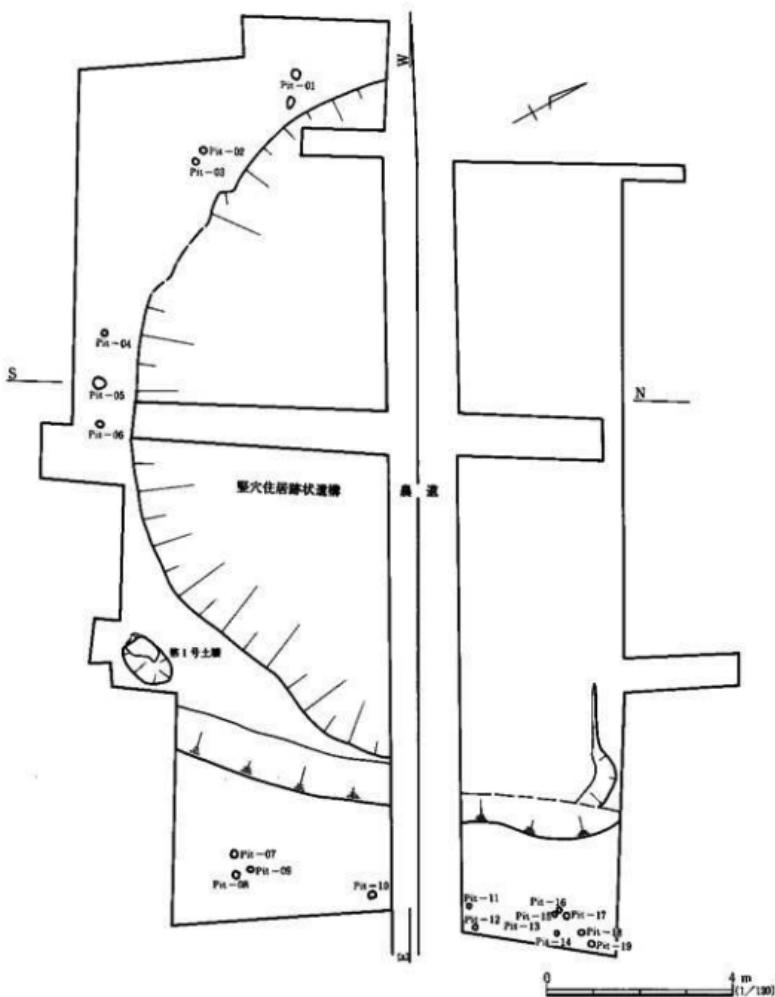


Fig. 57 第4地点遺構配置図

第4地点は、次のような基本層序である (Fig.58)。

第Ⅰ層：表土、厚さ8~35cm

第Ⅱ層：黒色土（遺物包含層Ⅰ）、厚さ10~40cm

第Ⅲ層：黒褐色土（遺物包含層Ⅱ）、厚さ10~25cm

第Ⅳ層：火山灰土（地山）、厚さ約80cm

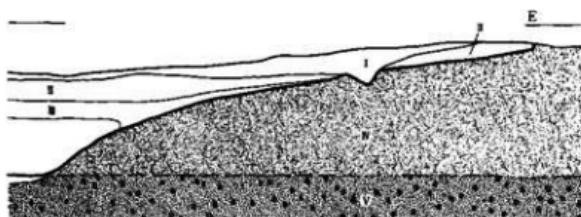
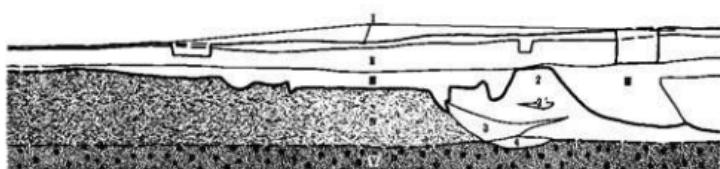
第Ⅴ層：砂礫を含む粘土

第Ⅰ層である表土層はきわめて薄いが、東端から約2.4m付近の旧地形が大きくカットされて段状となっており、その部分の表土層の厚さは約35cmである。第Ⅱ層は平面図と対応させて考えるならば、竪穴住居跡状遺構の埋土ということになる。しかし、前述したように概報の記述にしたがえば、瓦質土器を含んだ中世の溝状遺構の上に、弥生時代の竪穴住居跡が建てられたことになる。それは層位的に不可能なため、第Ⅱ層は遺物包含層として考えておく。第Ⅲ層もまた遺物包含層である。第Ⅲ層の直下は地山の鳥栖ロームである。

なお、「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」に記述される溝状遺構であるが、南から北西方向に走る以上、東西軸に切った壁面に断面が現れるはずである。しかし、概報に記述されるような「上幅3.5m、下幅1.3m内外で深さは約10cm」の規模に該当する落込みは、土層断面図には認められない。東西トレチの土層断面図 (Fig.58) には、鳥栖ローム層を遺構面として掘りこまれた断面が逆台形状を呈する落込みの表現があり、これが溝状遺構に該当する可能性が大きい。ただし、溝上面から底まで深さが約1.0mあり、概報の記述との間に大きな数値の開きがある。仮に、概報の数字に誤植があったと考えるとても、その幅にも概報と土層断面図との間には大きな開きがある。土層断面図に表現された逆台形状の落込みの上面幅は4.5mを超えており、西側の火山灰の再堆積層までも含めるなら6.0mとなる。概報の溝状遺構の記述には「褐色の粘土層や砂質粘土層が投げ込まれた状態で堆積していた」とあり、土層断面図の火山灰再堆積層を指すものかとも考えられる。しかし、仮に概報に記述された溝状遺構と断面図に表現された落込みが同一のものであるとしても、果してそれが人工の溝であったか自然地形の落込みであったか判断することは現在では不可能である。概報の記述にそのまま従えば、人為的な埋め立てが行われた人工的な溝ということになろう。しかし、先述したようにこの第4地点からわずかに北に下がった昭和58年度大学会館新館に伴う発掘調査では、北ないしは北西に聞く自然地形の落込みを検出している。その落込みの上部が、第4地点で検出した溝状遺構にあたる可能性は極めて高いものと考えられる。

第4地点

東西トレンチ
W (-1,038m)



南北トレンチ
N (-1,178m)

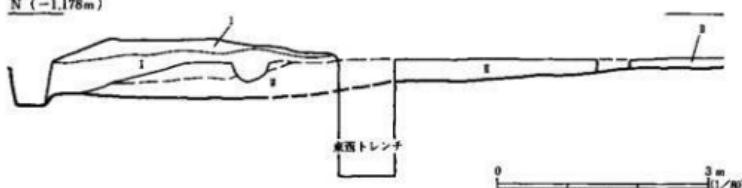


Fig. 58 第4地点土層断面図

第4地点出土遺物 (Fig.59-33~55, 60-56~70, 61-71~73, PL.27(2)~30)

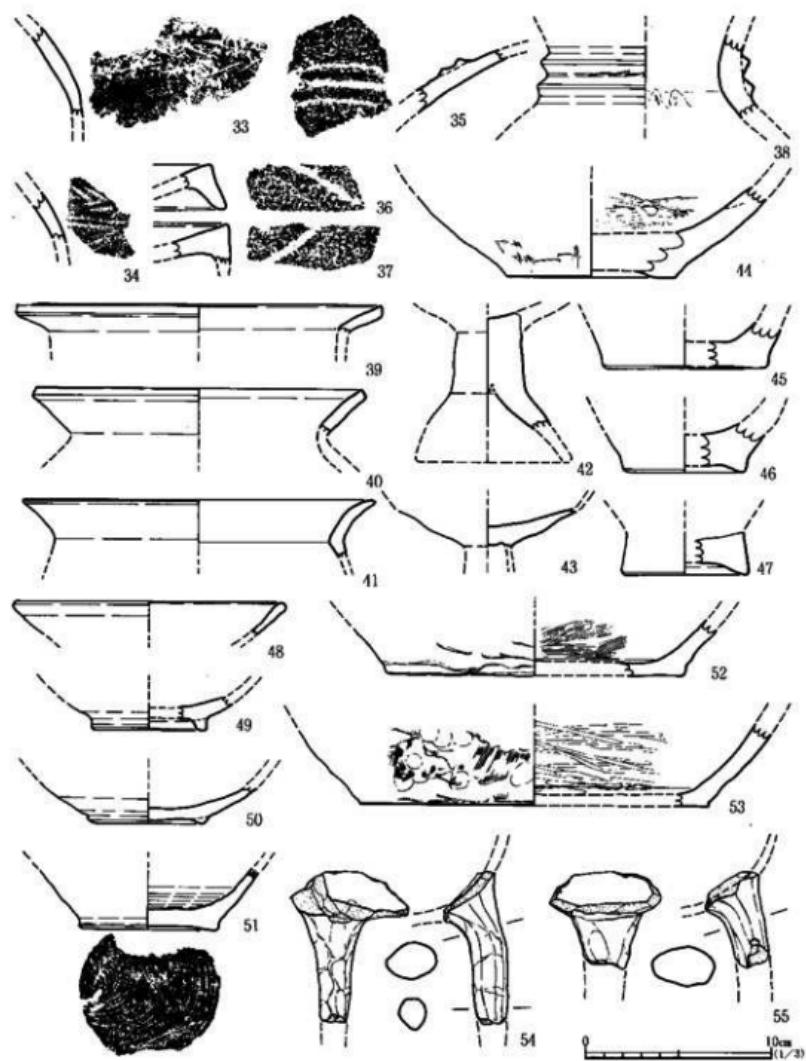
33・34は前期弥生土器の有文壺である。両者とも風化が激しく、器面の状態は不良である。33は鋸齒状圧痕のつかない貝殻により、羽状文が押圧施文される。文様帯の下端を区画する沈線は認められない。34は鋸齒状圧痕のつく貝殻により、羽状文と重弧文が押圧施文される。羽状文と重弧文の間には2条の押圧沈線が施される。

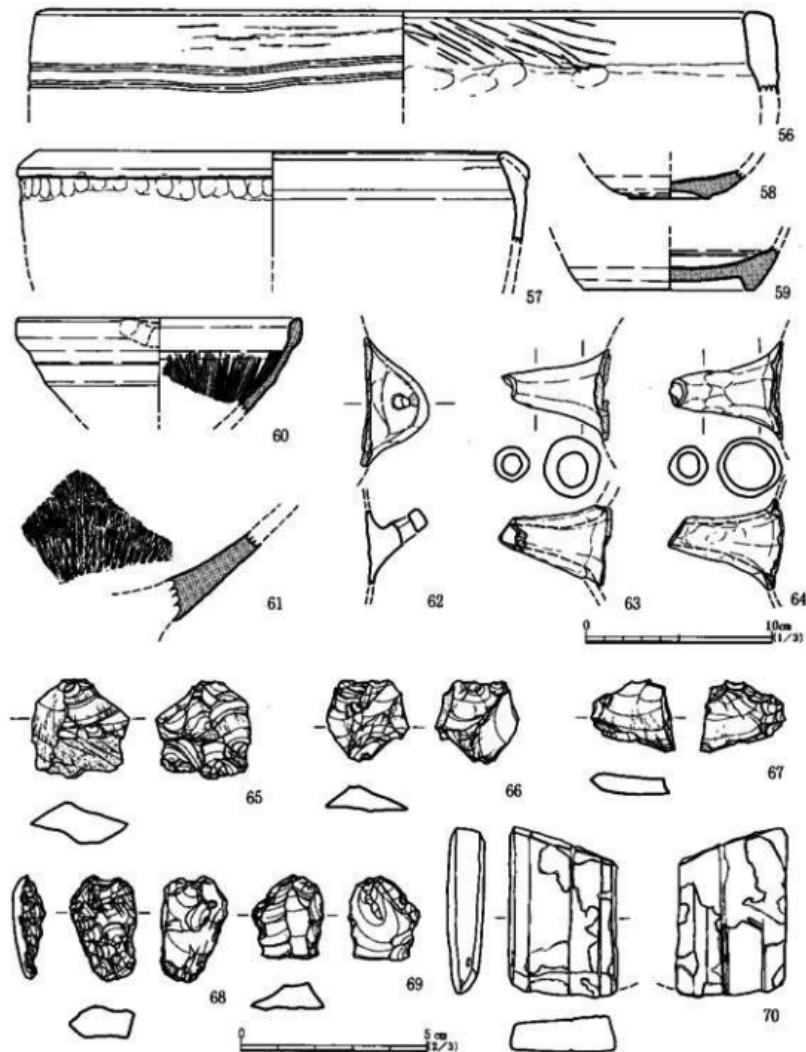
35~38は中期後半弥生土器の垂下口縁壺である。35は口縁部の破片と考えられ、内面に2条1組の隆帯が貼り付けられている。36・37は口縁垂下部の破片であるが、風化しており器面の状態は不良である。両者とも垂下部の外面上には、山形文を構成する1単位と考えられる1条の斜線が施されている。38は頸部の破片である。頸部の屈曲部には2条1組の隆帯が貼り付けられている。隆帯間にハケ工具によるおさえの痕跡が認められる。39は壺口縁部の破片である。口縁端部は面をもつ。弥生時代中期後半の土器と考えられる。40は壺口縁部の破片である。口縁部は面をもつ。弥生時代後期の土器と考えられる。41は壺口縁部の破片である。古墳時代中期の土器と考えられる。42は高坏の脚部である。中実で柱状の脚に、内弯気味に聞く裾をもつ。裾端部は欠失するため、その形状は明らかではない。脚部先端の側縁には坏部の剥離痕を残す。風化が激しく、調整を観察することが出来ない。43は高坏の坏部である。口縁部と脚部を欠失する。風化が激しく、調整を観察することが出来ない。古墳時代中期の土器と考えられる。

44~47は弥生土器の底部である。44は前期弥生土器の壺底部である。外面は風化のため調整が不明瞭なものとなっているが、底部側面にはハケ工具痕がつく。内面はハケ調整の後、ミガキ調整が施されている。45・46は前期弥生土器、47は中期弥生土器の壺底部である。風化が激しく、調整を観察することは出来ない。

48は土師器壺の口縁部である。口縁端部は丸く収められ肉厚である。49~51は土師器壺の底部である。49は断面長方形の高台が高く突出する。50は断面カマボコ形の高台である。51は高台をもたない。内面にはロクロ成形による凹凸を残す。底面には糸切り痕と、それを切って板状圧痕が残されている。52・53は中世後半~近世の壺あるいは鉢の底部である。52は土師質の粗陶器である。外面における底部側面の凹凸は激しい。内面には目の細かいハケ調整が施される。53は瓦質土器である。外面における底部側面の凹凸は激しく、部分的にタテハケ調整の痕跡を残す。内面はナデ調整の後にミガキ調整を施している。54・55は足鍋の脚部である。54は脚基部の周囲に煤の付着が認められる。脚部の内側は2次焼成により淡赤褐色に変色する。55は風化が激しい。

第4地点





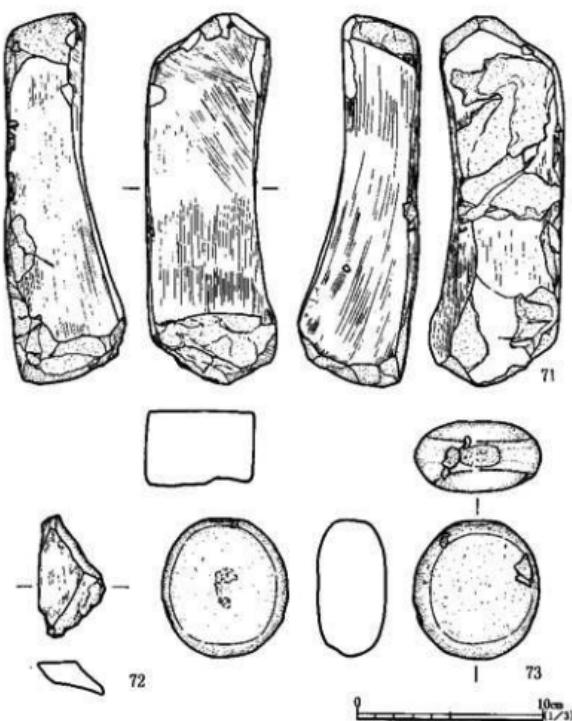


Fig. 61 第4地点出土遺物実測図(3)

56・57は土師質の粗陶器の壺である。56はかなり大型のもので、野窓などに使用されていたものと考えられる。57は口縁部成形のために貼りたした粘土紐の接合痕を外面に残す。58は陶器碗で高台部は露胎である。唐津製品である。59の陶器については器種が不明である。高台は削り出しによる。内面の全体に釉が施されている。60・61はすり鉢である。60は在地系のものと考えられ、内外面には鉄薙を施している。61は唐津製品である。62・64は土師質の粗陶器の土瓶である。62は把っ手、63・64は注口の破片である。注口の下部には煤が付着している。

65～69は剥片である。65～67は姫島産黒曜石製、68は黒曜石製、69はチャート製である。70は扁平片刃石斧である。上半部及び右半部を欠損する。泥岩製。71・72は砥石である。ともに流紋岩製。73は敲き石である。周縁部の両端を使用している。

6 第5地点

第5地点は第2地点の北側に隣接し、第1・2地点と共にD区では最も低い標高19.0～20.0mに位置する。調査に至る経緯は、「山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報」によれば、「耕耘された畑地一面が黒褐色を呈し、弥生式土器とみられる小破片が散布していたのでトレンチを設けて地下を探査した（後略）」とされる。埋蔵文化財資料館が保管する第5地点の記録類は平面図を欠き、土層断面図が2葉残されている。

第5地点調査区は第Ⅰ地区D区トレンチ設定図(Fig.50)によれば、東西方向や南北方向のトレンチの集合体であり、形状の説明は困難である。「山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報」の「時間の都合で全貌を明らかにすることはできず、残余は次の調査に譲ることにした。」との記載に見られるように、以後の調査の重点は第3・4・6・7地点などの標高21.0m以上の地盤に絞られる。発掘調査日誌によれば、第5地点の調査は4月13日から始まり4月17日には撮影が終了していたものと考えられる。土層断面図は、4月24・25日に作成されている。なお、調査終了日である25日の日誌には、「第5地点より、弥生時代の溝検出」と記述されている。土層断面図に基底面を記入するために、最終日に深掘りが行われたのであろう。

第5地点の土層(Fig.62)は、前述の調査に至る経緯が示すように、表土と遺物包含層が耕作によって搅乱されており、純粋な遺物包含層は残存していないかったようである。本地盤の表土層及び遺物包含層は薄いものであつたらしく、搅乱層の直下は火山灰層の地山となる。地山に関して土層断面図の東端から16.0m付近に「火山灰が白色になる」との注記があり、地形の傾斜に従い鳥柄ロームから八女粘土へと変化する状況が示されている。

第5地点の遺構は、削平が激しいためか、ほとんど検出されなかったようである。第5地点が平面図を欠くのは散逸したためではなく、図取りが行えるような遺構が検出されなかつたために、当初より平面図が作成されなかつた可能性もある。ただ、先述したように最終日には弥生時代の溝が最も低い調査区の西端で検出されており、概報には「北西方向に走る上幅約1m、下幅約50cm、深さ約40cmの溝状の掘り込みの中から、完形に近い弥生中期の壺形土器1個を検出した。」との記述がある。土層断面図には、この溝の断面が示されており、それによれば西脇はゆるい傾斜をもつて溝底となるが、東脇は途中に平坦面をもつ2段掘りを呈している。なお、概報に記述された溝からの出土土器であるが、それを示した注記をもつ土器がなく、現在ではどれを指しているのか不明である。ただし、当時の出土状況写真PL.23(3)が埋蔵文化財資料館に残されており、その写真から形態を判断する限り出土地点不明のFig.71-108の土器である可能性が高い。

第5地点

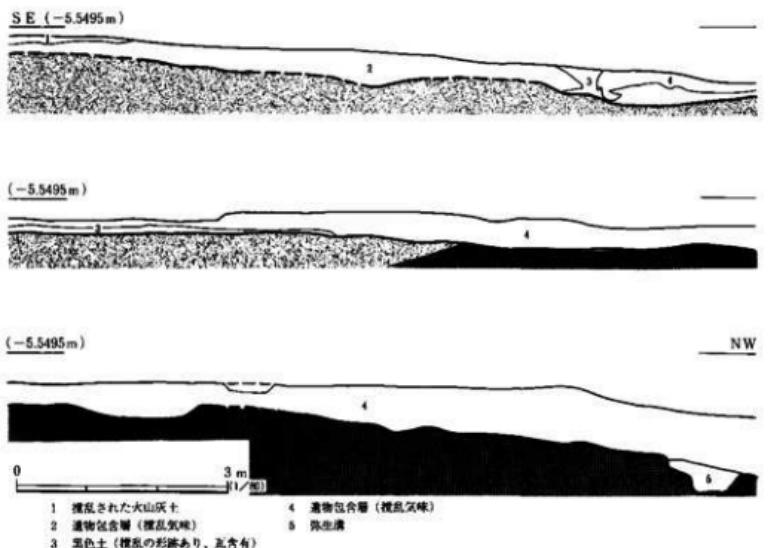


Fig. 62 第5地点1層断面図

第5地点出土遺物 (Fig. 63, PL. 31(1))

74は頭部にヘラによる連続刺突文を施す甕である。その特徴から弥生時代後期前半の土器と考えられる。75は土師器底の底部である。輪郭な高台が高く突出する。胎土は精製粘土を使用する。76は土師器底である。風化が激しく、摩滅する。胎土は精製粘土を使用する。77は足錠の脚部である。鍋胴体との接合部分で剥離しており、脚基部にその痕跡を残す。脚部の内側は二次焼成により赤褐色を呈する。

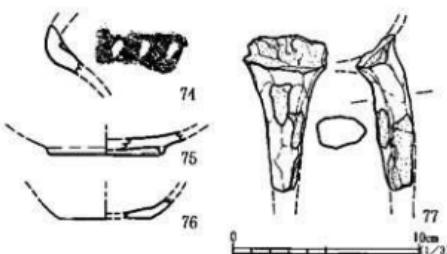


Fig. 63 第5地点出土遺物実測図

7 第6地点

第6地点は標高21.0～22.0mの第I地区D区では中央に位置し、同じ標高にある第3地点とは仮設農道を挟んで向かい合っている。調査に至る経緯は、「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」によれば、「耕耘された畑地に遺物が散布し、包含層が露出していたので発掘調査を行った。」とされる。埋蔵文化財資料館が保管する第6地点の図面類は、平面図1葉と東西トレント断面図1葉の計2葉である。なお、第6地点の上には現在、大会会館が建築されており、昭和58年度の新営の時には埋蔵文化財資料館によって再発掘されている。再発掘は吉田調査団による第6地点発掘資料の検証を可能にしている。このことは、第I地区D区の吉田調査団発掘資料が断片的であるだけに、重要なことである。

第6地点の調査区は平面図(Fig.64)によれば、不定形な形をしている。長辺約14.0m、短辺約7.6mで北東方向に長辺の軸を合わせた長方形が基本形であるが、南隅と北隅は二字状にくほんでいる。東南側の長辺には、南寄りに長辺約3.6m、短辺約3.2mの方形の突出部が取り付いている。また、西隅と東隅を結ぶ対角線に沿って、土層観察用の深掘りトレチングが設定されている。発掘調査日誌によれば第6地点の調査は4月12日から始まり、4月21日頃には全ての作業が終了していたものと考えられる。

第6地点からは住居跡と溝状遺構が検出されたと概報には記述されるが、昭和58年度の再発掘によってそのような遺構であることを否定する所見を得た。まず、「周溝とみられる1条の小溝と6個の柱穴からなる住居址1基と、(後略)」と記述される住居跡であるが、周溝とされる小溝は埋蔵文化財資料館の再発掘によって、近世の小溝である可能性が強まった。小溝は東から西方向に軸をもち、長さ約5.0m、幅約25cmで検出面から底面までの深さ約6cmを測る。再発掘は第6地点の調査区外で、小溝の軸と直交するものではないが、北東から西南方向に軸をもつ暗渠や近世区画溝を検出している。この暗渠や近世区画溝からは、小溝と同様な規模と軸をもった溝が派生するものがあり、小溝の性格や帰属時期を推測させた。小溝と近世区画溝や暗渠が軸を直交させるなどの規格性をもたないのは、地形に影響された結果と考えられる。小溝の周辺に点在する直径15cm前後の柱穴の性格は不明であるが、小溝と柱穴の配置には規則性がない。昭和58年度の再発掘においては、周辺で同様な柱穴を多数検出しており、特別に小溝と柱穴の間に関係は認められず、住居跡を構成するような検出状況ではなかった。

溝状遺構は概報に「(前略)幅約2m、深さ60cmの溝状遺構が埋存している。溝状遺構の底部には砂層があり、上になるにつれて次第にシルト質から粘土質に漸移する。」と記

第6地点

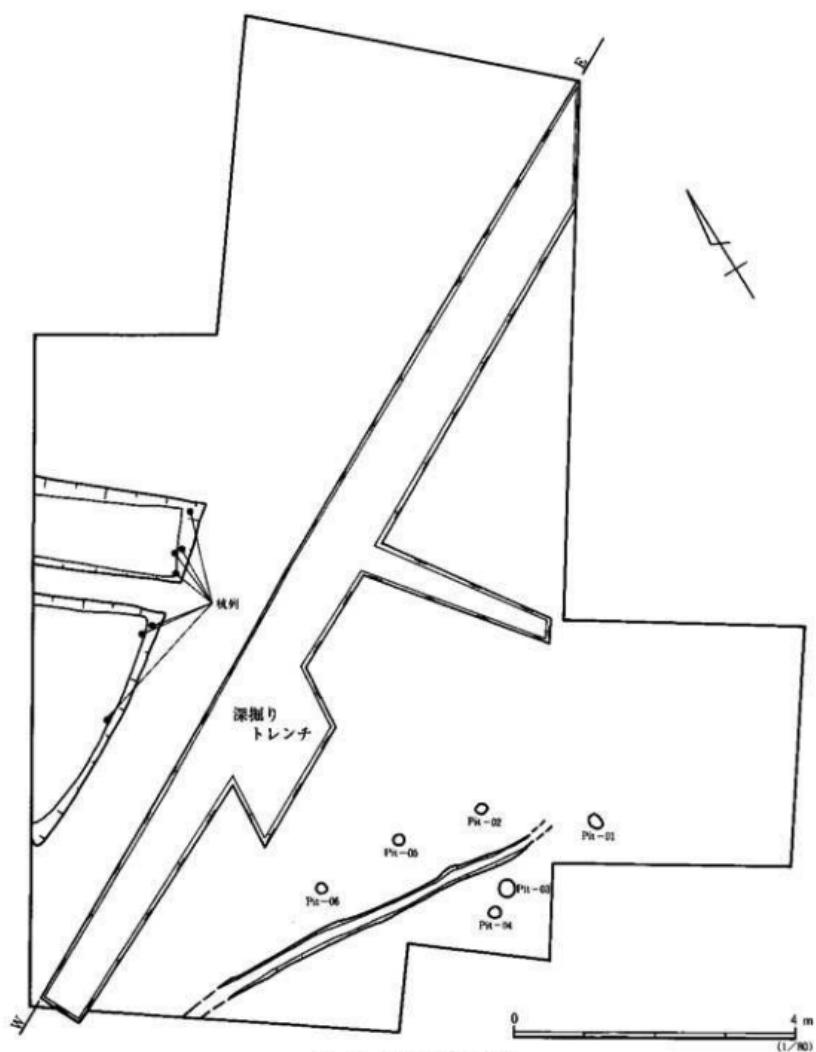


Fig. 64 第6地点遺構配図

吉田遺跡第1地区D区の調査

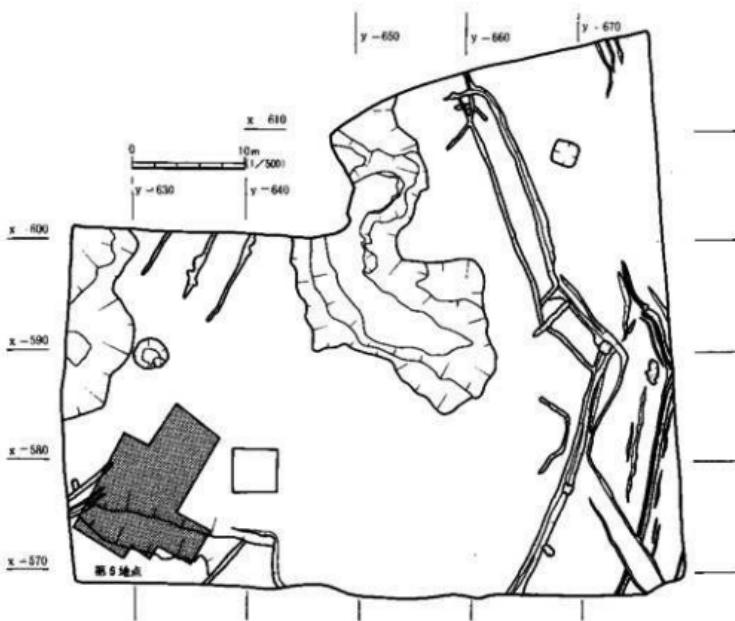


Fig. 65 第6地点と昭和58年度再発掘の位置関係図

述される。しかし、上層断面図（Fig.66）には西側の落込みが表現されるが、溝として西側に対応する東側の立ち上がりが表現されていない。地山が西側で落ち込んだまま、水平に続く状況が示されている。昭和58年度の再発掘は土層断面図と同じく、西側の肩を検出することはできたが、東側については立ち上がりが認められずそのまま落ち込んでいく状況を明らかにした。また、土層断面図では溝状遺構の埋土とされた第IV層「灰黒色粘土（泥炭層？）」とは、再発掘の報告である年報Ⅲにおいて「第33層黒色粘土（粘性大）」とされるものと同一と考えられる。年報Ⅲはさらに、「この第33層は南部を中心に水平に近くしかも広範囲に堆積する（後略）」と記述されている。第33層は粘性が強く、弥生土器や土師器などの遺物を多く含むことから、あたかも溝などの遺構埋土のようであるが、実際には低丘陵上からの流れ込みによって形成された遺物包含層であった。これにより「幅約2m、深さ60cm」とされた溝状遺構は、人工のものではなく自然の侵食作用が形成した谷部分の傾斜面であると推定される。

第6地点

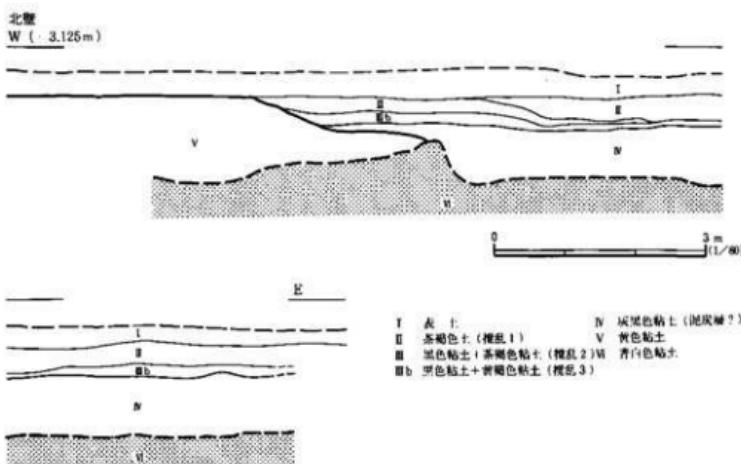


Fig. 66 第6地点1:層断面図

第6地点は、次のような基本層序である (Fig.66)。

第Ⅰ層：表土、厚さ約35cm

第Ⅱ層：茶褐色土、厚さ約30cm

第Ⅲ層：擾乱土、厚さ約20cm

第Ⅳ層：灰黒色粘土（泥炭層？）、厚さ約60cm

第Ⅴ層：黄色粘土（地山）

第Ⅵ層：青白色粘土（地山）

上層断面図は、土層確認のために遺構検出後に設定された深掘りトレンチの壁面図なので、表土層は表現されていない。調査区の南側は第V層：黄色粘土上の地山が高く、表土層直下で検出されている。第II・III層の堆積は、第V層が落込みそこに堆積した第IV層：灰黒色粘土の上面にだけ認められる。自然傾斜に伴い、丘陵部上面からの流れ込みが形成した堆積層であろう。第IV層：灰黒色粘土は昭和58年度の再発掘によって、本地点のみならず周囲の低地部に広く広がっていることが明らかくなっている。第V層：黄色粘土と第VI層：青白色粘土を侵食して谷地形が形成され、その低地部に遺物包含層である第IV層：灰黒色粘土が堆積したものと考えられる。

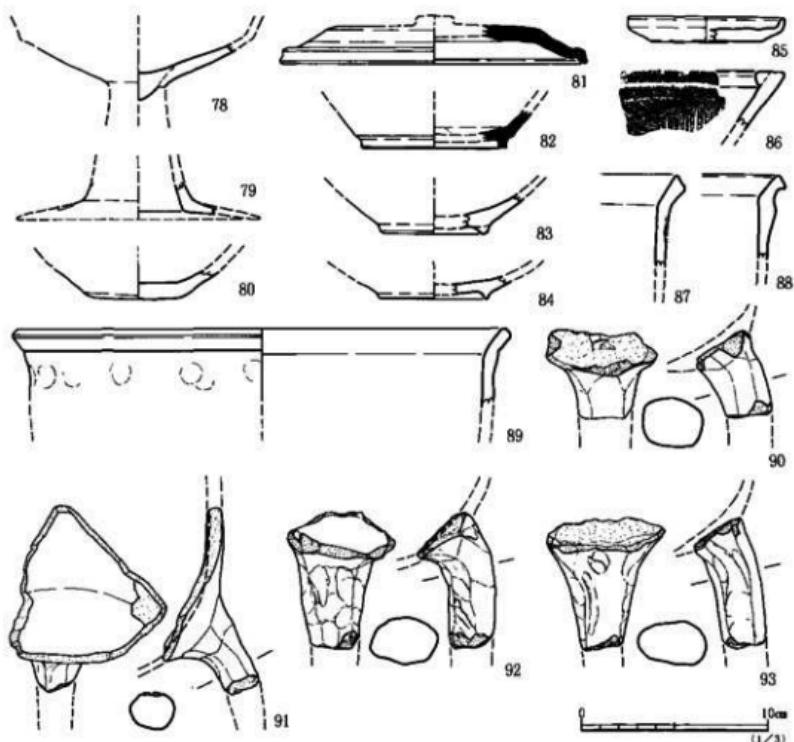


Fig. 67 第6地点出土遺物実測図(1)

第6地点出土遺物 (Fig. 67-78~93、68-94~100, PL. 31(2)~33)

78・79は古墳時代中期の土師器高坏である。78は坏部の破片であり、口縁部と脚部を欠失する。脚部と坏部の接合は円盤充填技法による。79は脚部の破片であり、基部と裾端部を欠失する。裾部は強く屈曲している。80は弥生土器の腰底部であろうか。81は須恵器の坏蓋である。ほぼ水平の天井部と2段階に屈曲した口縁部をもつ。円盤状のつまみを有していたと考えられる。8世紀末の製作年代であろう。82は須恵器坏の底部である。高台は底部と胴部の屈曲部に接して貼り付けられ、その端部は幅広い接地面をもつ。9世紀前半代の製作年代と考えられる。83・84は土師器碗である。いずれも風化が激しい。85は土師器の皿である。86は瓦質土器のすり鉢である。87~89は鍋である。いずれも胴部下半を欠失するため、足付きかは明らかにできない。90~93は足鍋の脚部である。

第6地点

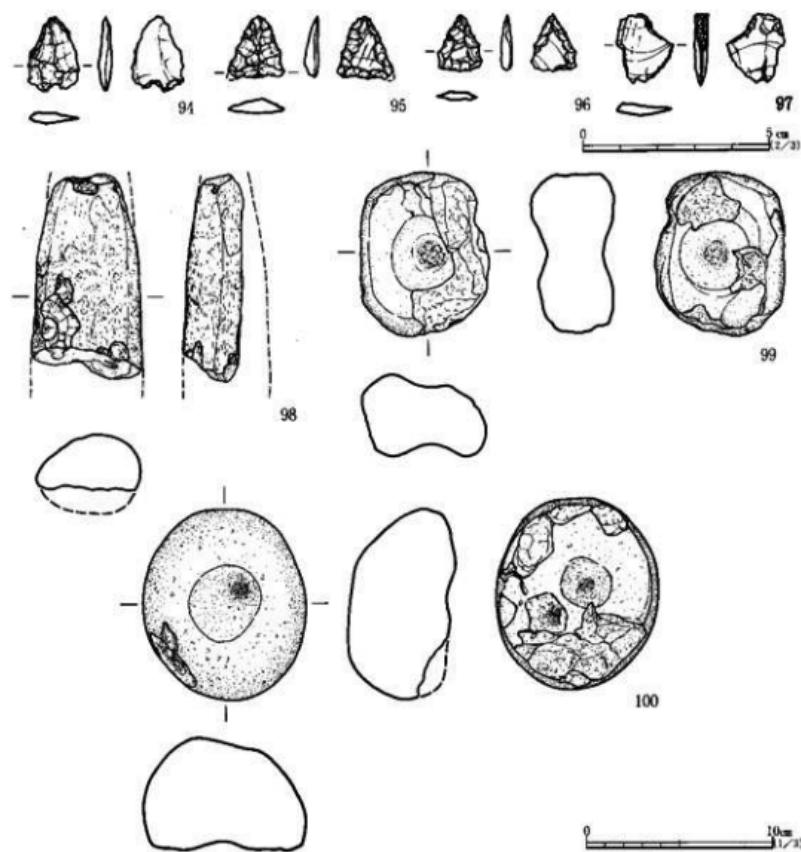


Fig. 68 第6地点出土遺物尖端圖(2)

94~96は石器である。94・95は安山岩、96は姫島産黒曜石を石材とする。97は黒曜石製の細部調整剥片である。石材は黒曜石である。ただし、94~97の石器が収納された箱には、D区の調査期間を示す「S 46. 4. 18」の記述があるが、「吉田I-E」とも記述されている。第I地区D区第6地点ではなく、第I地区E区第6号住居跡からの出土品である可能性も残されている。98は磨製石斧である。縦に断面してあり刃部側も欠損する。結晶片岩製。99はくぼみ石である。砂岩製。100は敲き石である。安山岩製。

8 第7地点

第7地点の調査は、D区では最も遅く17日に掘削が開始されている。第7地点の調査に至る経緯は、「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」では記述が行われていない。ただし、調査日誌の工程を見ると第7地点の調査開始に対応して、D区の低地部（第1・2・5地点）が17日の第5地点の調査をもって全工程を終了している。第7地点は、D区低地部における遺構の残存状態が調査団の予想に反してきわめて悪く予定よりも早く調査が終了したため、D区丘陵部の第4地点と第6地点で検出された「溝状遺構」の関連を検討するため追加調査されたものと推測される。

第7地点の調査区規模に関する記述は、「山口大学構内第I地区D区発掘調査概報」には認められない。しかし、第I地区D区トレント設定図（Fig.50）によれば、カタカナの「コ」の字状をしたトレントが設定されている。幅約1mの細長いトレントが上端と下端のトレントの長さは均等ではなく、上端が約13.0m、下端が約20.0mと下端が長い。上端のトレントと下端のトレントを東端でつなぐトレントの長さは約12.0mである。第6地点の調査は前述したように4月17日から始まり、4月21日頃には終了していたようである。

第7地点の調査は先にも記述したように、第4地点と第6地点で検出された「溝状遺構」の関連を把握する目的で設定されている。発掘調査概報によれば、「溝状遺構は幅約3m、深さ40cmを測り、第2地点（第4地点の誤りか）から来た溝が急角度に方向を西に転じ、第6地点の溝状遺構に連なっている」とされる。しかし、第6地点において記述のように、「溝状遺構」は自然の谷地形であり、第7地点についても同様と考えられる。第7地点は昭和58年度の大学会館調査区とは直接重なり合わないものの近接しており、その位置関係は昭和58年度調査で検出された「北ないしは北西に開ける谷あい」の上部にあたる。

第6地点は、次のような基本層序である（Fig.69）。

第I層：表土、厚さ約15cm

第II層：耕土、厚さ約10cm

第III層：客土、厚さ約10cm

第IV層：黒褐色土、厚さ25~40cm

第V層：黒色粘土、厚さ約30cm

第VI層：黒色シルト質粘土、厚さ1.0m以上

北トレントの東側にある第I・II・III層を切り込んだ段差は、近世の開墾によるものであろう。第IV・V層は谷地形の傾斜面に堆積した、流れ込みによる遺物包含層である。

第7地点

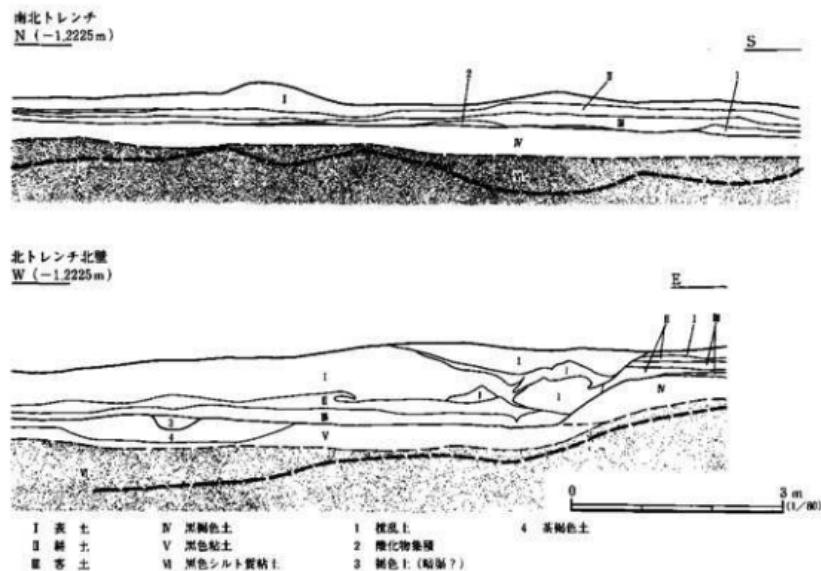


Fig. 69 第7地点上層断面図

第7地点出土遺物 (Fig. 70, PL. 34(1))

101は高台をもつ須恵器坏である。胴部はやや内弯氣味に立ち上がり、口縁部は外反する。高台は断面が逆台形を呈し、わずかに突出した外端面が接地する。底面にはヘラ切り痕を残す。

102は高台のない須恵器坏の底部である。103は土師器坏の底部である。104は須恵土器の鉢底部である。

105は足鍋の脚部である。

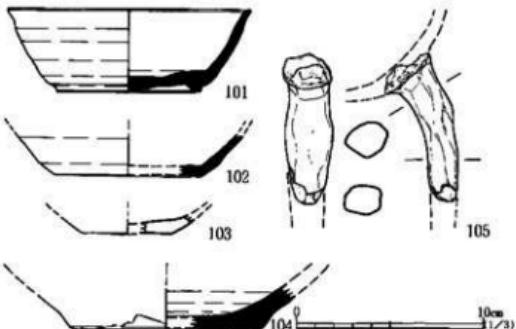


Fig. 70 第7地点出土遺物実測図

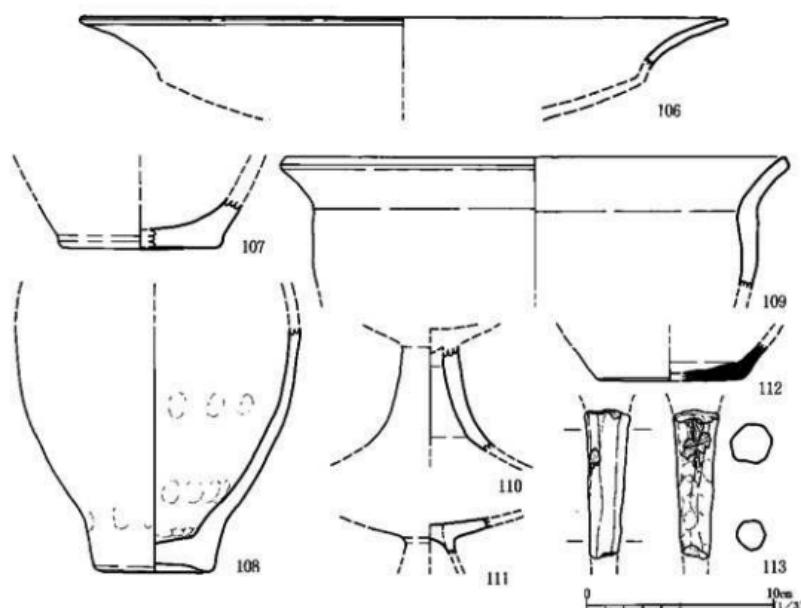


Fig. 71 出土地不明遺物実測図

9 出土地点不明遺物 (Fig.71, PL.34(2))

ここに掲載する遺物は、第I地区D区の遺物コンテナに収納されてはいるが、出土地点が不明なものである。また、中には注記されているものもあるが、器面の剥落などによって残念ながら判読出来ないものも含まれている。

106は高壺の口縁部である。口縁部は大きく外側に開く。風化が激しく、調整は観察することが出来ない。弥生時代後期の土器である。107は弥生土器の底部であるが、風化が激しいため調整を観察することができず、器種を判定することができない。108は前述したように、第5地点出土の可能性が高い土器である。埋蔵文化財資料館には出土状況の写真PL.23(3)が保存されている。109は壺の口縁部である。口縁部はゆるく外反し、その端部は面をもつ。風化が激しい。弥生時代中期の土器であろうか。110・111は古墳時代中期の土師器高壺である。110は脚部である。壺部と裾部を欠失する。裾部の屈曲はさほど明瞭ではない。111は壺部と脚基部の破片である。脚部内側から粘土が充填される。112は須恵器の高台をもたない壺である。底面にはヘラ切り痕を残す。風化が激しい。113は足鍋の脚部である。風化が激しい。

10 小結

吉田調査団の記録によれば、第Ⅰ地区D区からは大溝2条、住居跡3棟、土壙4基、柱穴多数などの遺構を検出したことになっている。出土遺物は前期弥生土器から近世陶磁器までを含んでいる。しかし、吉田遺跡調査団が過去に遺構としてきたものが、今回の再検討により遺構ではない可能性が強まっている。特に、環濠集落の周濠とみなした第4・6・7地点の溝状遺構が、自然地形の谷部分であったことは、昭和58年度に行われた大学会館新館に伴う発掘調査からも明らかである。第1地点の溝状遺構もまた、平成5年度本部裏給水管埋設に伴う発掘調査により、近世の大溝である可能性が強まっている。その他、住居跡と呼ばれる遺構についても、第3地点のものについては規模的に無理な点があり、第4地点の竪穴住居跡については下層遺構との出土遺物に時間的整合性を欠いており、他遺構を事実誤認した可能性が強い。

また、第Ⅰ地区D区の出土遺物には、大学会館の調査では多数出土した縄文陶器・青磁・白磁が含まれていない。昭和54年度本部2号館新館に伴う発掘調査や昭和59年度大学会館排水管布設に伴う発掘調査、平成5年度本部裏給水管埋設に伴う発掘調査でも一定量の青磁・白磁が出土している以上、これらに近接あるいは重なった第Ⅰ地区D区から出土しなかったとは考え難い。昭和46年当時の発掘水準を考えれば、陶磁器類は「ひかりもの」として採集されなかったことも想定しうる。ただし、吉田遺跡調査団の調査主任であった小野忠熙氏は、昭和41年から近世須佐窯の発掘調査を行っており、いち早く中・近世考古学に目を向けていた研究者の一人である。吉田遺跡調査団が陶磁器類を軽視していたとも考え難い。遺物保管場所のたび重なる移転によって、散逸してしまっているのであろうか。

第Ⅰ地区D区の調査は、20年以上も前の調査であり、現在の知見からすれば不備な点や風化してしまっている点も多い。しかし、発掘成果に再検討が必要となろうとも、吉田遺跡調査団のおこなった第Ⅰ地区D区の調査そのものを否定できるものではない。表土層が薄いために耕作によって露出した遺物にいち早く着目し、試掘調査を行うことによって遺物包含層及び遺構が埋存することを明らかにしたのが吉田遺跡調査団である。第Ⅰ地区D区の全面調査を行うのではなく、保存を前提とした最小限の試掘調査を行うことによって本地区の重要性を全般に訴えたのである。部分的な調査のため、遺構の解釈に一部誤認があったとしてもそれは致し方ないことである。むしろ、保存を目的として遺構に過大な評価を与えていた可能性も考慮される。現在、第Ⅰ地区D区の大部分は、昭和46年の当時と同じ飼料園であるが、1mに近い盛り土がなされており、埋蔵文化財に耕作による影響

吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査

が及ぶことはない。調査を最小限にとどめることによって、第Ⅰ地区ⅩD区を将来に引き継いだ吉田遺跡調査団の姿勢こそ高く評価されるべきである。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査」「吉田遺跡第Ⅰ地区B区の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅺ、1993年)
- 2) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅻ、1994年)
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新宮に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅹ、1990年)
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅲ、1985年)
- 6) 森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相—吉田遺跡をめぐる諸問題—」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅳ、1985年)
- 7) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』(山口大学、1971年)
- 8) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部裏給水管理設に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅸ、1995年)
- 9) 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」(『山口考古』第17号、1988年)

Tab. 5 出土遺物観察表

法量()は復元値

番号	器種	法量() (①外縁②底面)	色調 (③外面④内面)	胎土	注記	備考
P.D. 1						
1	弥生土器 複合口縁部		①淡褐色 ②淡灰褐色 ③褐色	2~3mmの砂粒を含む	包含層中No.6 S-46.4.21	風化が激しい
2	弥生土器 高环 脚部	② (13.6)	褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		風化が激しい 復元後底面あり
3	弥生土器 壺 底部	② (4.9)	乳白色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
4	弥生土器 壺 底部	② (2.5)	淡黃褐色	1cm大の角塊を含む		風化が激しい
5	弥生土器 壺 底部	② (3.1)	①木褐色 ②淡褐色	砂粒を多量に含む		風化が激しい
6	土解器 高环口縁部	② (15.8)	①海綿褐色 ②淡褐色	2~4mmの砂粒を含む	包含層中No.4 1971.4.21	風化が激しい
7	土解器 高环 脚部	② (14.8)	赤褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む、黒漆面を含む		風化が激しい 孔(5.5mm)
8	環形器 壺身		青灰色	粗製粘土		
9	瓦質土器 瓢 口縁部	② (27.8)	墨灰色	1~2mmの砂粒を含む	包含層中No.4 S-46.4.22	
10	瓦質土器 瓢 口縁部	② (33.4)	①淡褐色 ②淡褐色	陶砂粒を多量に含む	包含層中No.3 S-46.4.21	復元口縁底面あり
11	瓦質土器 瓢 口縁部	② (22.4)	①淡褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	包含層中No.3 S-46.4.21	風化が激しい
12	瓦質土器 足綱 脚部		灰褐色	砂粒を含む		風化が激しい
13	瓦質土器 足綱 脚部		灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	包含層中No.1 1971.4.12	風化が激しい
14	土器器 壺 底部	② (5.6)	白黄色	陶砂粒を多量に含む	包含層No.1 1971.4.22	風化が激しい
15	土器器 壺 底部	② (5.3)	淡褐色	陶砂粒を多量に含む		風化が激しい
16	土器器 壺 底部	② (6.7)	灰白色	細密		風化が激しい
17	土器器 壺 底部	② (5.4)	淡褐色	赤色斑紋を含む		風化が激しい
18	土器器 壺 底部	② (5.5)	淡褐色	赤色斑紋を含む		糸切り底
19	土器 壺注口 孔径1.0 孔深0.4		墨灰色	粗製粘土		風化が激しい
P.D. 2						
20	土器器 高环 口縁		淡褐色	赤色斑紋を含む		風化が激しい
21	土器器 壺 底部	② (4.5)	淡褐色	粗製粘土に2mm弱の 砂粒を含む		風化が激しい
22	粗陶器 壺 口縲部		明褐色	1mm前後の砂粒を含む		内面タキシドハケ
23	瓦質土器 足綱 脚部		青灰色	陶砂粒を含むが細密		脚部外側に多数の指 跡付在
24	粗陶器 壺 底部	② (17.0)	明褐色	1~2mmの砂粒を含む		外側の凹凸が激しい
P.D. 3						
27	弥生土器 高环 脚部		灰白色	1~2mmの砂粒を含む	No.2 1971.4.15	
28	瓦質土器 瓢 口縁部	② (29.7)	淡褐色	細密		復元口縁底面あり
29	瓦質土器 瓢 口縁部	② (31.2)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	No.1 S-46.4.15	内面ハケ、側面に指 跡痕、器底風化
30	瓦質土器 足綱 脚部		墨灰色	1~2mmの砂粒を含む		脚部外側に多数の指 跡痕
31	瓦質土器 足綱 脚部		淡褐色	砂粒を多量に含む		
P.D. 4						
33	弥生土器 有文壺		①明褐色 ②灰褐色	2~3mmの砂粒を含む		器表面は後づけつかない 且既にこる焼付苔状
34	弥生土器 有文壺		淡黄白色	2mm前後の砂粒を含む	包含層中	器表面付着する苔に よる焼付羽状葉、水滴痕
35	弥生土器 直下口縁部		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		内面に隆起
36	弥生土器 直下口縁部		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
37	弥生土器 直下口縁部		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
38	弥生土器 直下口縁部		淡褐色	粗製粘土に微砂粒を 含む		
39	弥生土器 壺 口縲部	② (19.5)	褐色	1~2mmの砂粒を含む		風化が激しい

吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査

番号	器種	法量(cm) (①外側②内側③高さ)	色調 (①外面②内面)	胎土	注記	法量()は復元値
						備考
40	弥生土器 壺 口縁部	①(17.5)	淡赤褐色	赤色砂粒を含む		風化が激しい
41	弥生土器 壺 口縁部	①(18.8)	淡赤褐色	細密粘土に2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
42	弥生土器 高环 瓶部		乳白色 灰白色	1mm前後の砂粒を含む		風化が激しい
43	七脚器 高环 瓶部		淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む	包み層中 1971.4.20	風化が激しい
44	弥生土器 壺 底部	②(9.0)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	包み層中 1971.4.21	風化するが内面にミガキを残す
45	弥生土器 壺 底部	②(8.4)	赤褐色	砂粒を多量に含む		風化が激しい
46	弥生土器 壺 底部	②(6.3)	①淡赤色 ②灰白色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
47	弥生土器 壺 底部	②(6.7)	淡青色	3~4mm砂粒を含む		風化が激しい
48	土師器 壺 口縁部	①(14.3)	淡灰褐色	細密粘土		風化が激しい
49	土師器 壺 底部	②(6.0)	暗灰褐色	1mm前後の砂粒を含む		風化が激しい
50	土師器 壺 底部	②(6.9)	深灰褐色	細密粘土に砂粒を含む		風化が激しい
51	土師器 壺 底部	②(6.9)	深灰褐色	赤色砂粒を含む		余切り迹、板状圧痕、ロクロ痕
52	瓦質土器 壺or钵底部	②(16.0)	深灰褐色	3~5mmの砂粒を含む	埋乱層中 S46.4.20	
53	瓦質土器 壺or钵底部	②(18.8)	灰白色	細砂粒を含む	埋乱層中 S46.4.20	
54	瓦質土器 足端 脚部		淡赤褐色	砂粒を多量に含む		
55	瓦質土器 足端 脚部		赤褐色	砂粒を多量に含む		
56	粗陶器 壺 口縁部	①(37.4)	淡褐色	粗砂粒を多量に含む	埋乱層中 S46.4.20	
57	粗陶器 壺 口縁部	①(25.2)	淡黄白色	1mm前後の砂粒を多量に含む		
58	陶器 壺 底部	②(4.3)	灰色 淡褐色 褐色 灰褐色	粗砂粒を含む	埋乱層中 S46.4.20	
59	陶器 鉢 底部	②(9.2)	灰色 暗赤褐色 褐色 黄褐色	細密	埋乱層中 S46.4.20	
60	陶器 すり鉢	①(15.3)	暗赤褐色	細密	埋乱層中 S46.4.20	
61	陶器 すり鉢		暗赤褐色	細密	埋乱層中 S46.4.20	
62	粗陶器 上瓶 把っ手		明淡褐色	粗密粘土	埋乱層中 S46.4.20	
63	粗陶器 土瓶 注口		明淡褐色	粗密粘土	埋乱層中 S46.4.20	
64	粗陶器 土瓶 注口		淡褐色	細密	埋乱層中 S46.4.20	
P.D.5						
74	弥生土器 壺		淡灰褐色	2~3mmの砂粒を含む		外面に剥離文風化が激しい
75	土師器 壺 底部	②(6.0)	乳白色	細密粘土に1~2mm前後の砂粒を含む		風化が激しい
76	土師器 壺 底部	②(5.0)	淡赤褐色	細密粘土		風化が激しい
77	瓦質土器 足端 脚部		①灰褐色 ②赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		
P.D.6						
78	土師器 高环 瓶部		淡赤褐色	1~2mmの砂粒と赤色砂粒を含む		風化が激しい
79	土師器 高环 脚部		淡赤褐色	細密粘土		風化が激しい
80	弥生土器 壺 底部		黒灰色	石英角礫を含む		風化が激しい
81	須恵器 环基	①(16.3)	淡青灰褐色	細砂粒を含む	トレンチⅡ包み層中 S46.4.13	
82	須恵器 环 底部	②(7.7)	青褐色	白色粉を含む		
83	土師器 壺 底部	②(5.2)	淡灰灰褐色	細密粘土に微砂粒を含む		風化が激しい
84	土師器 壺 底部	②(5.6)	淡灰褐色	細密粘土		風化が激しい
85	土師器 壺	②(5.9)	淡水褐色	細密粘土		風化が激しい
86	瓦質土器 すり鉢口縁部		灰褐色	白色粉を含む		

出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) (①口縁部底部②器高)	色調 ①外面②内面	胎土	注記	法量()は復元値
						備考
87	瓦質土器 瓶 ①縁部		黒色	1~2mmの砂粒を多量に含む		外側に風化が付着する
88	瓦質土器 瓶 ①縁部 ②(26.2)		①黑色 ②淡青灰色	精製粘土に砂粒を含む		外側に風化が付着する
89	瓦質土器 瓶 ①縁部		①墨付青 ②淡青灰色	1~2mmの砂粒を含む	No.458-中 S46.4.19	
90	瓦質土器 足綴 鋸部		赤褐色	鐵素		風化が激しい
91	瓦質土器 足綴 鋸部		黒灰色	砂性を含む		外側に風化が付着する
92	瓦質土器 足綴 鋸部		淡褐色	鐵素		風化が激しい
93	瓦質土器 足綴 鋸部		赤褐色	鐵砂粒を含む		風化が激しい
P.D. 7						
101	張器 壺	①(13.0) ②(7.6)	灰青色	石英粒を含む	南北トレンチⅢ含む 上部 S46.4.19	約1/2残存 底部ヘラ切り
102	張器 壺 底部	②(7.7)	青灰色	鐵砂粒を含む		
103	土器 壺	②(4.9)	淡赤褐色	火粒の砂粒を含む		風化が激しい
104	張質土器 体 底部	②(9.8)	灰青色	白色粒を含む		
105	瓦質土器 足綴 鋸部		淡赤色	赤色鐵砂粒を含む	南北トレンチ	風化が激しい
出土地不明						
106	弦生土器 高窓口縁部	①(34.3)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		風化が激しい
107	弦生土器 底部	②(8.0)	淡褐色	大粒の砂粒を含む		風化が激しい
108	弦生土器 窓 ②(5.8)		淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
109	弦生土器 窓 口縁部	①(26.8)	淡黄灰色	3~5mmの砂粒を含む	注記不明	風化が激しい
110	土器 壺		黒灰色	砂粒を含む	注記不明	風化が激しい
111	土器 壺 窓		淡赤褐色	精製粘土に1mm前後 の砂粒を含む		風化が激しい
112	張器 壺 底部	②(6.4)	灰白色	わずかに鐵砂粒を含む		風化が激しい
113	瓦質土器 足綴 鋸部		淡褐色	鐵砂粒を含む		

吉田遺跡第1地区D区の調査

法量()は現存値

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	注記
P.D.2							
25	石鍋	11径(18.0) 底径(10.0)		2.7	763.7	滑石	S46.4.12
26	鏡石	10.4	8.7	5.3	517.16	石英斑岩	
P.D.3							
32	鏡石	(7.0)	(5.2)	(2.9)	97.85	雲灰岩	
P.D.4							
65	剥片	2.6	2.7	1.1	6.57	板島基盤岩	保存層中 S46.4.18
66	剥片	2.2	2.3	0.7	2.69	板島基盤岩	保存層中 S46.4.18
67	剥片	2.0	2.3	0.5	2.95	板島基盤岩	保存層中 S46.4.21
68	剥片	2.8	1.8	0.8	4.57	黑曜石	
69	剥片	2.3	1.9	0.7	3.91	チャート	
70	扁平片刃石斧	4.5	(3.0)	1.0	22.21	泥岩	4-28 S46.4.19
71	鏡石	20.0	6.9	6.1	1165.2	泥紋岩	第2トレンド 複乱層T-③
72	鏡石	(6.5)	(3.7)	(1.4)	32.06	泥紋岩	S46.4.19
73	鐵錫石	7.4	6.8	3.7	285.05	安山岩	S46.4.19
P.D.6							
94	石錫	2.1	1.4	0.4	0.91	安山岩	
95	石錫	1.7	1.5	0.4	0.68	安山岩	
96	石錫	1.6	1.2	0.2	0.42	板島基盤岩	
97	二次加工のある剥片	1.9	1.5	0.4	0.96	黑曜石	
98	石斧	(11.0)	(5.7)	(3.0)	317.92	粘土片岩	黑色土 S46.4.18
99	くばみ石	8.8	7.0	4.5	400.33	砂岩	トレンドA 保存層中 S46.4.18
100	くばみ石	10.3	8.8	6.1	733.6	安山岩	S46.4.13

付篇 II

山口県弥生土器集成 I —山口市小路遺跡出土の前期弥生土器—

豆 谷 和 之

はじめに

私はかつて『山口大学構内遺跡調査研究年報』¹⁾の付録において、「吉田遺跡第I地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について」と題する小論を発表した。吉田遺跡第I地区A区出土弥生土器の括性を論じるとともに、編年の位置づけを試みた。その際、山口市内及び防府市内における弥生時代中期後半土器の編年も併せて行い、垂下口縁壺の変遷によって3細分する案を提示した。この垂下口縁壺による弥生時代中期後半土器の3細分案が、私の勇足による事実誤認であったことを認め謝罪する。垂下口縁壺の出現期から盛行期への変遷に対する変更はない。しかし、衰退期とした垂下口縁壺がもつ、II縁部拡張区における斜格子文や頸部突帯上面の連続押圧といった属性は、垂下口縁壺の出現期あるいはそれ以前に位置づけるものであると現在では認識を改めている。

新任の地での功を急ぐ余り、最も基本的な作業を怠った結果と、私自身は受け止めていた。私は気づかぬうちに、併行関係をあたかも追うかのように裝って、自分が馴染んだ近畿の土器編年に山口の土器をあてはめようとする安易な方向へと歩んでいた。地域での型式組列を組み立てぬまま、編年が整備された他地域の土器と類似した単体の土器をもって、時間的な位置づけを試みようとしていた。行うべきは山口での完全な土器型式組列を組み上げることだったのである。そして、そのためには山口県内の弥生土器の集成図を作成するという、最も基本的な作業が必要なのである。

これから行う土器集成は、報告書の切り貼りではない。まず、「遺構一括」と呼ばれる資料を、その全土器片について徹底的な接合を行う。この後、たとえ小片であっても可能であれば図化する。これらの作業は最終のトレース及び図版の割付まで、私個人が一貫して行う。このため、時間的制約から一度に報告できるのは1~2遺構が限度であろうし、山口大学埋蔵文化財資料館の手持ちの資料が中心とならざるを得ないであろう。今後は、幸いにも山口市教育委員会の許可を得て、山口市小路遺跡の第12号溝状遺構資料の報告を行うことができた。以後は、山口大学埋蔵文化財資料館が既に発表した資料の再実測を行い、継続して報告を行っていく予定である。

1 小路遺跡の概要

小路遺跡は山口盆地の南西部、瀬野川の左岸域に所在する。洪積台地と沖積低地の境に遺跡は立地しており、その標高は16~17mである。縄文時代から中世までの遺構が検出されているが、弥生時代前期の遺構は堅穴住居跡1棟、土壙数基、溝状遺構数条である。これらの遺構から出土する前期弥生土器は古手の様相を示し、とりわけ第12号溝状遺構が最も多くの前期弥生土器を出土している。この溝状遺構は河道の氾濫によるもので、人工的なものではないが、土器は比較的まとまりを持った資料と考えられる。詳細は、「山口市埋蔵文化財調査報告第27集 小路遺跡」を参照していただきたい。

2 第12号溝状遺構出土土器

大型壺形土器 (Fig.72-74-1・2・3・10・11) 1は頸部と底部を欠くが、全形を推定することが可能である。胴部中位よりやや上で張りをもち、頸部は内側に傾斜しながら口縁部へと立ち上がる。口縁部の破片は小さく径や開き具合などは、頸部の傾きから推測している。このため、径あるいは開きが大きくなる可能性がある。口縁端部は肉厚で、ヨコナデによって面取りを行っている。外面の口頸間と頸胴間に段をもつ。口頸間の段は、粘土帯の接合部分を整形して作り出している。整形は棒状工具のようなものによって行われており、口縁部段と頸部の境が深くえぐれている。頸胴間の段は粘土帯の接合部分とは関係なく作り出されているようである。いかにして作り出したかその過程は知り得ないが、最終調整であるミガキの前段階に段をつまむようにしてヨコナデを施している。このため、頸部側がくぼむことはもちろん、胴部側も微妙にくぼんでいる。内面は風化が著しいが、胴部上半にハケ調整を残している。外面全体に丹を塗っていたものと考えられる。口縁部および肩部の破片に関しては明瞭に丹を観察できるが、胴部破片の保存状態は悪くかすかに痕跡を残す程度である。2は段より下を欠いた、口縁部のみの破片である。口はあまり開かないが、端部から下1.5cmまでに施されたヨコナデによって、口縁端部はかすかに外側へと屈曲する。口縁端部はヨコナデによって面取りを行っている。段の成形は粘土帯の接合部分を利用している。段の上下にはヨコナデによる条線を観察することができ、明瞭に段を作り出している。内外面の最終調整は、丁寧なミガキである。口縁内面と口縁端部に丹塗りを観察することができる。3は段をもつ口縁部の破片であるが、段より約1.5cm上ではほぼ直角に屈曲し端部に至る。口縁端部は肉厚で、ヨコナデによって幅の広い面をもつ。段端部はミガキによる際取りが行われ、面をもっている。最終調整はミガキである。横位を基本とするが、外面における段から屈曲部の範囲は縱位のミガキである。

第12号溝状遺構出土土器

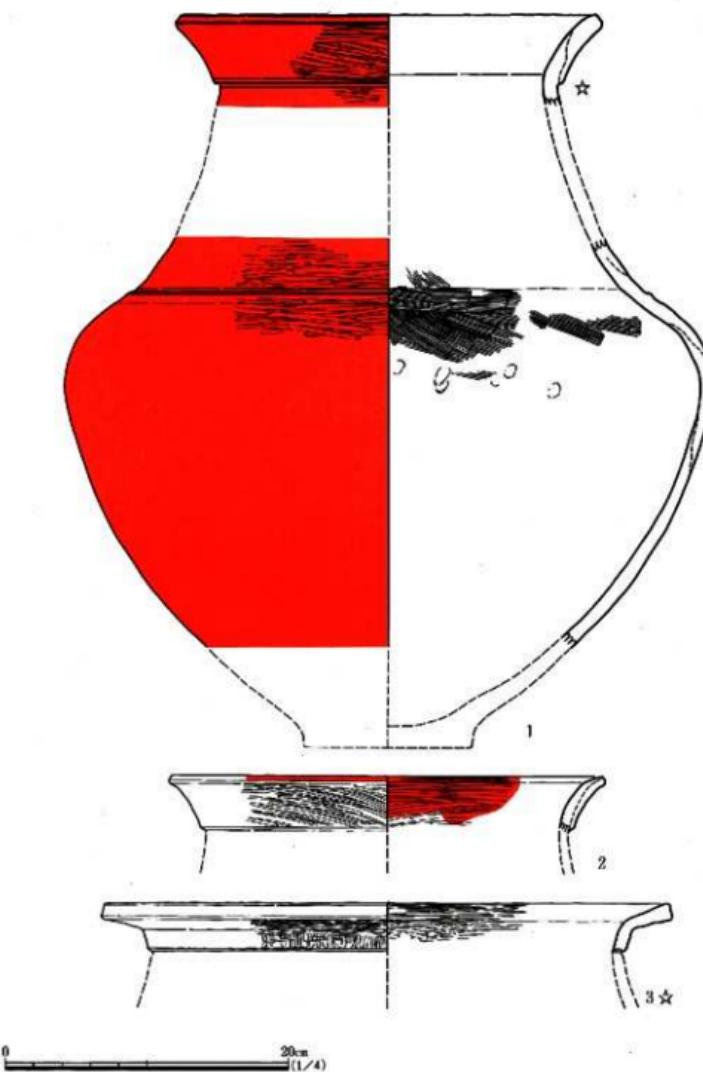


Fig. 72 小路遺跡第12号溝状遺構出土大底壺形土器実測図 (合印は小片のため、種及び様き)
（の復元に検討の余地があるもの）

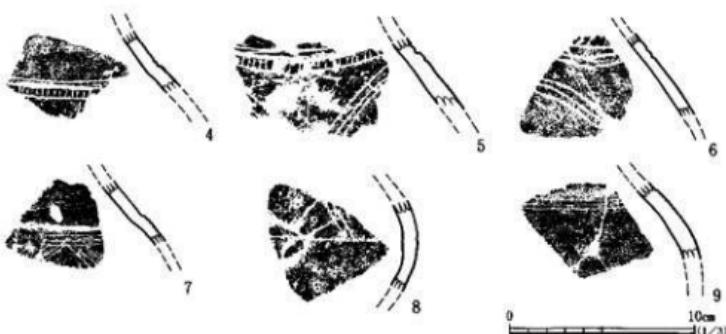


Fig. 73 小路遺跡第12号溝状遺構出土有文壺形土器拓影

10は段をもつ口縁部の破片である。復元径はおよそである。口縁部は比較的、外反が強い。口縁端部はヨコナデが強いために凹線状にくぼむ。11は段をもつ胴部の破片である。胴部はさほど張りをもたないようである。10の口縁部と同一個体の可能性がある。

有文壺形土器 (Fig.73・74-4～9・12・13) 12は口頸間に段にキザミを施し、段直下に2条の直線文を施す有文大型壺形土器の口縁部破片である。12と同一個体で、その胴部破片と推定されるのが4・5である。連続する重弧文の境に、縦割り線が認められる。13は図上においてほぼ全形が復元し得た有文大型壺形土器である。口頸間に段ではなく、頸胴間に段をもつ。口頸間には三条の沈線を施す。口頸間の三条の沈線と頸胴間の段の間に、斜行する三条の沈線がある。胴部文様帶には三条一単位の重弧文が、八単位で描かれている。6は重弧文、7・8は複線山形文、9は頸胴間の段下に三条の直線文が、施されている。

中型壺形土器 (Fig.74-14～18) 14は段をもつ口縁部の破片である。粘土帯の接合部分を整形して段を作り出している。際取られてくぼんだ段と頸部の境に、丹が付着している。15は段をもつ口頸部の破片である。口縁端部を欠く。口頸間の段は、ハケ工具によって頸部側を低め、その部分をミガキで際取ることによって作りだしている。16は頸部の破片である。口頸間と頸胴間に段があったかは不明であるが、胴部に接していたと考えられる部位にはハケ工具の静止痕があり、頸胴間には段が作り出されていた可能性がある。17は段をもつ口頸部の破片である。口縁部は外方へと開き気味であるが、口縁端部は欠いている。頸部は胴部にむかって裾広がりとなる。18は段をもつ胴部の破片である。段は頸部側に沈線を施し、その部分にヨコナデを加えることによって明瞭なものとしている。

第12号溝状埴輪出土上器

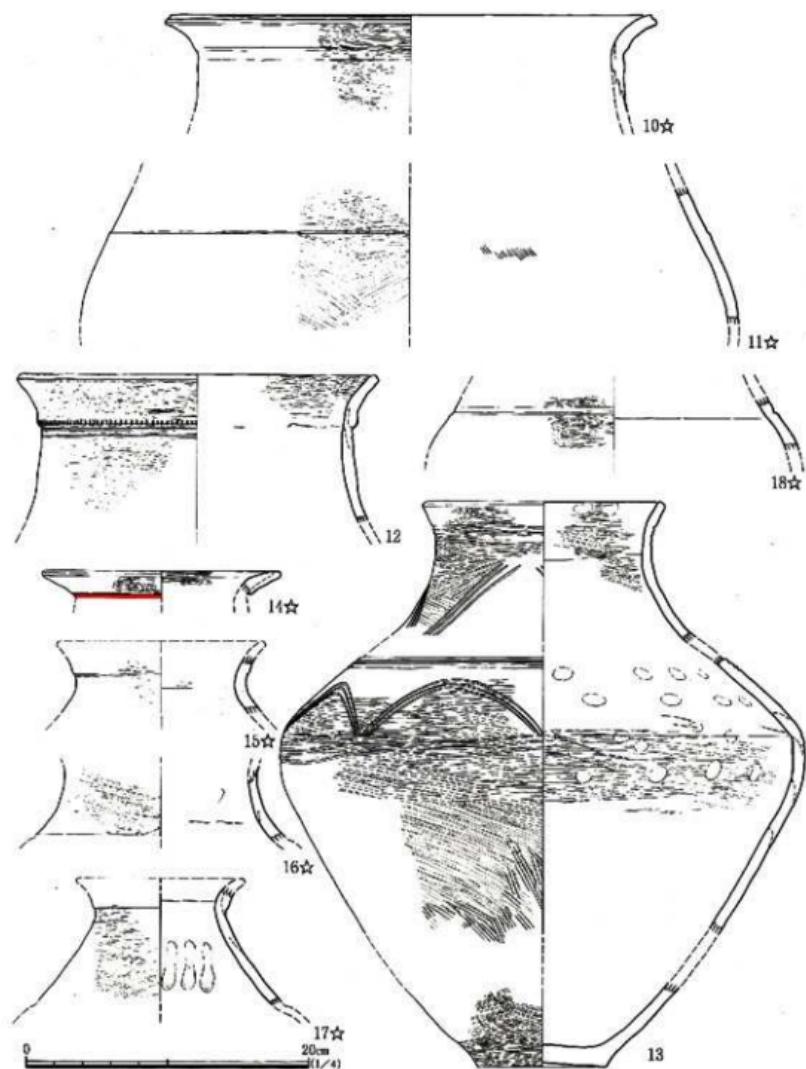


Fig. 74 小路塗跡第12号溝状埴輪出土大型・中型壺形上器実測図 (★印は小片のため、並び焼きの復元に後付の余地があるもの)

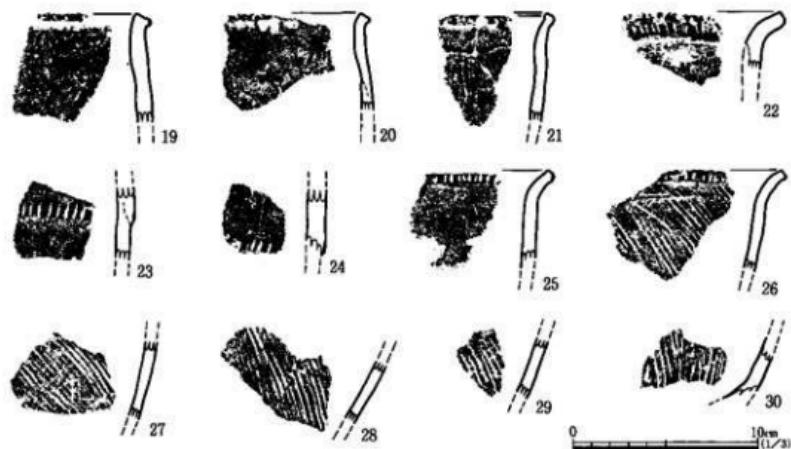


Fig. 75 小路遺跡第12号溝状遺構出土変形土器拓影

A型口縁変形土器 (Fig. 75・76-19-24・31-36) 直立あるいはやや外反する口縁部の下端を、ハケやヨコナデによって凸帯状に強調する。凸帯状部分にはキザミが施される。胴部の段にキザミを施すものは、この口縁形態と相関性をもつものと考えられる。器形には口縁部がすばまり胴部の段付近に最大径をもつもの31-33と、口縁部が外反し口縁部に最大径をもつ34-36の二者がある。口縁部が外反し口縁部に最大径をもつものは、**B型口縁変形土器**に近似する。また、外面の調整においてもハケを残すもの31-33・35と、ハケをなで消すもの34・36がある。内面調整はハケを残す35を除いて、丁寧なナダが施されている。35は左上がりのハケをもつ胴部内面とは異なった横方向のハケが口縁部内面に施されており、口縁部を外反させるために施されたものと考えられる。口縁端部・胴部段に施されたキザミはともに鋭い。

B型口縁変形土器 (Fig. 75・76-25-30・37-41) いわゆる如意形口縁の変形土器である。器形は最大径をもつ口縁部から底部にむかってゆるやかにすばまつた倒錐形を呈する。如意形に外反する口縁の下端部には、強いヨコナデを施し突出させキザミをいれている。この手法はA型口縁変形土器の口縁端部成形手法と共通するものである。外反の度合が強いもの26-37-39と、弱いもの40・41がある。41についてはB型口縁変形土器に含めるよりも、A型口縁変形土器との関連を考えるべきかも知れない。胴部に段をもつ37がある。26は外面に条痕状の調整をもつ。27-30は26と同一個体と考えられるものである。

第12号溝状遺構出土土器

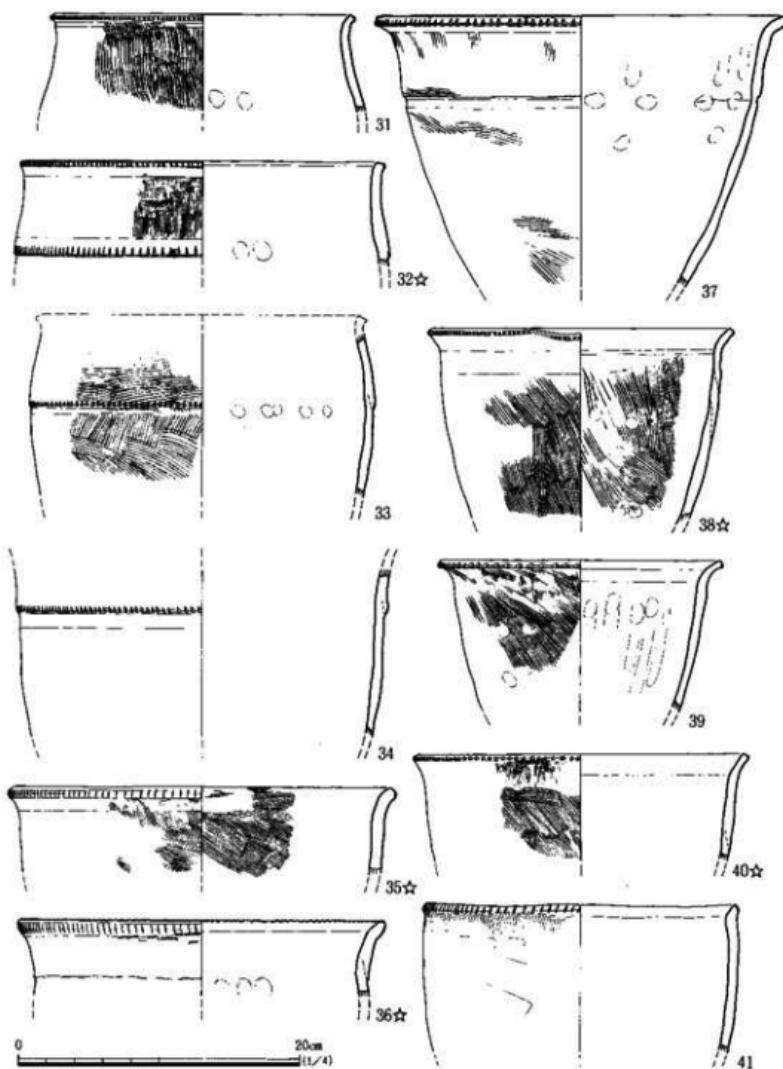


Fig. 76 小路遺跡第12号溝状遺構出土変形土器実測図

(★印は小片のため、径及び高さの復元に検討の余地があるもの)

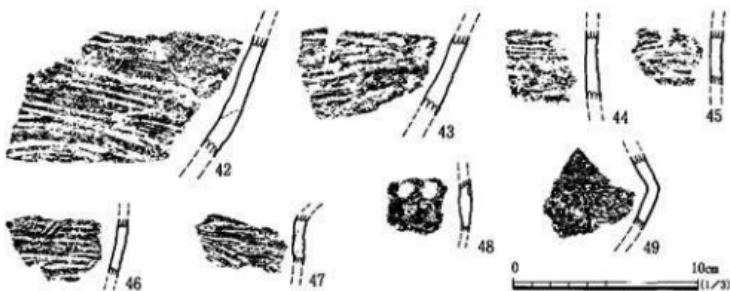


Fig. 77 小路遺跡第12号溝状遺構出土条痕文土器・その他土器拓影

条痕文土器 (Fig. 77-42~47) 小路遺跡12号溝状遺構出土土器には、器面に条痕を施す個体がある。器壁の厚いものと、薄いもの二者がある。42・43は同一個体である。器壁の厚いものは外面に二枚貝が原体と考えられる水平あるいはやや左上がりの粗い条痕が施される。内面はやや左上がりのケズリ調整の後、ナデが施される。器壁の厚い42・43に関しては縄文時代晩期土器の混入品である可能性が高い。44~47は器壁の薄いものである。44・45は同一個体である。外面には二枚貝によると考えられる粗い条痕が施される。器壁は薄いが、縄文時代晩期土器の混入品である可能性が高い。条痕を有するものの大半が混入品と考えられるなかで、47はその判断を下しかねるものである。破片の上端が外反しており、口縁部付近の破片と考えられる。外面は二枚貝とも東本科植物とも考えうる原体によって条痕を施している。風化した内面は、粘土紐による内傾の接合痕を明瞭に残している。

浅鉢形土器 (Fig. 78-49~52) 縄文時代晩期後半の逆「く」字形口頭部黒色磨研浅鉢の系譜を引くと考えられる鉢である。50は口頭部と胴部の境に綫をもつ器形である。内外面には丁寧なヨコミガキが施される。面をもった口縁端部に丹を塗っている。49・51はくの字状に屈曲する器形である。いずれも口縁部を欠いている。49は屈曲部に一条の直線文を、51は屈曲部に二条の直線文を施している。

壺形土器底部 (Fig. 78-53~55) 53~55の他に、図上で復元して壺形土器13の個体とした底部がある。いずれの底部もかすかに底面がくぼんでいる。13・53は底面にミガキを施すが、器面にも丁寧なヨコミガキが施されている。13については底部側面に、横方向のケズリ痕を観察することができる。54は大型壺形土器の底部と考えられる。風化が激しいため器面の観察は容易でないが、ミガキは施されなかっただしく、ハケ調整をナデ消している。55は器面の風化が激しいが、外面にかすかなハケ痕を観察することができる。内面はミガキか。

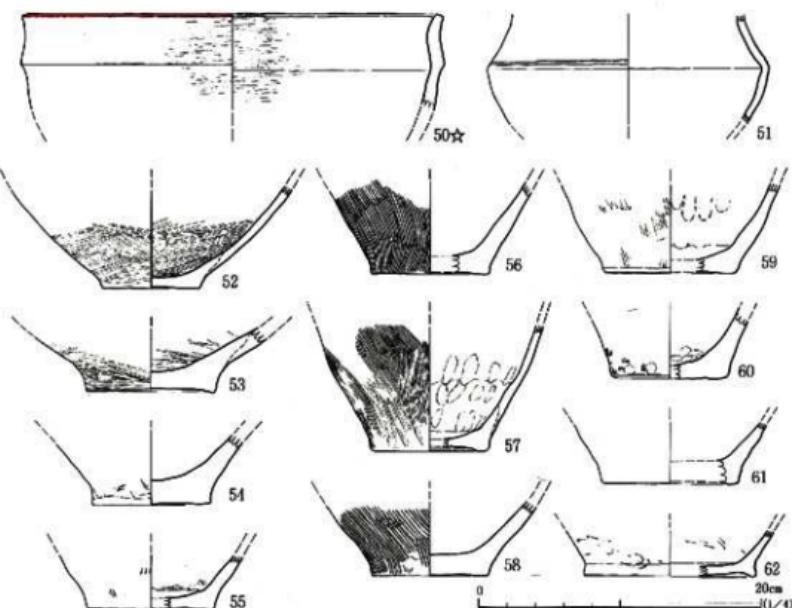


Fig. 78 小路遺跡第12号溝状遺構出土浅鉢形土器・底部尖測図
（★印は小片の為、径及び幅きの
僅元に検討の余地があるもの）

壺形土器底部 (Fig. 78-56~61) 器面のハケ調整が明瞭に観察できるもの56・57・58と、そうでないもの59・60・61がある。ハケ調整が観察できないものに関しては、二次焼成によるものか最終調整としてナデが加えられたためかの判断は困難である。57については、外傾接合を示す粘土帯の剥離痕がある。A型口縁壺形土器33と同一個体の可能性がある。61については器面の状態が良好で、ハケ調整をナデ消していたことがわかる。

不明土器 (Fig. 77・78-48・62) 48は梢円形を呈する連続圧痕をもつ。器種及び破片がどの部位にあたるか不明。圧痕原体の先端はさざくれていたらしく、圧痕中央に凹凸ができる。小路遺跡からは、他にも第18号溝状遺構から同様の上器片が出土している。その上器片は直口で波状の口縁端部をもち、口縁端部より約3cmほど下がった位置に連続圧痕が施されている。62の底部は底径が大きく、底面の周囲が高台状に突出する。内外面にはケズリ後ナデ調整が施され、器壁は薄い。48・62ともに縄文時代晩期土器の混入品である可能性が高い。

Tab. 6 小路遺跡第12号溝状遺構出土土器の器種別分類表

		口縁部片・胴部片による個体識別			口縁部片のみによる個別識別		
器種	形態	点数	計	全体の比率	点数	計	全体の比率
壺形 土器	大型	6 有文(2)	21	45%	6	13	43.3%
	中・小型	15 有文(5)	有文(7)		7		
甕形 土器	A型 口縁	10 B型化(3)	18	38%	8 B型化(3)	16	53.3%
	B型 口縁	8			8		
浅鉢形上器		3	3	6%	1	1	3.3%
条痕文土器		4	4	9%	0	0	0%
不明土器		1	1	2%	0	0	0%
総計		47	100%		30	100%	

3 器種組成

第12号溝状遺構から出土した土器片のうち、底部を除き個体識別が可能な破片は47点である。器種の構成比率は、壺形土器が45%（21点）、甕形土器が38%（18点）、浅鉢形土器が6%（3点）、条痕文土器が9%（4点）、不明土器が2%（1点）であった。これは口縁部片、胴部片を含めた数値であり、同一個体の重複を避けるためカウントを口縁部片のみに限定するならば、壺形土器が43%（13点）、甕形土器が53%（16点）、浅鉢形土器が3%（1点）となる。底部については全個体数15点のうち、壺形土器が33%（5点）、甕形土器が53%（8点）、浅鉢形土器が7%（1点）、不明土器が7%（1点）であった。

胴部片も含めた個体数の場合、壺形土器が甕形土器を上回っているが、これは甕形土器には段などの特徴ある胴部片が多いためと考えられる。口縁部片あるいは底部から求められた数値が、第12号溝状遺構出土土器の個体数をより反映したものといえよう。ただし、資料の点数が50点未満と限られることや、河川氾濫により形成された第12号溝状遺構には資料の一括性に疑いがあることなど、器種組成の比率には検討の余地が残されている。特に、不明土器と条痕文土器の大半に関しては、縄文時代晩期土器の混入品である可能性が極めて高い。しかし、条痕文土器Fig.77-47のように器壁が薄く、口縁部が外反するものもあり、その時期決定に関しては慎重にならざるをえない。小路遺跡第12号溝状遺構の器種組成比率は参考程度にとどめ、今後の当該期資料の増加を期待したい。

4 壺形土器について

第12号溝状遺構から出土した壺形土器のうち、口縁部や胴部などの個体識別が可能な破片は21点である。その形態比率は、大型が29%（6点）、中・小型が71%（15点）である。（口径が20cmを超えるものを大型、20cm以下のものを中型とした。ただし、Fig74-13については復元口径が約16cmであるが、復元器高が40cmに達するため大型とした。）胴部片を除き口縁部片のみに限定した場合の形態比率は、大型が46%（6点）、中・小型が54%（7点）となる。胴部片を含めるか含めないかによって多少の増減はあるが、大型壺形土器が30~40%とやや目立つ数値を示している。大型壺形土器には丹塗り磨研のものが含まれる。

有文壺形土器は、大型に6点中2点、中・小型に15点中5点含まれていた。しかし、壺形土器における無文と有文の比率は、口縁部のみの破片も多く、施文頻度の高い胴部を欠くため、具体的に数値で示すことは避けたい。有文壺形土器のうち、特殊文様をもつ破片は6点ある。その特殊文様のうち、山形文が2点、重弧文が4点であり、山口県前期弥生土器の主文様となる羽状文は認めることができなかった。また、第12号溝状遺構の文様施文は、最終調整である器面のミガキ後へラによって施されたもので、貝殻押圧技法は特殊文様の羽状文と同様に認められなかった。

有文壺形土器を個別に注目するならば、同一個体のFig.73-4・5の胴部片が特筆される。段の頸部側に際取りの沈線を施すとともに、段を挟んで上下にそれぞれ一条ずつ直線文を施している。段とその下に施された直線文との隙間には、縦キザミを充填する。5の破片では、その段装飾の下に三条一単位の重弧文が確認できる。弧文と弧文の間には、一条の縦線が認められる。4もわずかではあるが、縦線の上端を認めることができる。横向向に展開する重弧文を割付した、縦の区画線と考えられる。おそらく、前期弥生土器における縦区画線の初源例として位置づけることが可能であろう。

5 壺形土器について

第12号溝状遺構出土の壺形土器のうち、口縁部や胴部などの個体識別が可能な破片は18点である。これらの壺形土器は口縁部の形態から大きく二つに分けることができる。一つはA型口縁壺形土器であり、一つはB型口縁壺形土器である。その形態比率はA型口縁壺形土器が56%（10点）、B型口縁壺形土器が44%（8点）である。胴部片を除き口縁部片のみに限定した場合の形態比率は、A型口縁壺形土器が50%（8点）、B型口縁壺形土器が50%（8点）となる（A型口縁壺形土器10点のうち、B型口縁化するものが3点含まれる）。また、胴部区画文様は段のみであって、沈線は皆無である。

a. A型口縁壺形土器と「口縁下端凸状壺」

A型口縁壺形土器については、かつて私が「口縁下端凸状壺」の名称で呼んだことがある。その名称には前期弥生土器多元発生論の視点から、福岡平野の板付粗型壺に並行する遠賀川以東の弥生粗型壺として、「口縁下端凸状壺」を位置づけようとする意図があった。私は小路遺跡出土土器の観察から、口縁下端部を凸壺状に強調し、その下端部を刻む手法をもつ「口縁下端凸状壺」の一群を見いだした。また、その特徴をもつ口縁部と、キザミをもつ胴部段には相関性のあることが認められた。口縁部下端及び胴部段を強調し、そこにキザミを施す特徴により、縄文晩期二条凸壺深鉢からの変遷が考えられた。そして、この類例の分布は、遠賀川以東に顕著であった。今まで、遠賀川以東の壺形土器は口縁部下端を刻むという特徴のために、板付式の壺形土器II縁部におけるI式の全面からII式の下端へのキザミ位置の変遷に照らしあわせ板付II式以降に位置づけられてきた。しかし、「胴部に屈曲がなく口唇部のみに刻目を施す（後略）」³⁾深鉢から変化した板付式壺には、板付II式のメルクマールとなる口縁部下端キザミ及び胴部区画の沈線を生み出す要素はなく、むしろその成立に影響を与えたのは二条凸壺深鉢から変化した遠賀川以東の「口縁下端凸状壺」と私は想定した。つまり、板付式の壺II縁端部におけるキザミ位置の変遷とは必ずしも一致しない地域があることを、その名称に強く打ち出したかったのである。

しかし、その名称が示唆的で長々しいことや、「口縁下端凸状壺」に対する当初の型式設定が不明確であったため、様々な問題が生じることになった。このままでは、小路遺跡出土前期弥生土器における本来の評価までも歪曲させることになりかねない。そこで、本論では「口縁下端凸状壺」の名称はA型口縁壺形土器とし、成形技法の観察にもとづいた事実記載を行うことのみにとどめておく。

b. A型口縁壺形土器の成形技法

A型口縁壺形土器の底部と考えられるFig.78-57には、粘土帶の外傾接合であることを示す剥離痕が認められる。同様な痕跡は、Fig.76-33の胴部段の断面観察でも可能である。外傾接合によって、A型口縁壺形土器は成形されていたのであろう。また、Fig.75-20には胴部段から口縁端部の内面の中間にくぼみが一巡する箇所があり、この部分で粘土帶の接合が行われていたことがわかる。幅4cm前後の粘土帶が2段積み上げられることによって、胴部段から口縁端部までが成形されている。このことより、第12号溝状遺構出土のA型口縁壺形土器においては、胴部段より口縁端部までの長さは約7.0cm前後と考えられ、その長さは器形全体の1/3以上をこえることはない。⁴⁾

器面を観察すると、胴部段と口縁下端凸状部に強いヨコナデの条線が認められる。また、そのヨコナデにナデ消されたタテハケ調整の始点が、凸状部と胴部段の直下に痕跡を残している。このことにより、凸状部はハケによって口縁下端以下を低め、高くなつた口縁下端部に更にヨコナデを加えることによって、凸状に強調していることがわかる。(この手法はB型口縁壺形土器においても認められ、口縁下端部をヨコナデによって凸状に強調している。その凸状の部分にキザミを施すため、おのずから下端キザミとなる。) そして、胴部段についても同じく、粘土帯の接合によって生じた高まりの底部側をハケによって低め、その部分にヨコナデを加えることによって強調している。うち、Fig76-33・35はこれらの調整の後に、胴部段から上に左上がりのヨコハケを施している。

口縁下端凸状部と胴部段などの特徴は、一見すれば縄文時代晩期後半の二条凸帯深鉢形土器に類似している。これらが縄文晩期後半の二条凸帯深鉢と異なる点は、粘土紐の内側接合によるのではなく粘土帯の外側接合によって成形されること、深鉢の凸帯にあたる部分が貼付けではなく、調整技法によって器面を強調すること、調整工具にハケを使用していることなどがあげられる。

6 浅鉢形土器について

小路遺跡第12号溝状遺構土器群の特徴として、縄文時代晩期後半に盛行した口頭部逆「く」字形黒色磨研浅鉢の残存器種が組成に含まれることが挙げられる。Fig.78-50は、頭胴間に強い稜をもつが、口頭部は内側に屈曲せず、外反気味に直立している。また、胎土は明らかに弥生前期のものである。Fig.78-51は胎土が縄文時代晩期のものに似るが、内側に屈曲した口頭部が長く、縄文時代晩期の浅鉢形土器とは異なる。この器種が山口県において、貝殻押圧技法及び羽状文をもつ壺形土器と共に伴した例はない。

おわりに

小路遺跡の第12号溝状遺構出土の前期弥生土器には以下の特徴が挙げられる。壺形土器における貝殻押圧技法及び羽状文は未発達である。特殊文様はヘラ描きによる重弧文が目だち、縦区両線が認められる。また、丹塗り磨研の大型壺形土器が認められる。壺形土器においては、B(如意)型口縁壺形土器とは系譜を違え、縄文晩期二条凸帯深鉢から変遷したと考えられるA型口縁壺形土器が認められる。A型、B型口縁壺形土器とともに胴部の区画は段であり、沈線は皆無である。浅鉢形土器には、口頭部逆「く」字形黒色磨研浅鉢の残存と考えられる器形がある。これらの特徴は、おそらく山口県内ののみならず本州最古級の前期弥生土器として位置づけることが可能であろう。

[注]

- 1) 豊谷和之「吉田遺跡第 I 地区 A 区出土の弥生時代中期後半の土器について」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』 XI、1993年)
 - 2) 梶田廣・菅波正人「小路遺跡」(『山口市埋蔵文化財調査報告』 第27集、1988年)
 - 3) 豊谷和之「前期弥生土器出現」(『古代』 99号、1995年)
 - 4) 藤尾信一郎「板付 I 式壺形土器の成立とその背景」(『史蹟』 第百二十四輯、1987年)
 - 5) A型口縁壺形土器は、時代が下がるとともに口縁が外反し B型口縁壺形土器に汎化している。また、小路遺跡では顕著ではないが、福岡県遠賀川以東・広島県・高知県には胴部に段をもたず、口縁端部を凸筋状に成形する技法をもつ壺形土器がある。これらの問題点を整理していく課題が残されている。
- 北九州市・椎ヶ迫遺跡、島山遺跡 C 地点、寺内遺跡第 6 地点
- 宇野慎敏「椎ヶ迫遺跡・先ノ下遺跡-幹線8号線関係埋蔵文化財調査報告書-」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』 第59集 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1987年)
- 宇野慎敏「島山遺跡 C 地点-田原団地公営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』 第94集 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1990年)
- 宇野慎敏・梅崎恵司「寺内遺跡第 3・4・5・6・7 地点-北方地区改善事業に伴う埋蔵文化財調査報告-」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』 第106集 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1991年)
- 広島県・高峰遺跡
- 桑原俊明・飯治益生「綠岩古墳-三次地区工業団地第二期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査-」(広島県教育委員会、1983年)
- 高知県・田村遺跡
- 出原忠二他「田村遺跡群」第 2 分冊・第 3 分冊(『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 高知県教育委員会、1986年)
- 6) 他地域の A型口縁壺形土器には、胴部段から口縁端部までの長さが器形全体の 1/2 を占めるものもある。
- 大分県・平石遺跡
- 坂本嘉弘「高添台地の遺跡」(千歳村教育委員会、1989年)

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

(設置)

第1条 山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

(資料館の業務)

第2条 資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

- 一 山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収藏・展示および調査研究
- 二 山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行
- 三 その他の埋蔵文化財に関する必要な業務

(運営委員会)

第3条 資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2 委員会に関する規則は、別に定める。

(館長)

第4条 資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

2 館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 館長は、資料館の業務を掌理する。

第5条 資料館には調査員若干名を置く。

2 調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3 調査員は、資料館の業務を処理する。

(特別調査員)

第6条 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2 特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

(雑則)

第7条 この規則に定めるものほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は次の事項を審議する。

- 一 山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。
- 二 資料館の管理運営に関すること。
- 三 資料館の整備充実に関すること。
- 四 資料館の運営に要する経費に関すること。
- 五 その他必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 資料館規則第4条第1項の館長
- 二 各学部および教養部の教官各1名
- 三 事務局長

2 前項第2号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

(任期)

第4条 前条第1項第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(委員以外の出席)

第7条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるものほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 7 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

(平成5年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
教育学部	小川國治	教授	平5.4.1~平6.3.31	委員長
人文学部	中村友博	教授	平5.6.7~平7.6.6	館長
人文学部	八木充	教授	平5.5.29~平7.5.28	
経済学部	及川順	教授	平5.4.1~平7.3.31	
理学部	志磨裕彦	教授	平5.4.1~平7.3.31	
医学部	福本哲夫	教授	平4.4.1~平7.3.31	
工学部	水田義明	教授	平5.4.1~平7.3.31	
農学部	宇都宮宏	講師	平5.4.1~平7.3.31	
教養部	森茂暁	助教授	平5.4.1~平7.3.31	
事務局	萱沼一	事務局長	平4.4.1~	

(平成6年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
理学部	志磨裕彦	教授	平5.4.1~平7.3.31	委員長
人文学部	中村友博	教授	平5.6.7~平7.6.6	館長
人文学部	八木充	教授	平5.5.29~平7.5.28	
経済学部	及川順	教授	平5.4.1~平7.3.31	
教育学部	五島淑子	助教授	平6.4.1~平8.3.31	
医学部	福本哲夫	教授	平4.4.1~平6.3.31	
工学部	水田義明	教授	平5.4.1~平7.3.31	
農学部	宇都宮宏	講師	平5.4.1~平7.3.31	
教養部	森茂暁	助教授	平5.4.1~平7.3.31	
事務局	木村豊	事務局長	平6.4.1~	

Tab. 8 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻等	備考
人文学部	近藤喬一	教授	考古学	平成6年度
理学部	永尾隆志	助教授	岩石学	平成6年度

山口大学構内の主な調査

吉田構内

Tab. 9 山口大学構内の主な調査一覧表

調査年度	旧調査地区名	現内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第 I 地区 A + B 区	L - M + N - 15	1	367	土壙・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野志英	年報Ⅲ
	第 II 地区 古都病院新宮	S - T - 19 R - S - 20	2	2,000	柱・柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	*	*	
	第 II 地区	P - Q - 19 - 20	3			弥生土器、土師器	試掘	*	
	第 IV 地区 牛糞新宮	S - 10	4	300	弥生層・土壙、古墳堅穴住居、中世住居跡、溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶瓶	事前	*	
	第 IV 地区	S - T - 9 - 13	5				試掘	*	
昭和42年	第 III 地区 松原区	E - 20	6	1,000	杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、尖底状木枕	事前	*	①
	第 III 地区 南区	G - H - 22 - 23	7		河床跡・柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	*	*	
	第 III 地区 北区	I - J - 20 - 21	8	1,400	堅穴住居・溝・土壙、柱穴		*	*	
	第 III 地区 東南区	H - 23 I - J - K - 24	9		弥生堅穴住居	弥生土器	*	*	
	第 III 地区 野球場	I - 22 - 23 J - 21 - 22 - 23 K - 22 - 23	10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	*	
	第 V 地区 学生食堂	I - J - 19 - 20	11		弥生層・古墳土壤	弥生土器、土師器	事前	*	
	第 V 地区	H - I - J - K - L - M - N - 18 - 19 - 20	12		河床跡・柱穴・土壙	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学古田道勝講師	
	第 I 地区 C 区 大学本部新宮	K - L - 14	13	600	堅穴住居・溝・土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	*	
昭和44年	第 V 地区 教育学部				河床跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	*	年報Ⅲ
昭和46年	第 I 地区 D 区 第 1 地点	K - 13	14		近秋大溝	弥生土器、木灰窯	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 2 地点	L - 13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鏡	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 3 地点	L - M - 13	16		土壙・柱穴	弥生土器、瓦質土器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 4 地点	M - N - 13	17		土壙・柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 5 地点	L - 13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 6 地点	M - 13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 7 地点	M - 13	20			須恵器	*	*	
昭和50年	第 II 地区 E 区 第 2 学生食堂新宮	N - O - 15	21	900	古墳堅穴住居・土壙・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鐵製品	事前	*	年報Ⅲ
昭和51年	第 III 地区					弥生土器	試掘	*	①
昭和53年	第 III 地区				堅穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	*	*	
昭和54年	A 文学部校舎新宮	M - N - 21	22	160			*	調査担当 近藤義一	年報Ⅳ
	教育学部附属学校新宮	A - B - C - D - 20 - 24	23	410	溝・土壙	縄文土器 弥生土器	*	山口大学埋蔵文化財資料館 山口市教育委員会	年報Ⅴ

調査年度	調査名	調査地区割	地点	面積 (m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和54年	理学部校舎新堂	O-18・19	24	250			試掘		年報X
	農学部動物舍新堂	P-18・19	25	380			*		
	本部管理棟新堂	L-14	26	740	溝、土壙、柱穴、中性井戸、土壤基、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報Ⅷ
昭和55年	経済学部校舎新堂	K-L-21	27	66			試掘		年報X
	農学部農業実習施設新堂	Q-15	28	50	溝、土壙		事前		
	本部基礎施設新堂	E-F-15・16 G-H-20・21 G-H-12・19	29				立会		
	農学部環境整備	L-M-12・13 N-O-P 10-12 P-Q-17・18	30				*		
昭和56年	教育学部校舎新堂	H-19	31	400	弥生堅穴住居 土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報I
	教育学部音楽室新堂	H-16	32	100	溝		*		
	教育学部美術学科 技術科実験室新堂	J-19・20	33	130	旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、 須恵器、土師器	*		
	正門情報舎新堂	H-11	34				立会		
	時計塔修理設	I-14	35				*		
	本部構内園芸収成	K-14	36				*		
	教育学部構内溝整復取	I-16・17	37				*	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J-K-L-M-15 M-N-16	38				*		
	農学部中庭整備	O-17	39				*		
	職務施設改修	O-16	40				*	工法等変更	
昭和57年	学生部文化会館新堂	L-8	41				*	工法等変更	年報II
	学生部馬場整備	M-N-8-9	42				*		
	附属図書館増築	M-16	43	600	弥生～古墳期、 土壙、柱穴、柱列	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	事前		
	大学会館新堂	M-14・15	44	130	弥生堅穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属美術合 実験室排水渠新堂	B-22	45	800			立会		
	教育学部自動車實驗 算用機器新堂	K-L-17	47	10			*		
昭和58年	教育学部中庭整備	J-K-16	48	150			*		年報III
	大学会館新堂	M-N-13	49	2,000	古墳井戸、土壙、 柱穴、中性井戸、 掘立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、陶人頭埴輪、 圓窓陶器、瓦束土器、 縄文陶器、木簡、石 器	事前		
	ラグビーフィール ドグラネット新堂	G-H-19	50	114	弥生溝、弥生～古墳 堅穴住居、土壙	弥生土器、土師器、 石製品	*	堅穴住居は工 法変更により 現地保存	
昭和59年	理学部大学院校舎新堂	M-N-20 O-19-20	51	409			立会		年報III
	正門・南門・輪卓廣場 および正門花壇新堂	H-I-23 I-J-12-13 J-13	52	183			*		
	学生第一アーチエリ ー場所、車柱設置	M-8	53	33			*		
	学生部運営室新堂	L-7	54	1.6			*		

調査 年度	調査名	調査内地図割	地点	面積 (m ²)	遺 墓	遺 物	調査区分	備 考	文献
昭和 58年	学生部野球場 木松取設	J-21 K-22	55	1				立会	
		I-16-17 K-L-17-18	56	81				*	年報 IV
	学生部環境整備 改修	C-18, D-17 E-16	57	12				*	
昭和 59年	大学会館ケーブル布設	N-12-14	58	160	弥生土塹、柱穴	弥生土器	事前		
	大学会館排水管布設	K-L-13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壤、古代～中世土塹、柱、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青銅、白磁、瓦質土器		*	年報 IV
	学生部ナニスコート改修 フェンス改修	B-17-18 C-16-17-18-19 D-15-16-17 E-15-16	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K-19-20-21	61	8				立会	
昭和 60年	大学会館環境整備	I-14 L-M-N-15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生柱穴柱坑、剪裁穴、土塙、古代～元世土塹、柱、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輪入器、圓底罐、土製品、石斧、原心、鐵器、甕座		試掘	
	経済学部環境整備(樹木移植)	K-21, L-20	63	5				立会	
	農学部附属農場胡芦井 排水渠清復整備	R-16-19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、繪人面磁器、輪口、石器、鉄器		*	
	農学部附属農場農道改修	V-15-16	65	325				*	
	教育学部附属施設整備(樹木移植)	I-J-19-20	66	450				*	
	中央ボイラー・排水止設置	O-P-16	67	25		須恵器		*	
昭和 61年	人文学部環境整備 (樹木移植)	L-M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石器、瓦片		*	
	交通標識設置	J-20, N-14 O-18	69	3				*	
	農学部附属農場田畠整備 (実験動物運動場設置)	P-Q-17-18	70	16				*	
	理学部環境整備(樹木移植)	N-20-21	71	4				*	
	農学部附属農場畜病院整備	S-T-19	72	270				*	
	国際交流会館新交	N-22-23	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世唐	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶瓶器、鐵瓶、加工板ある 瓦片		試掘	
昭和 62年	山口銀行現金自動支払機設置 (窓口跡地)	I-J-19-20	74	11	包含層(河川跡分)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20, U-19	75	165	中世唐、柱穴	土師器、瓦質土器	*	工法等史	
	農学部附属農場農道 改修 (樹木移植)	L-10 Q-15-16	76	12				*	
	正門横(水田内)規制 杭設置	I-10	77	0.25	包含層分			*	
	経済学部環境整備 (樹木移植・記念碑建立)	M-20	78	3				*	
	方田標内交通渠 設置	H-23, J-9, P-22, S-20, W-16	79	3		須恵器		*	

調査 年度	調査名	境内地区割	地点	面積 (m ²)	遺情	遺物	調査 区分	備考	文献
昭和 40年	本道神祇1号線および 四田神社境内の 污水管埋設		80	2,100	古墳・古代溝・古代 河川跡、弥生包含層	弥生土器、土器縫、 須恵器(墨書きのある もの含む)瓦質土器、 製陶土器、石斧、板 石	立会	山口市教育委 員会 山口大学埋蔵 文化財資料館	
	教委部自動車洗車場設 (機械設置および駆除改修)	K-L-18	81	3.5			*		
	教委部身体障害者用 スロープ取設	L-15-15	82	3			*		
	経済学部教水栓取設	L-M-20	83	4			*		
	吉田構内水泳プール 改修等	E-F-16 H-15	84	26.5	鉢形壇		*		
	農学部附属農場 造水管埋設	S-12	85	3			*		
	古出構内污水排水管 等能改修	M-18 O-15-16	86	15.5		土器質土器	*		
	本部身体障害者用 スロープ取設	L-14	87	12			*		
	経済学部身体障害者用 スロープ取設	K-20 L-18-20	88	78	弥生～古墳柱穴		*	工法等変更	
	附属図書館新館建物用 スロープ取設	L-16	89	8		弥生土器	*		
昭和 42年	教委部37番教室改修	K-16	90	1			*		
	教育学部附属教育実践 研究指導センター新宮	K-18	91	240		プランク、耐器、 植物遺体	事前		
	教委部複合棟新宮	J-K-17-18	92	35	雨蓋十輪、溝、柱穴	土器跡、須恵器、 土器質土器、石斧	試掘		
	教委部複合棟新宮	I-J-16	93	30	壺状遺構	弥生土器	立会		
	教委部複合棟新宮	J-K-17-18	94	890	落し火、河川跡、整 穴住居、土壤、溝、 井戸、雨蓋十輪、創 立柱建物跡、谷状遺 構、柱穴	縄文土器、土器縫、 須恵器、土器質土器、 須恵質土器、陶器、 石器、石斧、木製品	事前		
	九田川河川改修	B-C-17	95	20			立会	山教委、 山大理工	
	国際交流会館新宮	M-23 N-22-23	96	195			*		
	教育学部附属農場 教水栓取設	B-21	97	1			*		
	農学部附属農場E7号場 教水栓取設以及 E6号場進入路拡幅	L-N-12	98	55	中世土器	弥生土器、土器縫、 須恵器、輸入白磁、 國家磁器、磁器	*		
	農学部植栽	N-17	99	3			*		
昭和 63年	経済学部教水栓取設	K-20	100	0.5			*		
	教委部複合棟新宮に伴う 自動車置場移設	I-16	101	1	包含層か		*		
	国際交流会館新宮に伴う 排水管埋設	O-22	102	35	河川跡(溝か)、 鉢形壇	弥生土器、須恵器	*		
	教委部複合棟新宮に伴う ケーブル埋設	J-18	103	1			*		
	サッカー・ラグビー場 改修	F-19, G-19, H-19-20	104	35	性格不明	弥生土器	*		
	消防用水設置	K-L-M-22	105	7.5			*		
平成 元年	水銀灯新宮	K-L-15	106	4	古墳壺状遺構 柱穴	弥生土器、土器縫、 須恵器、六連式製陶 土器	事前		
	橋野寮ボイラー設備改修	O-P-20-21	107	25			立会		

調査 年度	調査 名	構内地区別	地点	面積 (m ²)	遺 墓	遺 物	調査 区分	備 考	文獻
平成 元年	野球場防球ネット新設	I - J - K - 21 H - I - K - 22	108	7	包含層	弥生土器、土師器、陶器等、瓦質土器、陶器	立会		年報 Ⅱ
	防火木構配管布設	K - 21 - 22	109	15	柱穴		*		
	吉田寮ボイラー設備改修	L - 8	110	4			*		
	体育施設系統水管改修	G - H - 16	111	50		陶器	*	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M - 13	112	6			*		
	吉田寮ボイラー棒地下貯油槽設備改修	L - M - 8	113	45	包含層	上部器、須恵器、土師質土器、陶器、剥片、二次加工のある剥片	*		
	第2武道場排水渠新設	G - H - 15 - 16	114	2	渠		*		
	室内博識設置	I - 14, L - 15	115	0.5			*		
	本部草木給水栓改修	L - 13	116	6.5		弥生土器	*		
	大学会館前面部環境整備	L - M - N - 14 - 15	117	36	中世溝		*		
平成 2年	大学会館前面環境整備	M - 15	118	2			*		年報 Ⅲ
	第1学生食堂設備改修	J - 19 - 20	119	7			*		
	教育学部附属農場学校室内暖設置	E - 20	120	1			*		
平成 3年	農学部連合歯医学科棟新設	O - P - 17	121	76	純文河川	純文土器、石器	試掘		年報 Ⅳ
	農学部附設プレハブ倉庫設置	P - Q - 17	122	6		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室その他機械設備設置改修	P - 16	123	8			*		
	大学会館前面記念植樹	L - M - 16	124	2			*		
	サークル棲泊所	E - F - 14	125	1			*		
平成 4年	農学部連合歯医学科棟新設	O - P - 17	126	980	純文河川	純文土器、石器	事前		年報 Ⅴ
	交通反制標識及びバリカーケー	L - 10, P - 22, H - 23, S - 19 - 20	127				立会		
	吉田橋内道路(南門ロータリー)設	H - 23	128	40			*		
	ボイラー室給水管漏水補修	P - 16	129	4			*		
	農学部附属農場ガス室新設	S - 13	130	3.5			*		
	大学会館前面記念植樹の植え込み	L - M - 15	131	3			*		
	豊町平川緑緊急地方道路整備工事及び山口大学吉田団地環境設備(正門周辺)	H - 11	132				*		
平成 5年	豊町平川緑緊急地方道路整備(佑弓棲設置)	H - 11	133	7			*		年報 Ⅵ
	本部裏給水管埋設	J - K - L - 13	134	70	渠、柱穴	弥生土器、土師器 滑石製模造品	事前		
	人文学部・理学部抗議棟新設	M - 20	135	4			試掘		
	第2屋内運動場新設	G - 16	136	144	渠	弥生土器、須恵器 砾石	*		
	農学部給水管埋設	N - O - P - 18	137	9			*		
	基幹室(屋外施設水管改修)	L - 15, N - 17 M - 18	138	16			立会		
	農学部連合歯医学科棟新設	O - 16	139	4			*		
	大学会館前面バリカーセン	N - 13	140	1			*		
	大学会館前面記念植樹	M - 14	141	1.5			*		
	九条川河川鋪改良		142	40			*		
	農学部電柱て立替え	W - 17	143	0.2			*		
	農学部ガラス室設置	R - 14	144	10			*		
	教育学部給水管埋設	H - 19, J - 19	145	15			*		

調査年度	調査名	構内地図別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成5年	環境整備(大学会館前庭)	L-14・15 M-13・14・15 N-14・15	146	140.9			立会		年報Ⅲ
	環境整備(道路保有地区)	H-20 I-19・20・21 J-20・21	147	361			*		
	環境整備(正門周辺)	H-12, G-13	148	350			*		

小串構内

調査年度	調査名	構内地図別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育施設新宮		1	260		土壘跡、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅳ
	医学部図書館増築		2	4			立会		
	医学部体育施設新宮		3	1			*		
昭和59年	医学部洋化施設新宮		4	44	近世構	土壘跡、瓦質土器、石器	事前		年報Ⅴ
	医学部体育施設新宮		5	65		土壘跡、瓦質土器、石器	*		
	医学部添新整備(特高受電電設施)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
	医学部臨床実験施設新宮		7	38			*		
昭和60年	医学部外半診療施設新宮		8	350		土質土器、瓦質土器、陶器	*		年報Ⅴ
	医学部基礎研究施設新宮		9	10		近世陶器	*		
	医学部看護総合改修		10	25.5		近世陶器	立会		
	医学部看護宿舎改修		11	20			*		
	医学部基礎整備(樹木移植)		12	48			*		
昭和61年	医学部附属病院外来待合室新宮		13	5			*		年報Ⅵ
	医学部附属病院外診療施設(周辺環境整備等)(雨水調理庭)		14	18			*		
昭和62年	医学部附属病院東側車庫改修		15	6			*		年報Ⅶ
	医学部附属病院新宮		16	104		陶器、ナイフ形石器、細石万枚	試掘		
昭和63年	医学部附属病院新宮		17	300		二次加工のある片、使用痕のある剝片、剥片、結晶石、礫、砾石、土壘跡、瓦質土器、石器	立会		年報Ⅷ
	医学部附属病院整備		18	220			*		
平成元年	医学部附属病院M.R.I.施設新宮		19	45		陶器、細石刃、二次加工のある剝片、剥片、石核	試掘		年報Ⅸ
平成2年	医学部附属病院動物・R.I.実験棟新宮		20	40		剥片	*		年報Ⅹ
平成3年	医学部臨床実験施設新宮		21	0.5			立会		年報Ⅺ
平成4年	後期棟地盤調査		22				*		年報Ⅻ
平成5年	医学部臨床実験施設新宮その他の		23	9			*		年報Ⅼ
	医学部附属病院基幹設備(施設棟新宮)		24	6			*		

常盤構内

調査年度	調査名	構内地図番	地点	面積 (m ²)	遺情	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新築		1	70		破壊器	試掘		年報Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			*		
昭和59年	工学部尾山宿舎 排水管改修			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎 排水管改修等			65			*		年報V
	工学部受水槽改修		3	15			*		
昭和61年	工学部尾山宿舎 排水管改修			6			*		年報VI
	工学部身体障害者用 スロープ取設		4	29			*		
	情報処理センター (常盤センター) 空調設備取設		5	30			*		
昭和63年	工学部後坪岬上屋新築		6	225			*		年報Ⅷ
平成元年	工学部衣冠照明装置 および防球ネット設置		7	2			*		年報IX
	工学部記念植樹		8	2.5			*		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			*		年報X
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			*		年報XI
平成4年	工学部プレハブ研究・ 実験棟新築		11	6			試掘		年報XII
	工学部・工業短期大学部の改 整再編・博士課程設置に伴う 建物等の新築		12	40			*		
	工学部及び工業短期大学部 職員宿舎新築		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			*		
平成5年	工学部プレハブ研究・ 実験棟新築		15	12			試掘		年報XIII
	工学部地域共同研究 実験センター新築		16	16			*		

亀山構内

調査年度	調査名	構内地図番	地点	面積 (m ²)	遺情	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属萬山口小・ 幼稚園運動場整備		1	60	古墳時代住居、 唐状遺情	土器、須恵器、瓦 瓦上器、瓦、石製品、 木製品	試掘		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属萬山口小学校 排水管改修		2	1			立会		年報V
	教育学部附属萬山口中学校 球技コート整備		3	2			*		
	教育学部附属萬山口運動場 環境整備(樹木移植)		4	1			*		
昭和61年	教育学部山口附属学校 汚水排水管改修	幼稚園・小学校 部分	5	57	中世土壤分	縄文土器、弥生土器、 土器破片、須恵器、瓦 瓦上器、土器實上器、 陶器器、不明鉢製品、 石片、剝片、植物遺 体	試掘		年報VI
	教育学部附属萬山口小学校 電柱移設	中学校部分	6	20	河田跡 杭跡				

調査年度	調査名	調査地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教育学部附属幼稚園 施設改修		7	40			立会		年報Ⅳ
昭和63年	教育学部附属山口中学校 施設改修		8	35	匂香署	土師器、磁器、瓦片	*		年報Ⅴ
平成元年	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校 污水排水管布設		9	260	弥生～古墳墳穴柱坑、 土塹、溝、柱穴、附 川跡	繩文土器、弥生土器、 土師器、磁器器、瓦質土器、環状陶器、 黑色土器、磁器、二次加工のある瓦片、 使用痕のある瓦片、 石器、石核、砾石	事前		年報Ⅵ
	教育学部附属幼稚園 パレーコート支柱設置		10	6.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校污水排水管布設		11	170	弥生溝状遺構	弥生土器、土師器、 打製石斧、削器、瓦 片、石核	*		
平成2年	教育学部附属山口中学校 污水排水管布設		12	70	溝状遺構	繩文土器、弥生土器、 土師器、瓦質土器、 不明鉄製品、石器、 敲き石、扁平打製石斧、 砾石、瓦片	事前		年報Ⅶ
			13	130		弥生土器、土師器、 绳器、土師質土器、 瓦質土器、圓底陶器、 扁平打製石斧、 砾石	立会		

光構内

調査年度	調査名	調査地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 白駒草實場改修		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶器、 瓦	試掘		年報Ⅲ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 施設改修新堂		2				立会		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属光小学校 外灯改修		3	1		土師器	*		年報Ⅴ
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業(ブロンズ像建立)		4	2.5		土師器、磁器	*		年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属光小学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、土師質土 器、瓦	*	手洗探集	年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属光小学校 運動場移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶器	*		年報Ⅷ
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 磁器、瓦器、瓦質土器、 陶器、瓦	*	手洗探集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		繩文土器、土師器、 磁器、瓦質土器、 施物陶器、磁器、土 器、瓦片、瓦片	試掘	手洗探集 遺物合併	年報Ⅸ
	教育学部附属光小学校 運動場改修		9	23	土塙	土師器、磁器、陶器	事前		
平成3年	教育学部附属光中学校 武道館新堂		10	38	土壤、唐状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報Ⅹ
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石器	立会		
	教育学部附属光中学校 バッタネット新設		12	8.5		土師器	*		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成4年	教育学部附属光中学校 武道館新宮		13	500	土壤、柱穴	繩文土器、後良器、土師器、瓦器	事前		年報第3号
	教育学部附属光中学校 武道館古跡調査		14				立会		
平成5年	教育学部附属光中学校 武道館新宮その他の		15	6			*		年報第4号

その他の構内

調査年度	調査名	構内地区割	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ガートルーム 合宿研修所整備	宇都宮市大字小野字土井	0.5			立会		年報第V号
	学生部ヨット部室 合宿研修所整備	古河市秋郷町東字牛道				*		
昭和60年	荒野荘給湯機器取扱	山口市荒野町3-21	7			*		年報第VI号
昭和61年	湯田宿舎純水貯改修	山口市湯田温泉六丁目8-29	35	杭		*		年報第VII号
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市西条通り二丁目3-32	1		土師質土器	*	5号宿舎	
	山口市本の上町6-9		7		瓦	*	2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市柏原石二丁目8-7	1		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	*	7号宿舎 探査	年報第VIII号
平成元年	本館裏月宿舎 公共下水道切替	山口市本の上町6-1	1			*	1号宿舎	年報第IX号
平成2年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市石鏡音町1-25	12		陶磁器	*	7号宿舎	年報第X号
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山町3-1	0.5			*	3号宿舎	
平成3年	湯田宿古A棟整配木 その他の改修	山口市湯田温泉6丁目	30			*		年報第XI号
	経済学部6号職員宿舎 電柱設置	山口市東通り 二丁目1937-1	0.5			*		
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市火花902-2	1			*		
平成4年	上原小路共同下水管布設		7			*		年報第XII号

参考文献① 山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけでなく注意されたい。

Summary

Ch. I This is a summary of the archaeological excavation carried out on the campuses of Yamaguchi University this year. In the archaeological survey on the Yoshida campus, salvage excavation was carried out once, trial excavation was carried out three times, and examination was carried out eleven times. On the Kogushi campus, examination was carried out twice. On the Tokiwa campus, trial excavation was carried out twice. On the Hikari campus, examination was carried out once.

Ch. II Water-supply pipes are planned to be laid underground on the feed farm of the faculty of agriculture, which is located behind the administration building of the university. Prior to the construction work, salvage excavation was carried out. The excavation area was divided into two excavation fields. The first field stretches 60.0 meters from east to west and has a width of 1.0 meter. The second field is located about 20.0 meters west of the first one, and is 5.0 meters in length and 2.0 meters in width. In the first excavation field, old natural features descend from east to west, and it was confirmed that there were two layers on the east side of the site and three layers on the west side. The Structural remains, ditches and pillar holes which were discovered, were considered to belong to the period dating from the Tumulus Age to the Middle Ages. As to the remains, a lot of broken pieces of pottery, iron arrowheads and imitations made of talc were also excavated and these were considered to belong to the period dating from Jomon Age to the Early Modern Ages. In the second excavation field, the layer which was considered to be a waste-filled bed of the river was confirmed.

Ch. III On the Yoshida campus, a large-scale ditch was discovered during the trial excavation prior to the planning of the construction of the second new indoor athletic field. Through the additional trial excavation carried out twice on both the Yoshida campus and the Tokiwa campus, no remains nor structural remains were detected.

Ch. IV Through the examination carried out prior to the improvement of the surroundings of the Yoshida campus, the existence of layers was confirmed on the site for the proposed university hall and also in the ruins preservation area. No remains or structural remains were detected during examinations in any other areas.

Appendix

I This is an official report of the archaeological excavation carried out during the period from April 12 to April 25 in 1971 at area D in the first field of the Yoshida Site. When the west side of the hill, where the university hall stands now, was cultivated as a farm for stock feed, pottery was excavated and layers were exposed. Therefore, the Research Organization for Yoshida site carried out an archaeological excavation. The excavated field was divided into seven areas. At each areas, the existence of layers was confirmed, but no significant structural remains were detected. As to the remain which was reported at first to be a large-scale ditch when it was excavated, after further salvage excavation carried out prior to the construction of the university hall in 1983, this turned out to be a hollow in the old configuration of the ground like a valley. As to the remains, a lot of pottery and stone implements which belong to the period from the Yayoi Age to the Early Modern Ages were excavated.

II This is the first report of "The Collection of Yayoi Potterys in Yamaguchi Prefecture" by Kazuyuki Mameyani. In this report, early Yayoi potterys (pottery made in the early Yayoi Age) excavated at the Shoji site in the City of Yamaguchi are dealt with. Among the early Yayoi potterys excavated at the Shoji site in the City of Yamaguchi, there were some pots and bowls which still retained the characteristic features of Jomon potterys. This fact indicates that these sets are the oldest early Yayoi potterys not only in Yamaguchi Prefecture but also in Honshu.

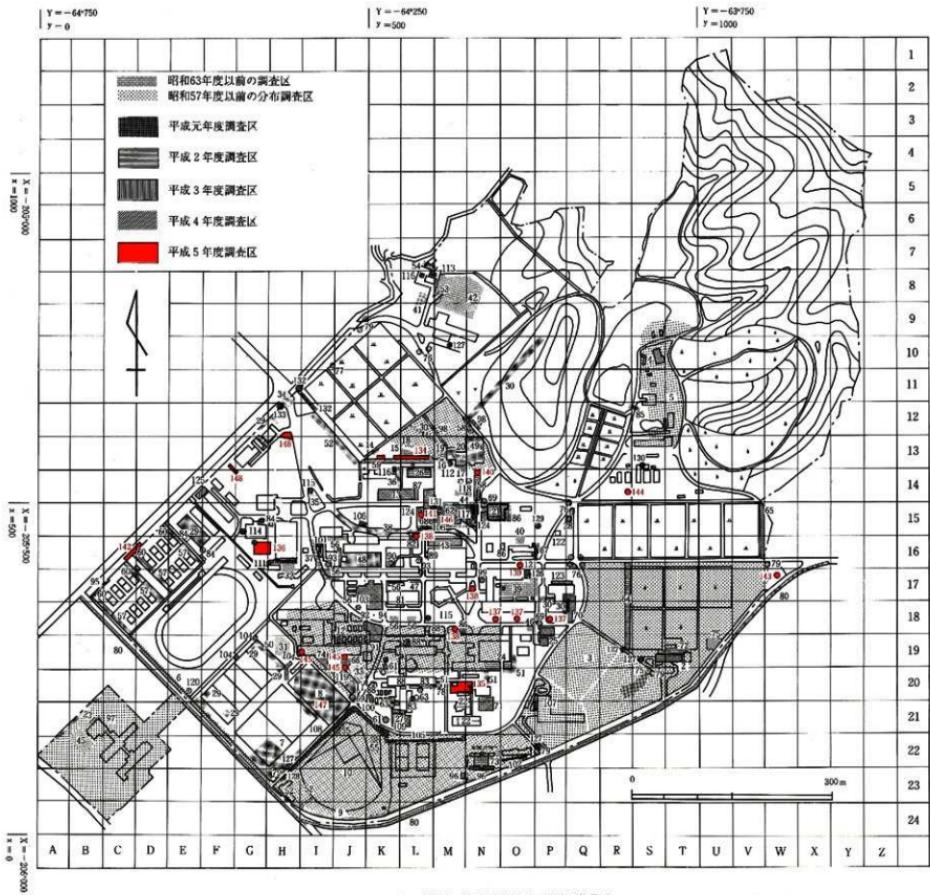


Fig. 79 山口大学吉田構内地区側および調査区位置図

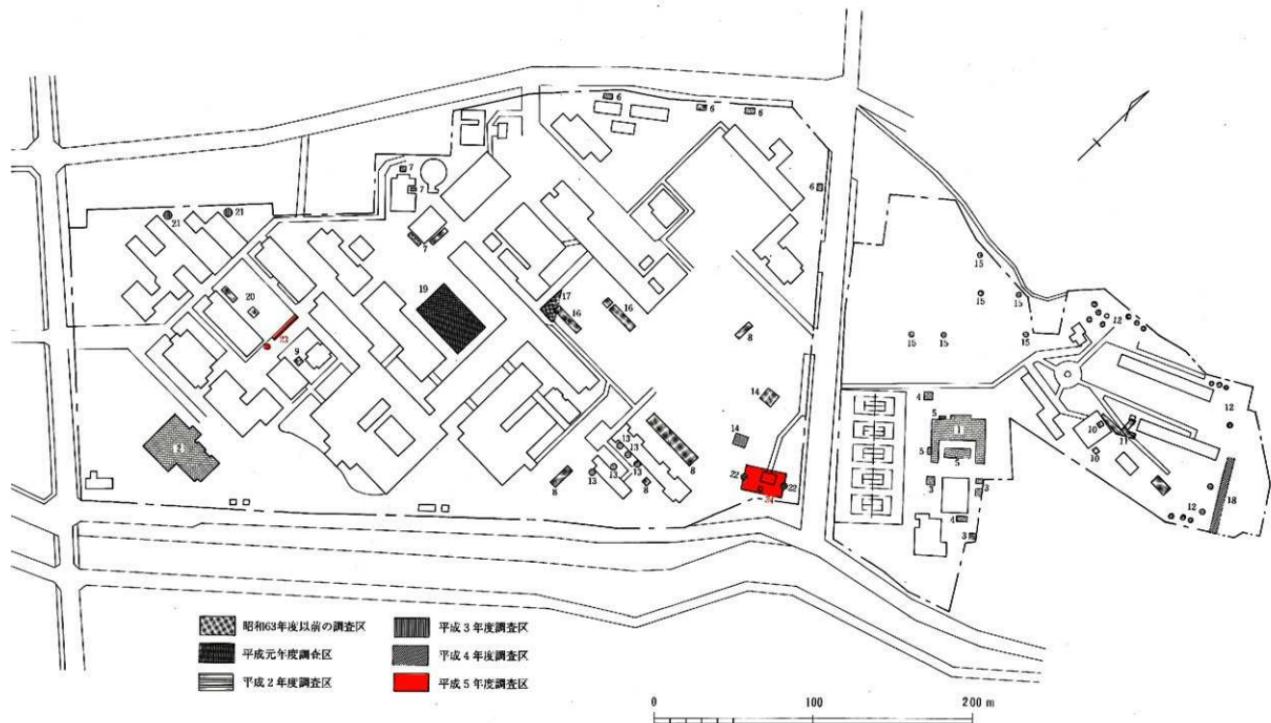


Fig. 80 山口大学小車庫内調査区位置図

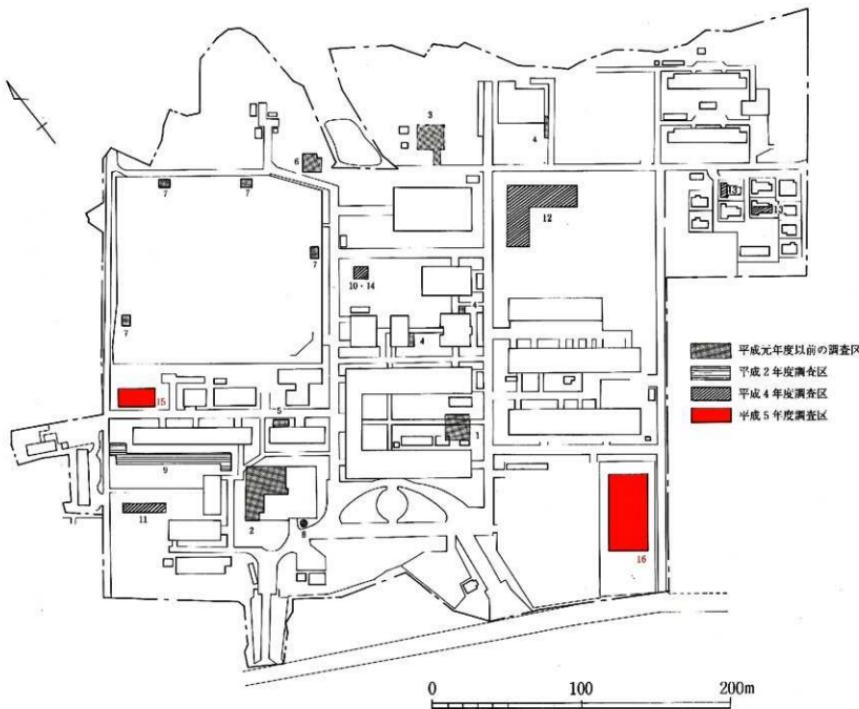


Fig. 81 山口大学常磐講堂内調査区位図

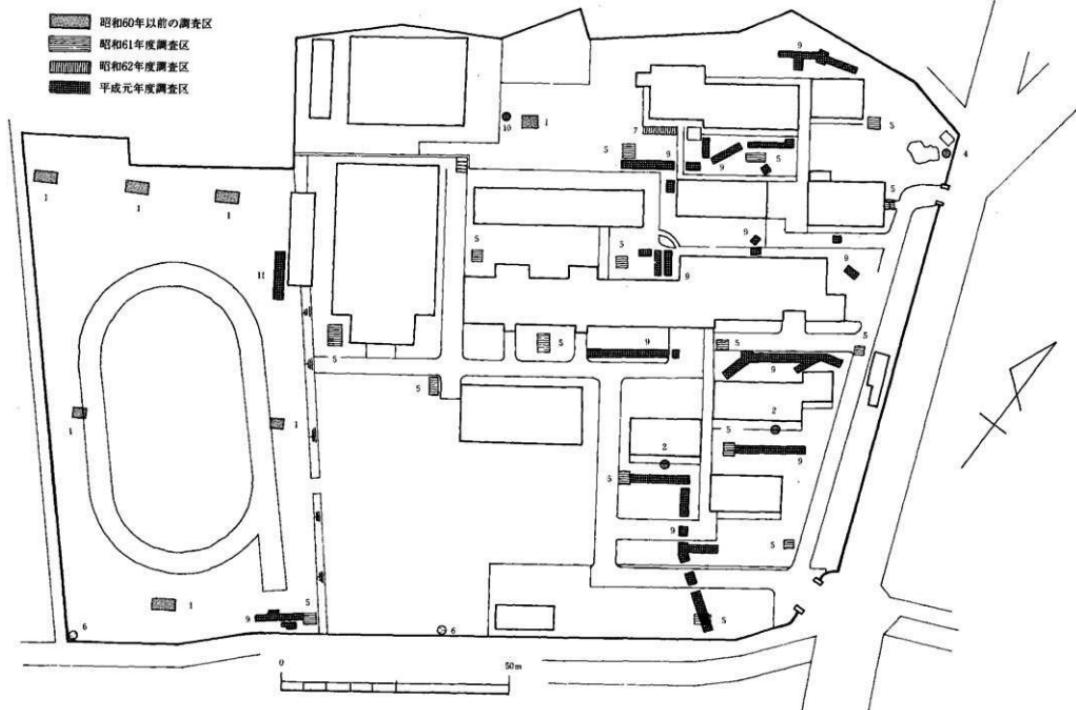


Fig. 82 山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

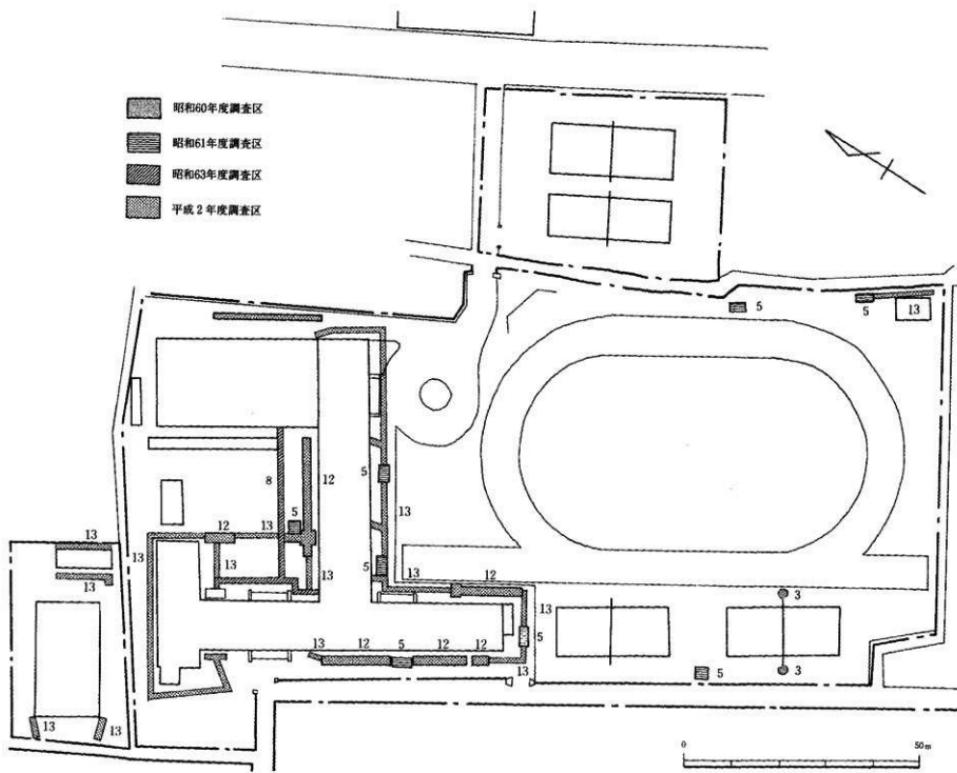


Fig. 83 山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図

- 昭和63年度以前の調査区
- 平成2年度調査区
- 平成3年度調査区
- 平成4年度調査区
- 平成5年度調査区

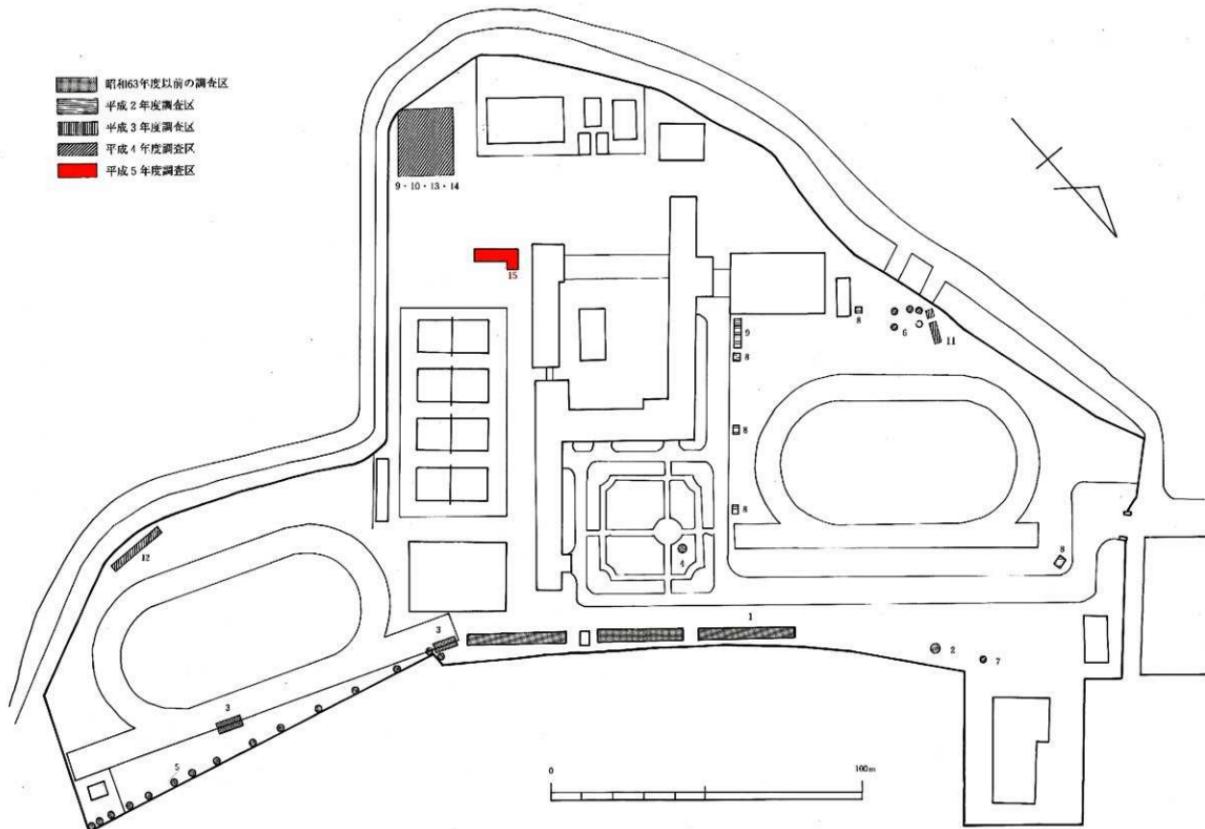


Fig. 84 山口大学光構内調査区位置図

PLATES



北区総合公園（北西から）

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

(1)



(1) 第I調査区調査前全景（南から）



(2) 第I調査区調査前全景（東から）



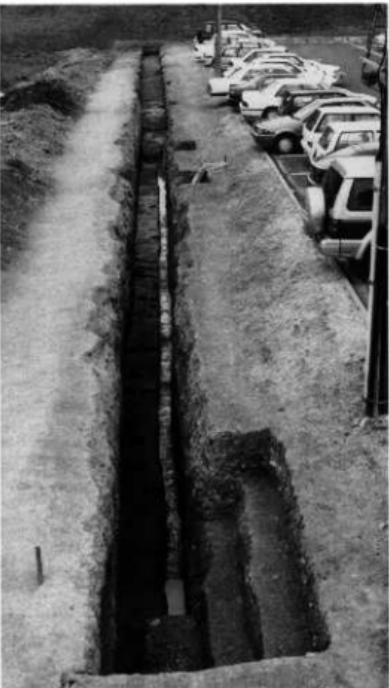
(3) 第I調査区遺構完掘状況（東から）

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

(2)



(1) 第Ⅰ調査区遺構検出状況（西から）



(2) 第Ⅰ調査区遺構完掘状況（西から）



(3) 第Ⅱ調査区完掘状況（東から）

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

(3)



(2) 第Ⅰ調査区SX-01付近土壤土層断面



(1) 第Ⅰ調査区東端土壤土層断面



(4) 第Ⅱ調査区南端土壤土層断面



(3) 第Ⅰ調査区近世大溝付近土壤土層断面

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査
(4)

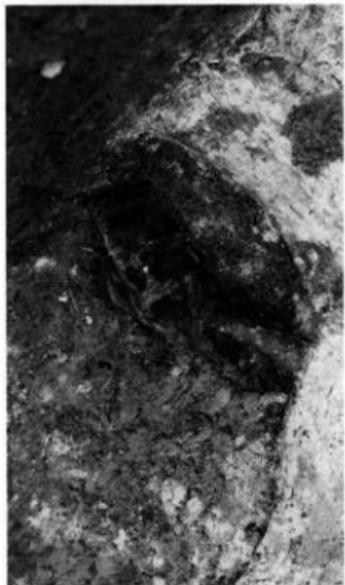
(4) 第I調査区上段部分 Pit-03・04・05完掘状況 (南から)



(2) 第I調査区上段部分 Pit-03・04検出状況 (南から)



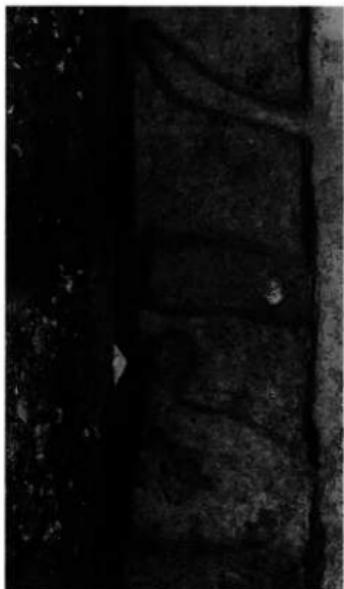
(1) 第I調査区上段部分 Pit-01・02完掘状況 (北から)



(3) 第I調査区上段部分 Pit-04足継出土状況 (東から)

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

(5)



(1) 第 I 調査区下段部分溝群検出状況（南から）



(2) 第 I 調査区下段部分溝群完掘状況（南から）



(3) 第 I 調査区下段部分柱穴群検出状況（西から）



(4) 第 I 調査区下段部分柱穴群完掘状況（西から）



(1) SX-01出土遺物



(2) Pit-04出土遺物(1)



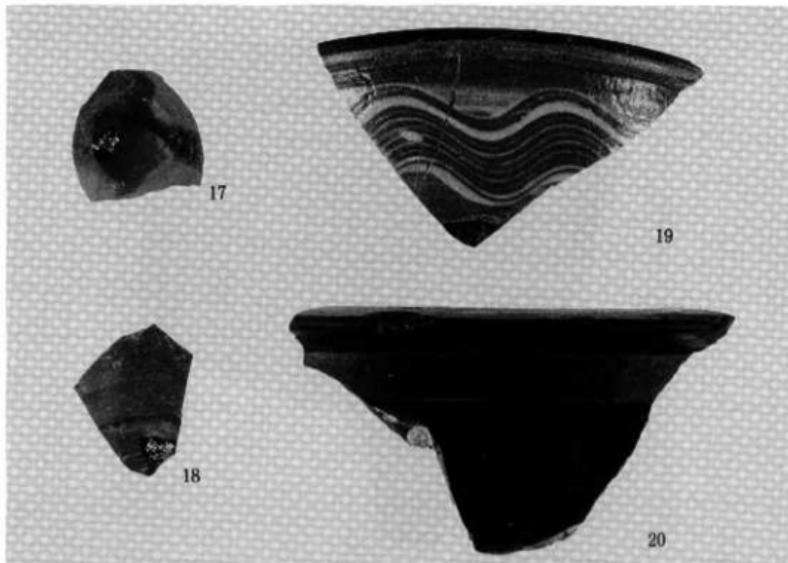
(3) Pit-04出土遺物(2)

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

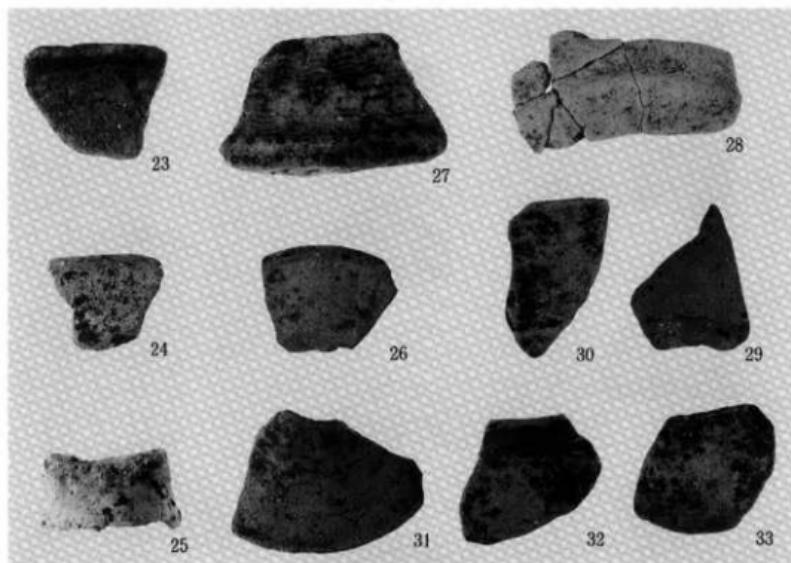
(7)



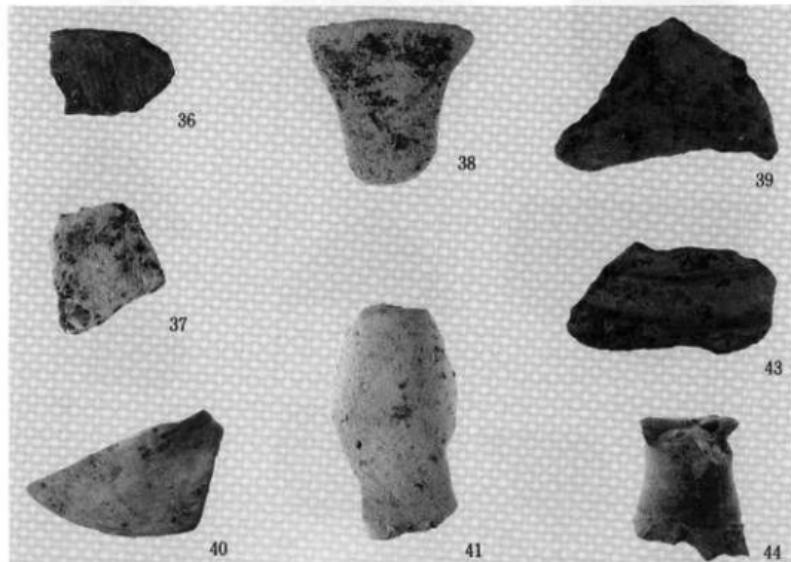
(1) 第I調査区上段部分遺物包含層出土遺物



(2) 第I調査区上段部分遺物包含層出土遺物



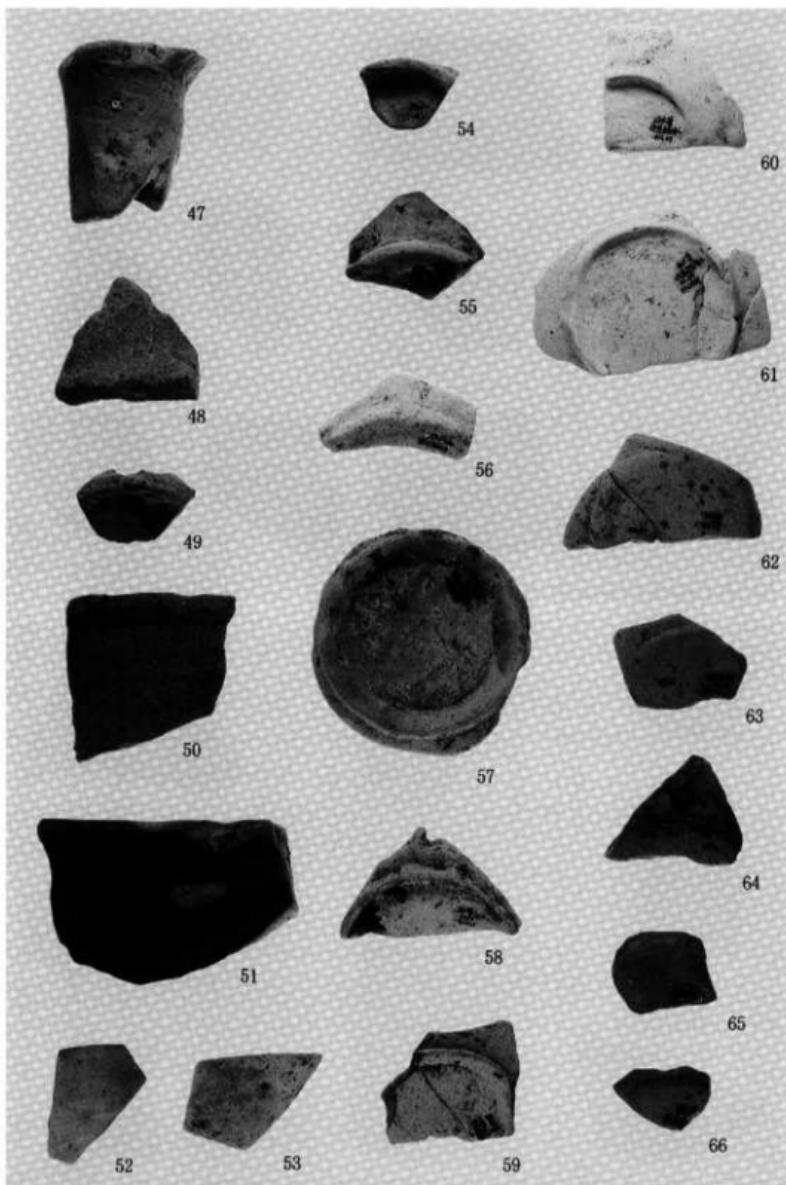
(1) 第I調査区下段部分遺物包含層III出土遺物



(2) 第I調査区下段部分遺物包含層II・II'出土遺物

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

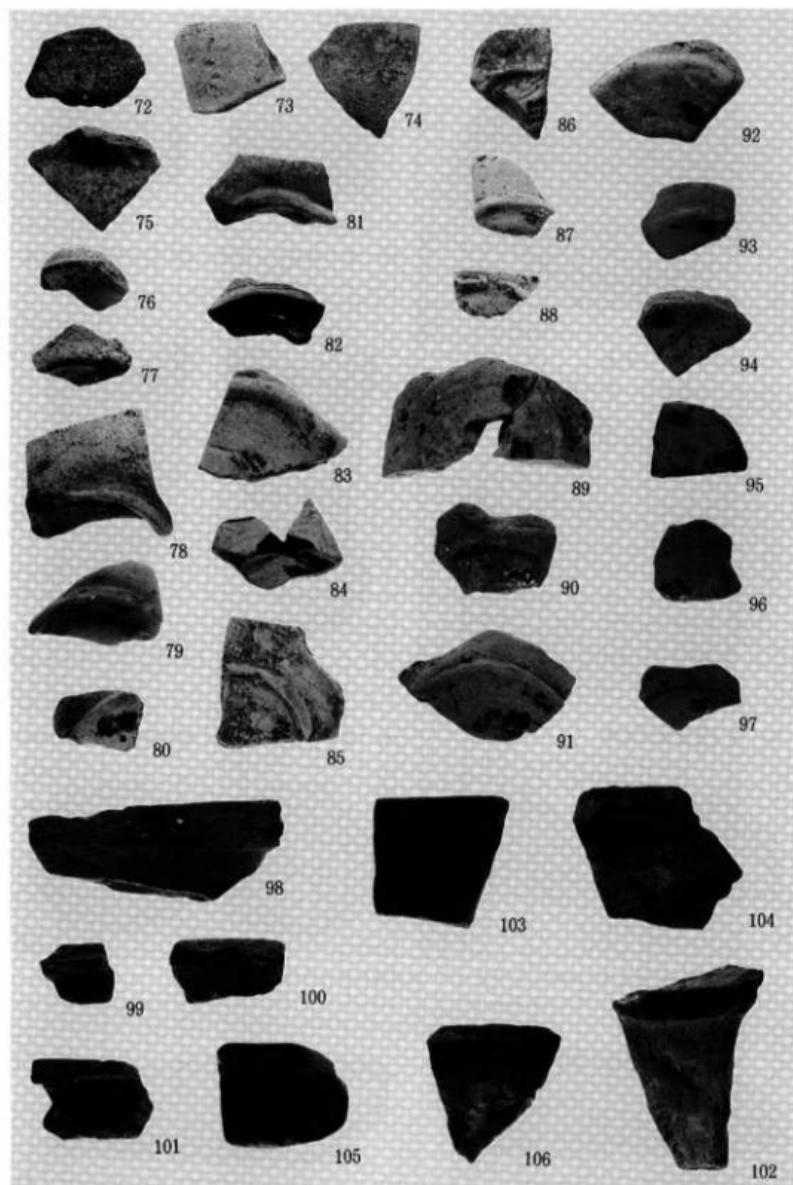
(9)



第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅱ出土遺物

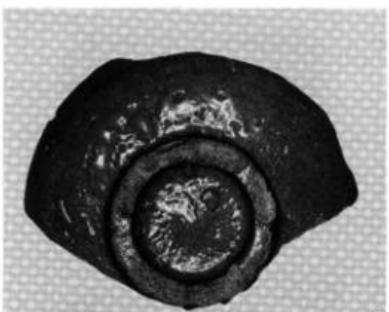
吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

(10)

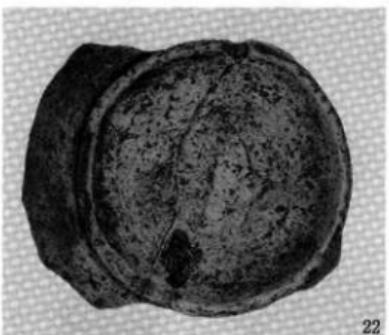


第 I 調査区下段部分遺物包含層 I 出土遺物

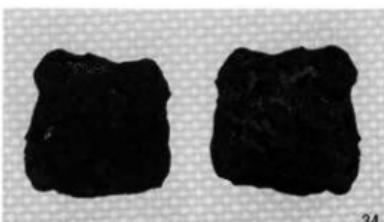
吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査



(1) 近世大溝出土陶器



(2) 第2号溝出土遺物



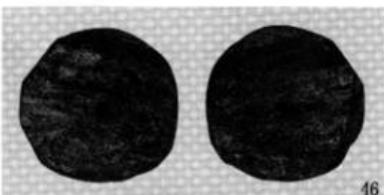
(3) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ出土鉄鏃



(4) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ'出土鉄鏃



(5) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ・Ⅱ'出土滑石製有孔円盤

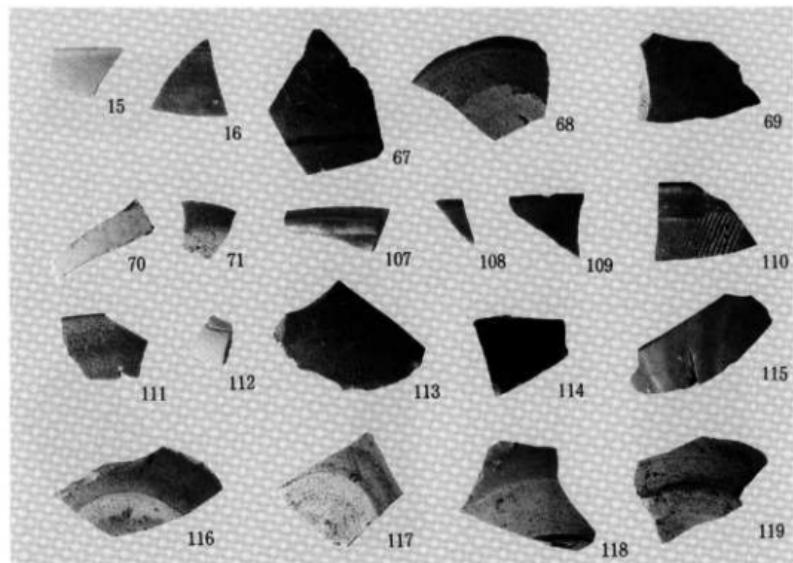


(6) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ"出土滑石製模造品鏃

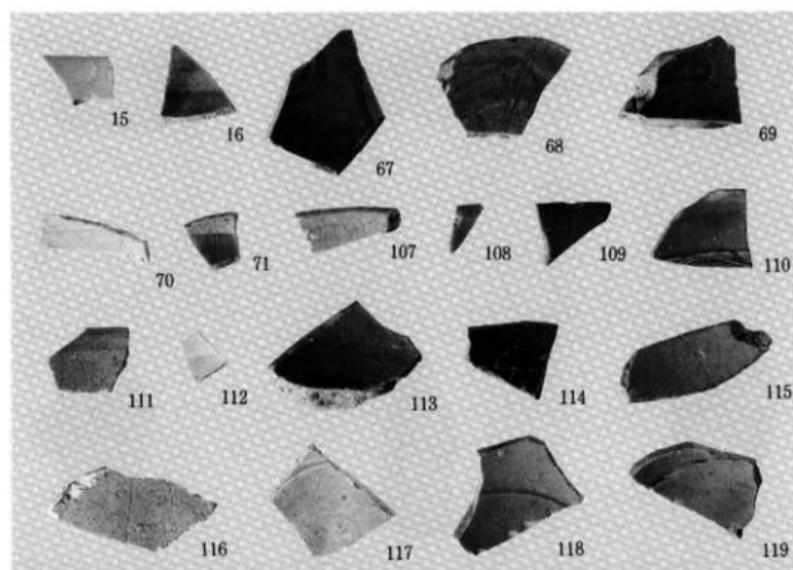
吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

(12)

(表)



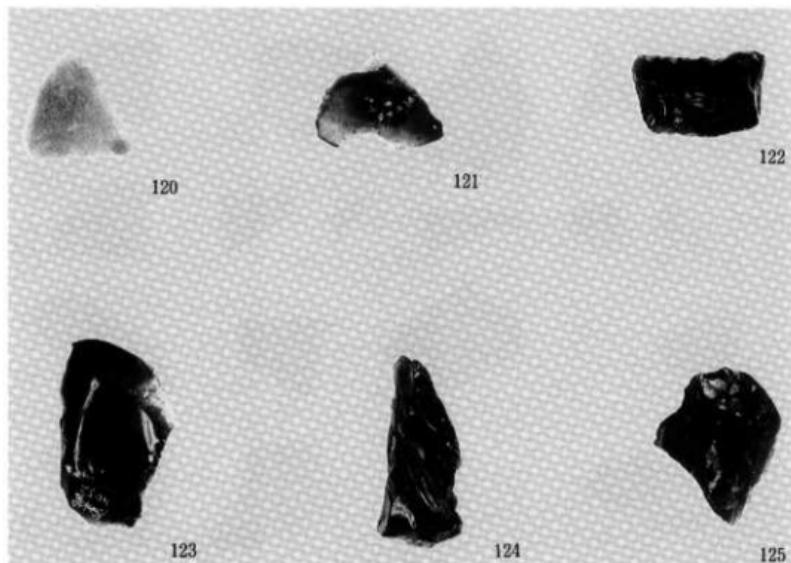
(表)



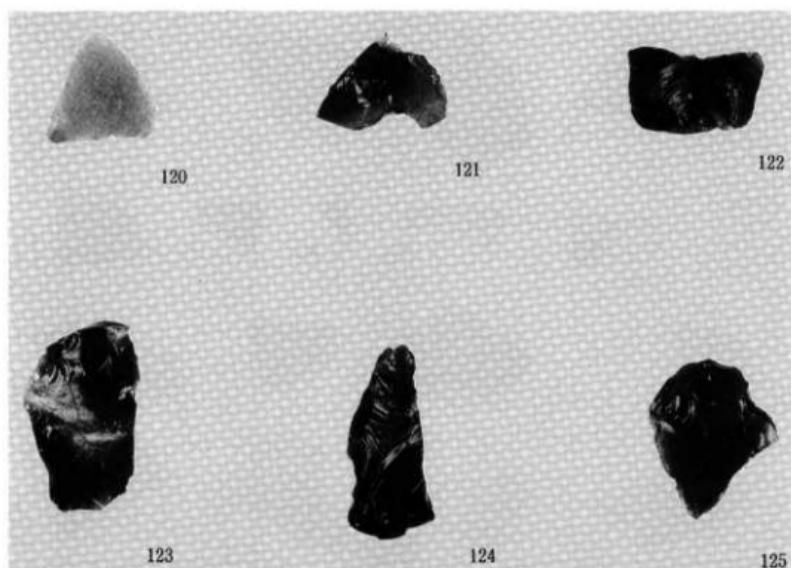
第 I 調査区遺物包含層出土青磁・白磁

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

(13)



(表)



(裏)

第I調査区遺物包含層出土石器

吉田構内第2屋内運動場施設新宮に伴う試掘調査

(1)



(4) Dトレンチ全景 (東から)

(3) Cトレンチ全景 (東から)



(2) Bトレンチ全景 (東から)

(1) Aトレンチ全景 (東から)



吉田構内第2屋内運動場施設新營に伴う試掘調査

(2)



(1) A レンチ北壁土層断面

(2) B レンチ南壁土層断面



(3) C レンチ北壁土層断面

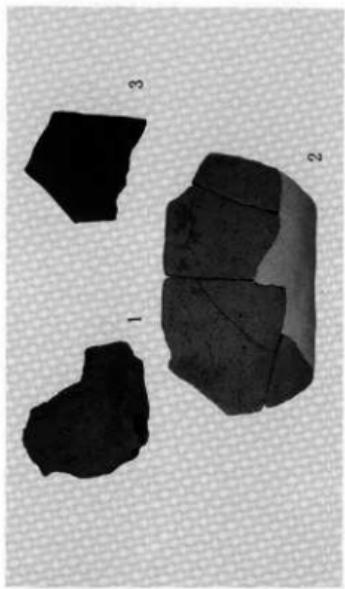
(4) D レンチ南壁土層断面



吉田構内第2屋内運動場施設新営に伴う試掘調査

(3)

(4) 大溝出土遺物



(2) 大溝全景(南から)

(3) 大溝土層断面(北から)

(1) 大溝全景(東から)





吉田構内統合移転当時全景（昭和40年頃）

吉田遺跡第I地区D区の調査

(1) 第4・7地点全景(南西から)



(2) 第3・6地点全景(南西から)



(3) 第1・2・5地点全景(南西から)



(1) 吉田遺跡第I地区D区の全景(南西から)



吉田遺跡第I地区D区の調査

(2)



(1) 第1・2地点全景(南西から)

(2) 第2地点調査風景(南西から)



(3) 第1地点北壁土層断面

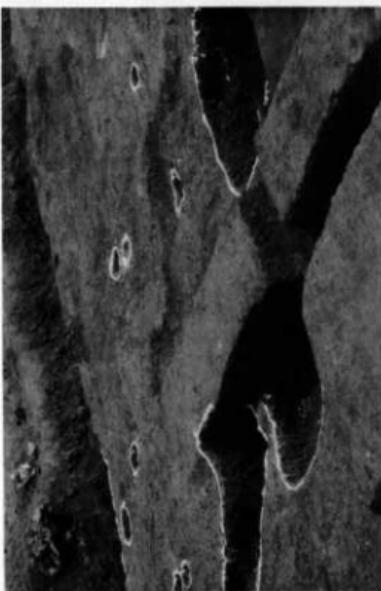
吉田遺跡第一地区 D 区の調査

(3)

(1) 第3地点遺構完掘状況（南西から）



(2) 第3地点第2・3号土壙（南西から）



(3) 第3地点堅穴(住居跡状遺構の西脇？)(南西から)



吉田遺跡第I地区D区の調査

(4)



(1) 第4地点竪穴住居跡状遺構（南西から）



(3) 第4地点東西トレンチ北壁土層断面（火山灰の再堆積層）



(2) 第4地点第1号土坑（南西から）



(1) 第5地点全景（南から）



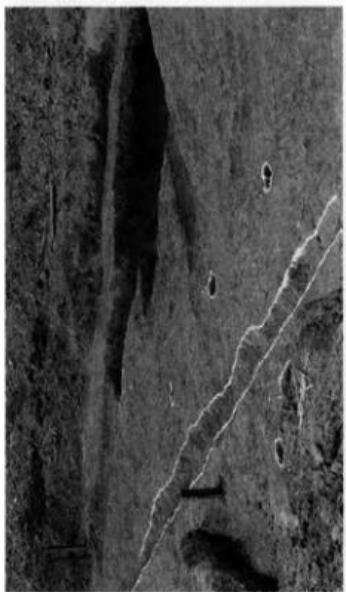
(2) 第5地点南東-北西トレンチ南壁土層断面（溝状造構）



(3) 第5地点溝状造構弥生土器出土状況（北東から）

吉田遺跡第I地区D区の調査

(6)



(1) 第6地点溝状遺構（東から）



(2) 第6地点東西トレンチ（西から）



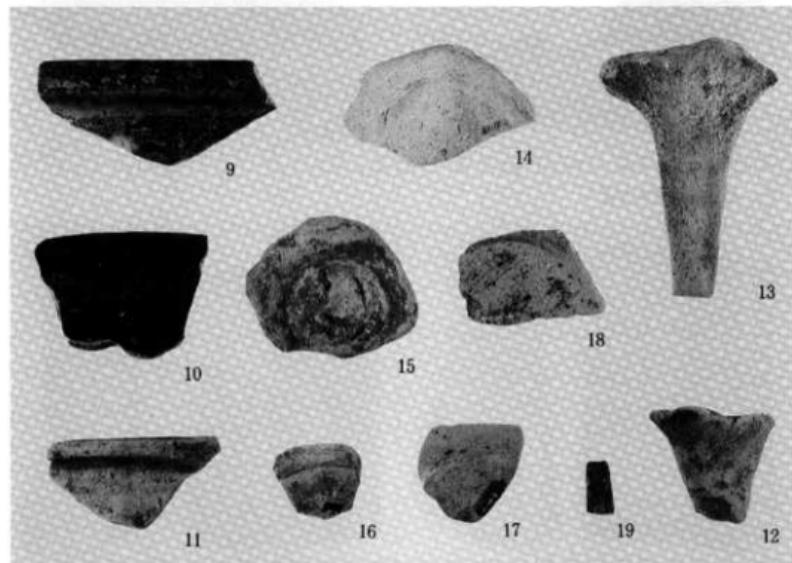
(3) 第6地点東西トレンチ北壁土層断面（落ち込み西肩）



(4) 第6地点東西トレンチ北壁土層断面（落ち込み西肩）



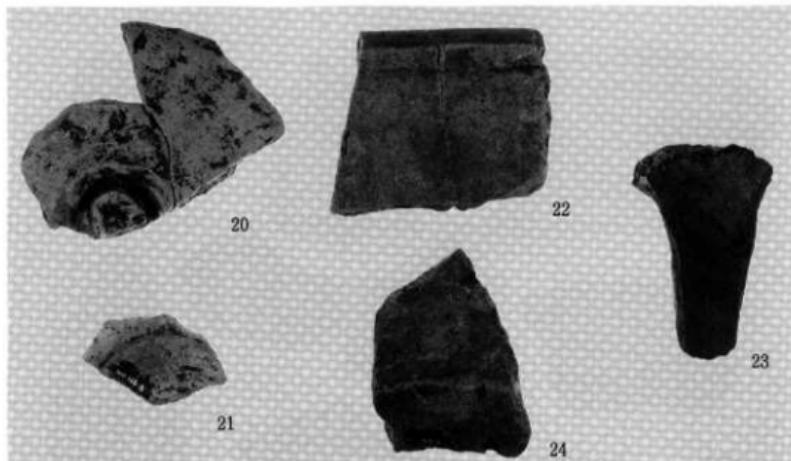
(1) 第1地点出土遺物



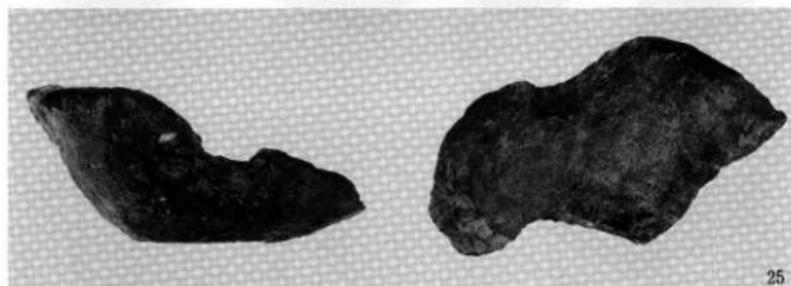
(2) 第1地点出土遺物

吉田遺跡第I地・D区の調査

(8)



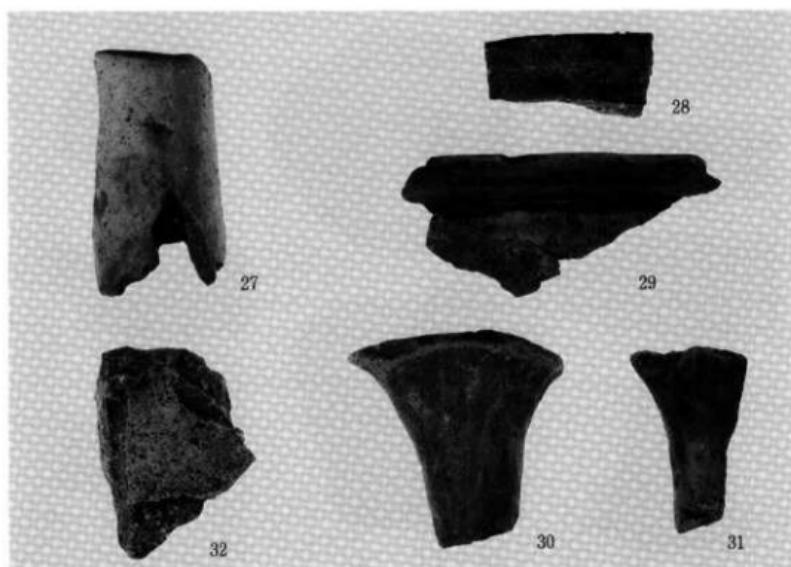
(1) 第2地点出土遺物



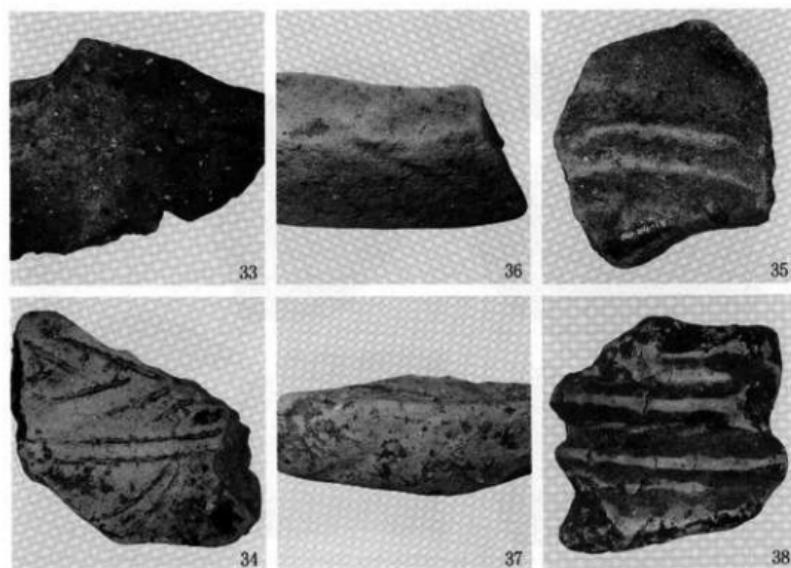
(2) 第2地点出土石器



(3) 第2地点出土砥石

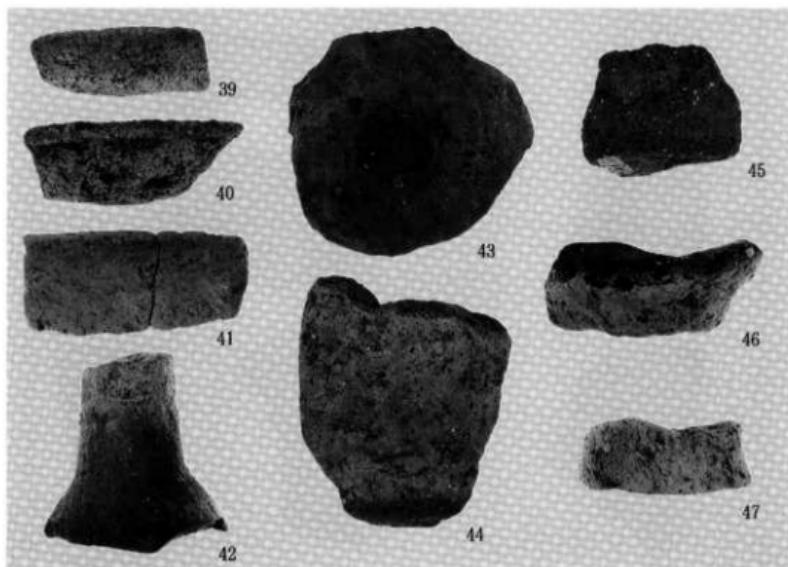


(1) 第3地点出土遺物

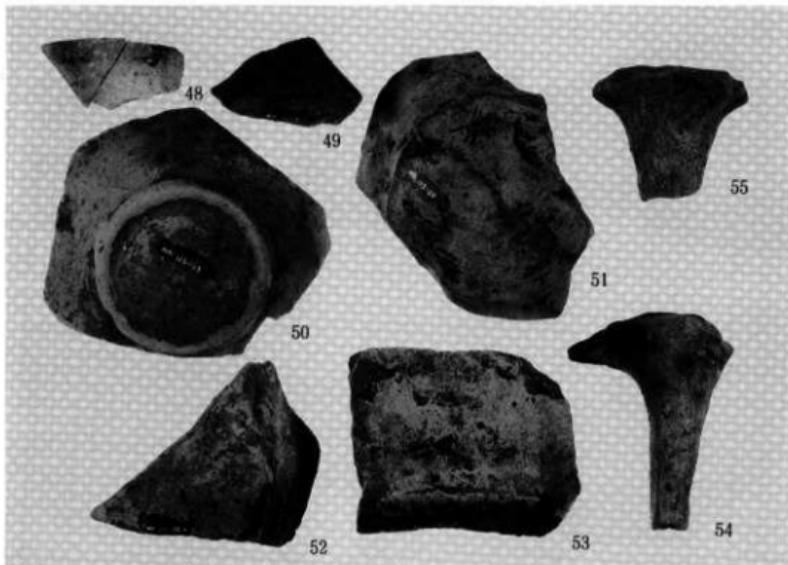


(2) 第4地点出土遺物

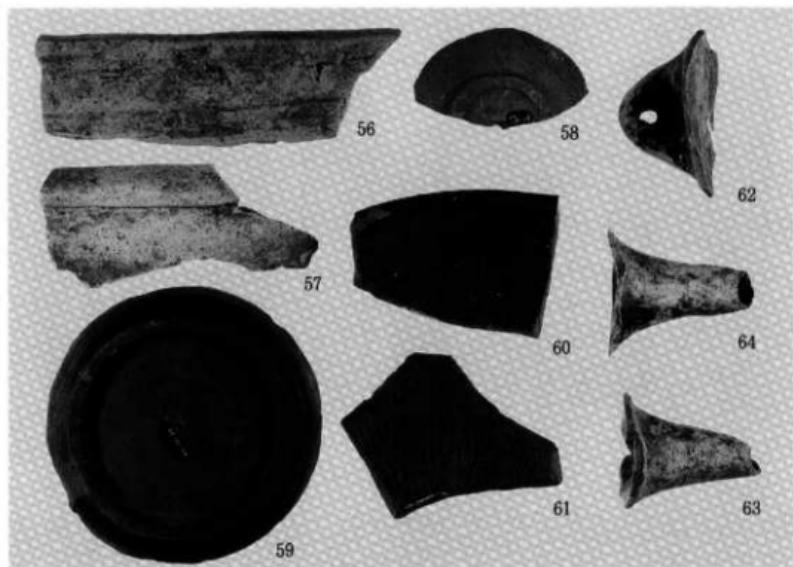
吉田遺跡第I地区D区の調査
(10)



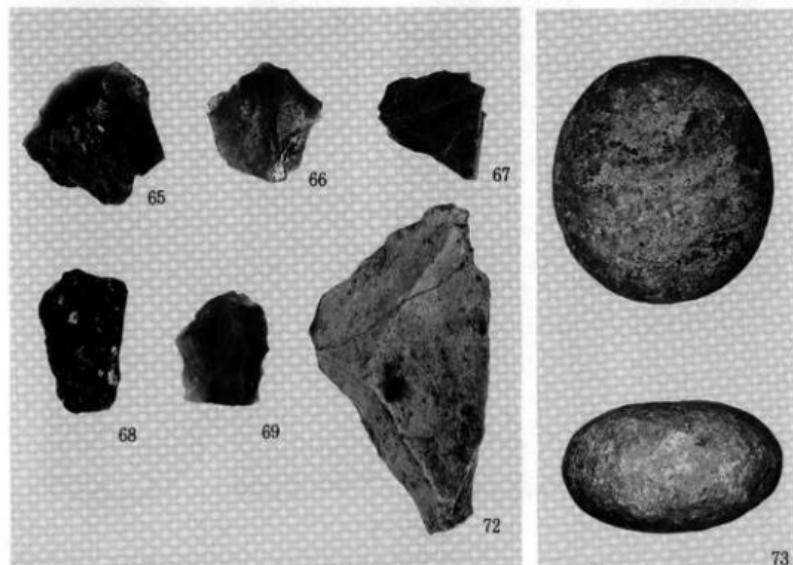
(1) 第4地点出土遺物



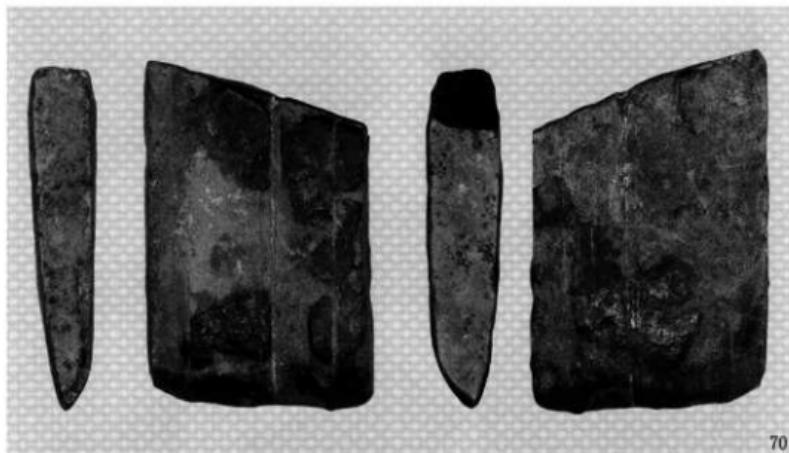
(2) 第4地点出土遺物



(1) 第4地点出土遺物



(2) 第4地点出土石器



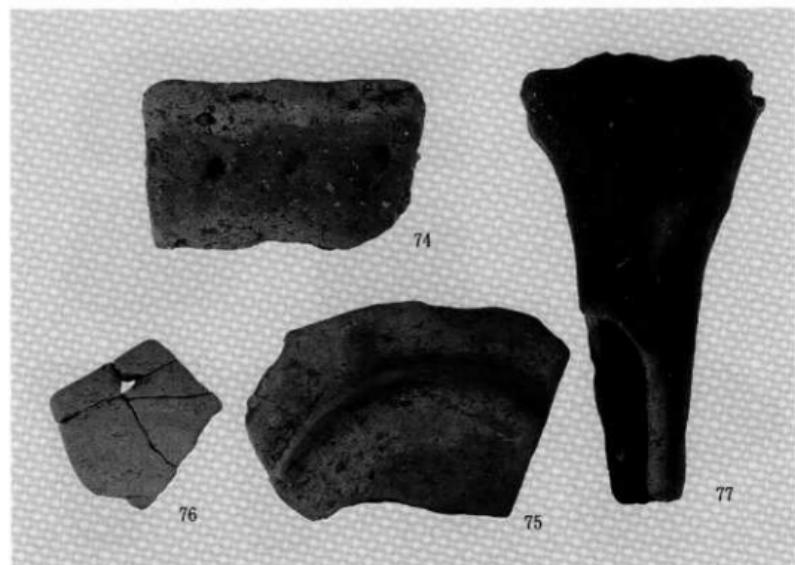
70

(1) 第4地点出土扁平片刃石斧

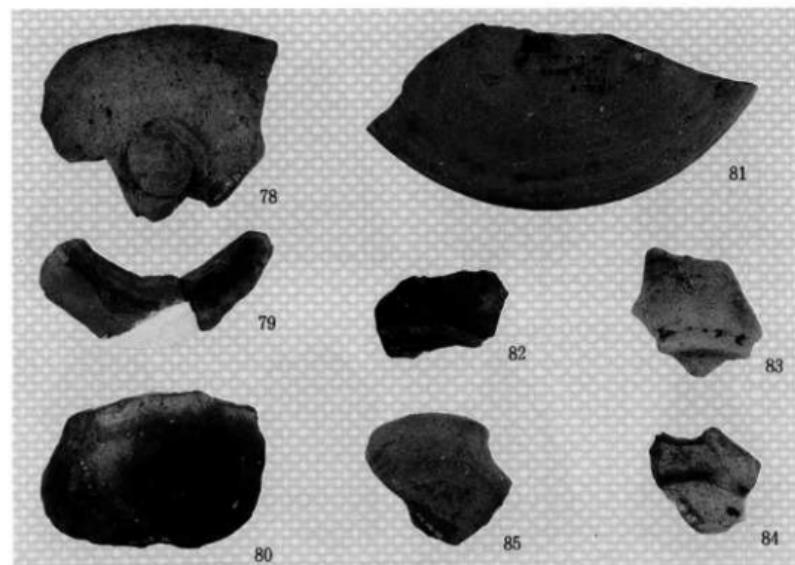


71

(2) 第4地点出土砥石

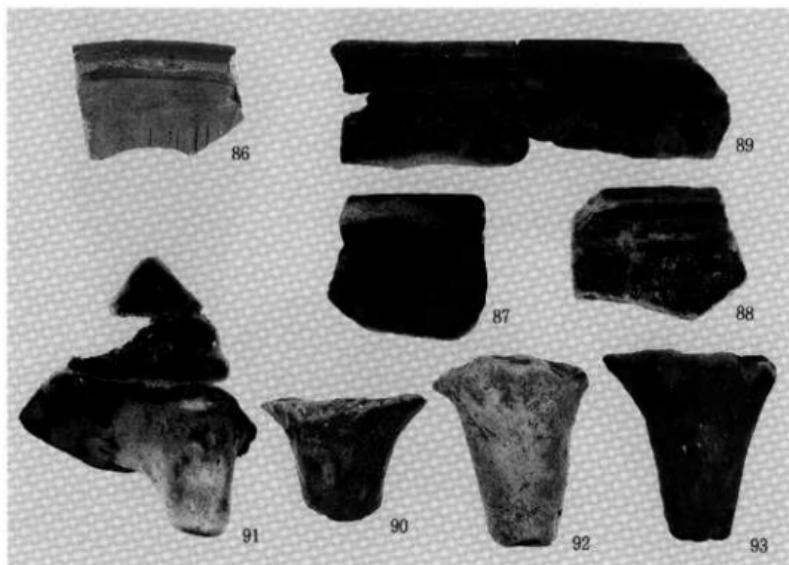


(1) 第5地点出土遺物

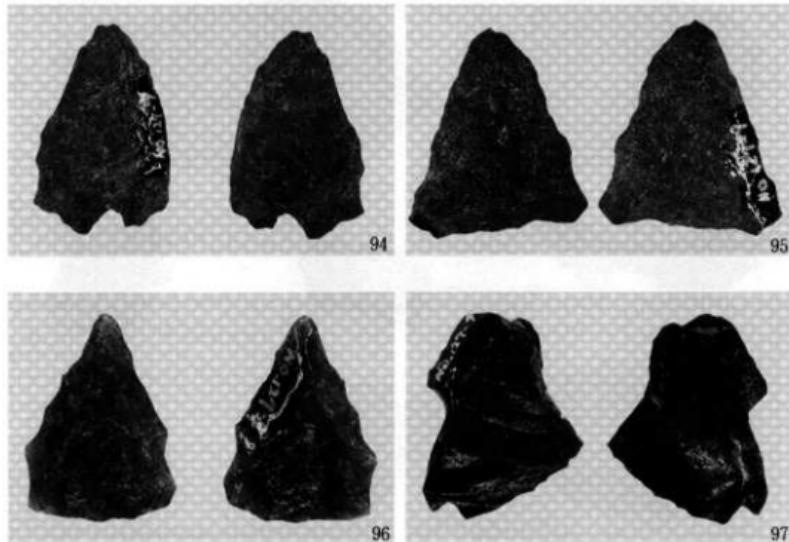


(2) 第6地点出土遺物

吉田遺跡第I地区D区の調査
(14)



(1) 第6地点出土遺物

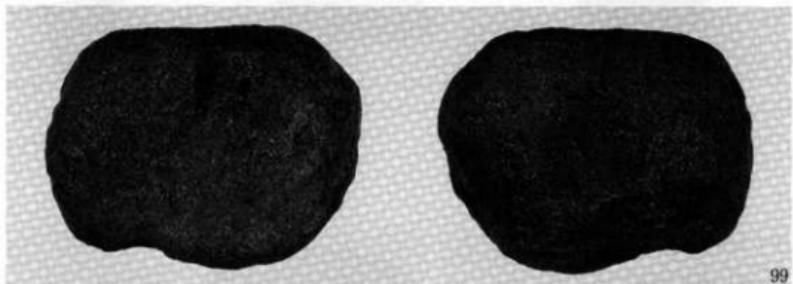


(2) 第6地点出土石器



98

(1) 第6地点出土石斧



99

(2) 第6地点出土くぼみ石

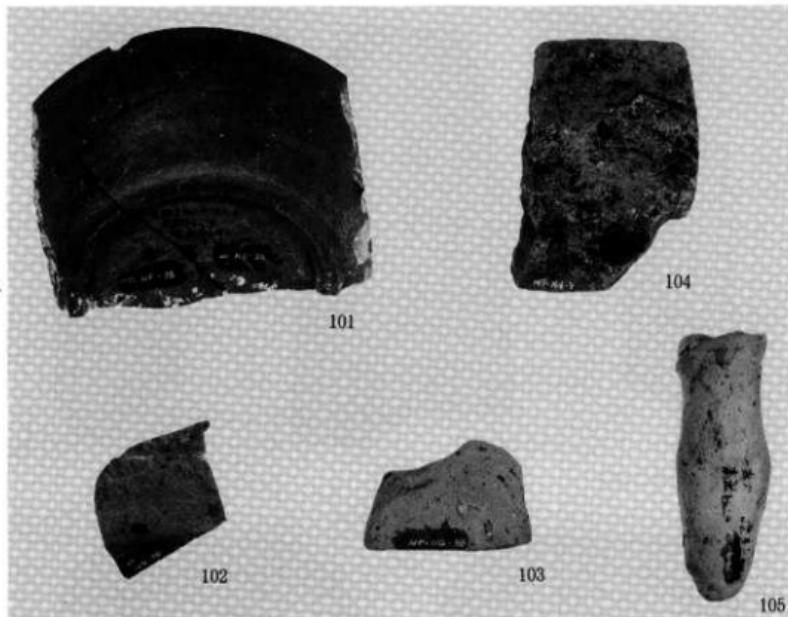


100

(3) 第6地点出土くぼみ石

吉田遺跡第I地区D区の調査

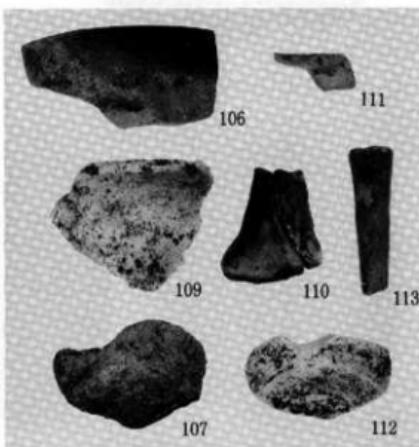
(16)



(1) 第7地点出土遺物



(2) 出土地点不明泥生土器（第5地点？）



(3) 出土地点不明遺物

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ

平成7年3月

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753 山口市大字吉田1677-1

印刷 (株)二共印刷

〒755 宇部市西中町11-11

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHERS AND STUDIES
AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol.XIII

CONTENTS

Chapter

I	General outline of the project on the Yamaguchi University campus in 1994	1
II	Excavation on the feed farm of the faculty of agriculture, located behind the administration building of the university, in relation to planning of laying water-supply pipes	5
III	Trial excavation in relation to the construction performed on the Yamaguchi University campus	33
IV	Examination under construction performed on the Yamaguchi University campus	45

Appendix

I	Official report for the former archaeological excavation carried out in 1971 at area ID of the Yoshida Site.	65
II	The Collection of Yayoi Pottery in Yamaguchi Prefecture — The Early Yayoi Pottery excavated at the Shoji site in the City of Yamaguchi —	103

The gist of researches and studies at Yamaguchi University

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum.....	117
Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum Management Committee	118
List of researches in Yamaguchi University	120
Summary	129

Published by

Yamaguchi University Archaeological Museum
Yamaguchi, 1995.